其の後に於ては、又大將自ら努めて其の名譽を避けんとした。

然しながら彼は新島帝國の發展の爲めに、秘かに努力しつゝある大政治家である。而して此の大政治家が、偶然にも平和に貢獻せんとする英、米佛三ヶ國の締結せる、仲裁々判條約の調印の日に於て、來訪せられたと云ふ事實は、眞に意義なきことではあるまい。

彼は戰爭の產物としての特種ではあるが其の人は又平和の愛好者でもあるから、吾人は大將に向つて衷心歡迎の意を披瀝せねばならぬ。

米國は裝甲鈑を日本に賣つたことはない

いが、與つたことはある

八月四日附ピッツバーグ市のデスパッチ紙は恁う書いて居る。

日本海々戰の勇將東鄕大將は、或は當ピッツバーグ市に來訪するかも知れぬ。それに就て我が商業會議所では、國務卿ノックス氏と自ら打ち合せ中であるが、最近同氏よりの通報によると、未だ十分には決定してゐないが、多分其の旅行日程を繰り合せて、當市來訪は事實となつて表はれるかも知れぬとのことである。

會議所の云ふ所によれば、東鄕大將の當地訪問の目的は、單に社交的の立場と、工業上の視察にあるらしいとのことである。併し吾人の觀るところでは、大將の來遊の意を唆るものは、恐らくホームステットの製鋼所の存在であらう。

素より表面は、之も單なる見物であらうけれども、其の實、大將は右の工場を視察し、要すれば裝甲鈑の契約注文にあるのではなからうかと云ふものもある。

因に同所長エス・エス・ウエールズ氏の昨夜の談によれば、既に大將の爲めに歡迎宴の準備をしてゐるとのことである。

記者同氏に問ふ。

『今までに裝甲鈑を日本に賣つたことがあるか？』

氏答へて曰く、

『否、まだ故意に賣つたことはない』

それは何の意かとの問に對し、氏は曰く、

『若干の鋼鈑を露西亞に賣つたところが、それが先年の戰爭で偶然にも日本の手に渡つたことがあるからだ』

記者更に問ふ

『それならば、他の會社で日本に裝甲鈑を賣つたことはないか』と
氏は斷乎として答へた。曰く、
『否々、若し日本が戰時に、之を受けてゐたとすれば、賠償金の若干は、當然我が手に入る筈だつたが、不幸にしてそのやうなことはなかつた。呵々』

歡迎も其の限度を過ぎるな

八月四日附紐育市のモーニング・スター紙は次ぎの如く述べてゐる。

東郷大將は我が國賓として來訪した。吾人は日本最高の海軍將官として又日本海々戰の英雄として、彼に對し相當の厚情と敬意とを拂ふべきである。併し多少考慮せねばならぬことがないでもない。それは外でもない大將に對しての優遇に就てのことで、要は其の度を越えてはならぬといふことである。卽ち太平洋の通商上、將た又海軍の對抗者として吾人は日本に對して相當の確信を有してゐる。其の念慮を放棄してまで、之を行ふの必要はないと考へる。政府としては、外國の珍客を遇するといふ程度に於て彼を歡迎することは決して惡いことではない。換言すれば日本の海軍の代表者として彼を招待し歡迎する程度にするのは寧ろよいことゝ思ふ。併し程度以上の熱心さを示すことは惡い了見であり、政府の威信に關する問題である。

政府の彼に對する優遇振りに關してはこれからを越えた場合に於ては、或は米國は日本の海軍を怖れてゐるとの嘲笑を買ふかも知れないといふことを忘れてはならぬ。

英雄崇拜は必ずよいとは云はぬが、東郷大將の場合は例外である

八月四日附紐育のユニオン・アドヴァタイザー紙は次の如く述べてゐる。

東郷大將は來た。日本の偉大なる提督は、世界漫遊の途次我が國を訪づれたのだ。此のプログラムは、大將が日本を代表して、英國の戴冠式參列の爲め、故國出發の際から決定されてゐたものである。

彼がこれから往くところの各地に於ては、悉く衷心歡迎せられるであらうことは勿論である。

彼が平時竝に戰時に於て、その艦隊の長官として獲得せる名譽は、世界の等しく知るとこ

ろであつて、眞に偉大なる海將と讃美の聲を放たないものはない。米國人も亦日本海々戰の大捷以來彼を崇拜することに於て、人後に落ちなかつた。

日本人は彼を神として崇敬してゐるさうだが、米國人も亦その點では之に劣るものではない。だから彼れの滯在中、文字通りの國賓として優待せらるゝであらう。即ち或は充分なる饗應或は其の他の方法に依つて歡待せらるゝであらう。而して政府及び公共團體の此の種の催ほしは、一面に於て國民全般の意志を表示してゐるものである。

此の好感情は、恐らく大將が到着前に我が國民に與へた彼の聲明書に云ひ表はされたもの以上に出ることは蓋し出で得ないであらう。その一齣に曰く、

『余が足跡の一步を米國に印するとき、余は必ずや貴國民が我が最善の良友たるべきを、如實に見ることが出來やう。云々』と。

吾人は近來の日本の進步に關して、多大の興味を以て觀てゐる。抑は日本が西洋諸國の近代的文明の方向に向つて邁進を試みるに至つたのは、曾て我が國民が、最初に之に新しい手引を授けたことに職由するからであつて、同時に今や其の日本が出藍の才能を發揮してゐるのを見て、自ら大に誇りとしてゐるものである。

而して今玆に東郷大將の名譽を表彰し得る時機に際會し、彼がその故國を代表してゐることに思を走らせるとき、吾人の感慨は一層深きを感ぜざるを得ない。

とは云へ、吾々は彼が彼の力を以て日本をして、東洋の大立物たらしめた功績を、何等否定するものではない。

由來英雄崇拜は、必ずしも常に賞めたことではないが、東郷大將に關する限り、全く之を適用して謬りのないことを確信する。

戰時中日本の外務省は三笠艦上に

八月四日の各新聞を綜合して見ると、彼等米人は東郷大將を政治家と見てゐるやうである。今編者の之に對する所見を述べて見たい。

東郷大將を以て大政治家となし、或は這般の訪問に於ては、社交大使などゝ云つてゐるのはまだしものこと、同日のワシントン・タイムスは、其の社說の一齣に於て左の如く云つてゐる。

『日露戰爭中は全期を通じて、日本の外務省は事實三笠艦上にあつたと傳へられてゐる。

されば東郷大將は、海軍に於ける練達の士であるばかりでなく、外交上に於ても同樣傑出してゐる』と。

其の他多くの新聞にも、政治家、外交家と見てゐるものが尠くない。從つて米國へ最初の到着の機會に於て、新聞記者や接待員から、英米佛の仲裁々判條約や、モロッコ問題、對露政策などを訊いたのも、無理はない。

之は主として米國其の他西歐の將軍達を見ると同樣の目を以て之に對した結果であつて、敢て怪しむに足らざることながら、上記の如く見たことは、大將の日清戰爭に於ける高陞號事件、北淸事變に於ける諸外國との接渉、日露戰爭に於ける旅順封鎖宣言等から想像を逞ふした結果ではなからうかと思はれる。

東郷大將が艦隊を率ゐて來襲せば……

八月四日附ジエームスタウン市のポスト紙は、こんなことを書いてゐる。

日本海々戰の捷報一たび傳はるや、日本皇帝は優渥なる勅語を大將に下し給ひ、

『祖宗ニ對フルヲ得ルヲ懌ブ云々』と前提し、且つ宣はく、

『前途ハ猶遼遠ナリ、朕ハ汝等ノ忠烈ニヨリ戰果ヲ全フセンコトヲ望ム』

と結ばれてゐる。

大將は最も謙遜なる章句を以て、之に答へてゐる。

『豫期以上ノ成效ヲ獲タルハ、一ニ御聖德ト歷代神明ノ加護ニ依ルモノニシテ、人爲ノ克クスベキトコロニアラズ。吾等一層奮勵以テ聖旨ニ對ヘ奉ラン。』

此の勅答に見るも、東郷大將の皇帝に對する忠誠の非凡なるを想起し得べく、同時に大將が古代的日本の偶像敎信仰者たることをも認め得るのである。のみならず尙ほ大將の人道的であつたことは、此の大戰後、降將ロゼユトウエンスキーを佐世保の病院に見舞つた、あの有名なる美談に依つて十分に之を立證することが能きる。

彼は日本の他の偉大なる政治家又は陸軍々人に見る如く、其の國運の隆昌發展に關して並々ならぬ努力を拂つてゐる。從つて近時國民擧つて、彼等の唱道に和し、一意其の方面に力瘤を入れるやうになつた。

由來米國人は、日露戰爭中の日本の諸英雄が、とつた其の行爲を除外例なしに賞讃するものではないが、東郷大將に關する限り、之を尊敬し之を歡迎してもよいと謂つて差支ない。

少くとも現在彼が有する地位と行爲に對し、能ふ限りの優遇をしてもよいと思ふ。

若し又將來兩國の間に不幸の事が起つたとして、彼が其の艦隊を率ゐ、大擧して太平洋に押し寄せて來るとしても、今平和の中に彼と知己になつて交ることが、何等吾人に於て損失はない。

世界第一の名提督

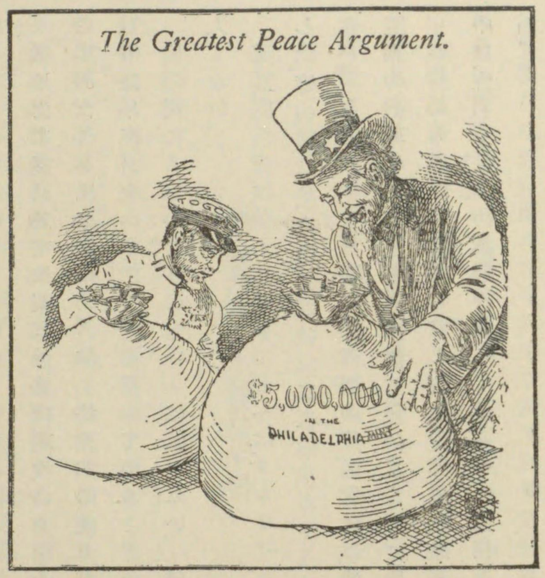
八月五日バーミンハム市のエージ・ヘラルド紙は次の如く書いてゐる。

海の英雄、海の大偉勳者東鄕大將は、今や我が國に來た。其の十七日間の滯在中は、最も華かなる凱旋式を以て迎へらるべきが當然である。

眞に近代に於て、大將程偉大なる功績を擧げた海の大將は、之を世界のどこに求めても他に見ることは能きない。少くとも近代的裝甲艦を以てせるあのやうな大海戰も、又あのやうな大勝を贏ち得たこともありはしない。

大將の名は、日清戰爭で支那の軍艦を擊破したことに始まり、日露戰爭では先づ露西亞の強大なる東洋艦隊を旅順に攻擊し、其の一部を港內に蟄伏せしめた。尙ほ進んで日本海々戰には、ロゼストウエンスキー艦隊を全滅に歸せしめた。然かも當時東鄕艦隊は僅か主力艦三隻しか有たなかつたにも拘らず、其のとき戰鬪の結果、露艦隊は主力艦全部を喪ひ、次で該戰役は終焉を告けた。

此の場合、露西亞の艦隊が勝利を得て、海上權を獲得してゐたとすれば、どうなつたであらうか。恐らく日本は和を軍門に乞ひ、憐れな條件で媾和條約を結んだに違ひない。何となれば、最早日本は、其の陸軍の一兵をも遼東半島へも、朝鮮へも揚陸することは能きなくなつたであらうからであ



最大の獲物！　最も大切なる平和の協定成る！（米紙にあらはれた東鄕大將の漫畫）

る。

然るに事實に於ては東鄕大將は、戰役の全期を通じ、寸時たりとも其の海上權の掌握を放棄に與へたことはなかつた。卽ち終始其の權力をば支配してゐた。吾人は此のことから、該戰爭は早晩日本の手に、榮冠が落ちて來ることを豫想した最大の原因であつた。

他の國にも海の勇將のないとは云へない。併し彼れが如き大成功を見たものも古來一人もない。

支那、露西亞は、恰も我が國で云へば、サンチアゴに於ける西班牙の如き狀態であつた。然し此等の國に於ては、何等彼れに匹敵するやうな大勇將はなかつた。併し西班牙の場合と違ひ、一九〇四年二月頃の露西亞の旅順艦隊は餘程よく整備してゐた。然るに東鄕艦隊は、開戰の劈頭早くも之を、又回復し能はざる迄に擊破した。

如何なる點から觀察しても、彼は世界史上最高の海將である、されば彼が我が國に滯在中は、宜しく最大の歡迎を與へて然るべき資格を十二分に備へてゐるものと謂はねばならぬ。

東鄕、チユエー兩提督の會見は見ものであらう

八月五日紐育ジャーナル紙は、逸早く此の兩雄の會見を豫想して、次の如く述べてゐる。

東鄕大將とチユーエー提督は、共に東洋の戰場に於ける世界的海戰の勝利者であつて、其の名譽は、永久に消えざる文字を以て、名譽の殿堂に壁書せらるべきものであるが、今夜此の東西の兩英雄が、大統領の歡迎宴の席上、白堊館の食卓に於て手を握る機會が來た。

生存せる海の兩英雄の會見は、恐らく莊嚴なる場面を呈するであらう。

(編者註、事實遂に此の光景は見ることが能きなかつた。それはチユーエー提督が宿痾を山地に養つて、在府しなかつた爲めである)

由來英雄は小柄なもの

八月五日紐育ジャーナル紙は、次ぎの如く書いてゐる。

東鄕大將は小柄な人である。歷史の示すところに依れば、由來戰場の勇士、就中其の頭腦を働かせた勇將は、多くは小柄なやうである。

那翁、ネルソン、セルマン、チユーウエイ及び尙ほ幾多の英傑も小柄であつたが、東鄕大將も

亦此の範疇に屬すべき一人である。

數年前、日本の皇帝が、露西亞の滿韓徹兵を必要と認めたとき、東鄕大將に向つて、其の艦隊を集結し、一擧に東洋にある露西亞艦隊を掃討すべきを命じ給ふた。

玆に於て短軀の大將は、その大命を奉じてよく之を敢行し、セントアンドリユーの露國々旗を掲ぐるもの亦少き迄に、その大偉業を成就した。

そこで露西亞皇帝は、更に故國にある總艦に命じて、之を東洋に派遣し、日本の現存艦隊を擊破することに決した。

此の增派艦隊の東洋への航海の途上、世界は擧つて其の前途に囑目した。若し之に依つて勝利が獲得せられたならば、東洋の海上權は露國のものとなつたからである。然るに東洋艦隊の一擧に遭うて、其の運命は決せられて仕舞つた。

米國は由來勇敢な人を好む。從つて東鄕大將をば尊敬措かざるものである。

勿論我が國人の中には、無暗な悲觀論者もゐる。而して此の度の大將の訪問を目して、我が平和を破り、我が繁榮を奪ふが如く、觀察してゐるものもないではない。

ホブリン海軍大佐の如きは、『恐らく大將が密かに若干の艦隊を率ゐて來てゐるのではないか』とか或は彼れの訪問は、『我が海陸の軍事設備を探知したりなどして、米國を占領

するには幾何の海陸軍が必要であるか、幾何の軍費を要するか等を調査するのではなからうか』と疑つてゐるらしい。

併し思慮ある米國人は、我が國人が彼の國を訪問したとき歡迎せられた如く、此の機會に於て彼を優待すべきであると確く信じてゐる。

故に彼等は、此の好機に於て、一層友情を披瀝し、交情を增進することを必要と認めてゐる。されば彼が紐育、華府、アナポリス、ボストン、ナイヤガラ瀑布、其の他到る處の各地に於て、代表的の米國人から、大々的の歡迎を受けることになるであらう。

日本は戰爭を欲せず

八月五日附ニューヘブン市のスター紙は次の如く書いてゐる。

東鄕大將は素より戰士ではあるが、吾人の彼を尊敬するのは、寧ろ彼が平和の要求者たる點に存する。

日本の國民は、徒らに戰爭を欲する國民ではない。彼等は凡ての手段に訴へて平和を要求してゐる。

日露戰爭は、露國から永い間に亘つて仕向けられ、遂に已むなく戰端を開くに至つたもの

である。而かも其の結果に於ては、正義の貫徹に成效してゐる。

吾人が日本を代表する英傑東鄕大將に最高の敬意を拂ふ所以のものは、要するに右の點に就てゞある。

吾人は今此の人を我が國に歡迎し得ることは、實に幸福とするところでもあり、又之を誇りとするところである。何となれば彼は最も道德的であると共に、日頃吾等の信ずる日本國民を代表するからである。

大將は其の限られたる旅行に於て、どこも彼處もを見ることは能きない。而かも其の豫定が未だ確定せられてゐないから、何とも云へないが、少くとも我がニューヘブンを素通りすることはなからうと思はれる。何となれば、同市を視察せぬことは、大將にとりて多大の損失と考へるからである。

米國の新聞雜誌に表れた東鄕大將

紐育の邦字『日米週報』紙は標題の如き見出しで左の如く記載してゐる。

世界歷史を通じての偉人、東鄕大將を此の地に迎ふるの好機を得たるを幸とし、此の偉人の事業が、只口によつて傳はりたるのみならず、記錄として萬世不朽のものが多くある。今之を集めて大將通過の記念とし、之を公表せんとす。

東鄕大將の歷史は、嘗て米國が布哇を併合せんとせしとき、軍艦浪速艦長として大に活動せるに始まり、日淸日露の海戰特に日露の役に於ける日本海々戰は、大將をして一躍世界の大偉人たらしめた。當時傳へられたる紐育新聞記事を集めただけでも、斯かる小新聞には掲げ切れない程ある。されば今其の主なるもののみを摘記することゝする。

因に記す。括弧內の地名は、各其の地よりの通信なることを示す。

紐育サン紙

一九〇五年五月二十七日東鄕大將露國軍艦に會す(倫敦)

五月二十八日東鄕大將の好位置倫敦華府露艦東鄕を擊破せん(露都)東鄕の巧妙なる作戰計畫(華府)東鄕大將の大勝(東京)

同二十九日　東鄕大將全勝す(東京)露艦隊の大敗(芝罘)東鄕の大勝(華府)日本海々戰の不明(露都)露艦上海を去る(露都)海風露艦を惱ます(巴里)

同三十日　日本海の大戰(社說)日本の海上權占有(華府)露艦の大火(倫敦)日本の大勝は、倫敦

紐育に於ける日本公債に大影響を及ぼす(倫敦)平和說歐洲に唱へらる。(倫敦)東鄉大將はネルソンなり(社說)

同三十一日　ロゼストウエンスキーは東鄉大將の捕虜(華府)東鄉大將の報告(東京)華府に於ける平和說(華府)露國の弱點(巴里)

八月一日　戰爭史(倫敦)露帝の御前會議(露都)平和伯林(東鄉を賞揚す(倫敦、伯林)

八月二日　日本は有力なる同盟國なり(倫敦)伊太別國民三十萬人調印して平和を申込む(羅馬)日本俱樂部の祝賀會(同紙記事)

八月三日　平和の進展華府東鄉大將曰く、大勝は陛下の御稜威に依る(東京)

紐育ヘラルド

五月二十六日　露艦の通過(マニラ)

同二十七日　ルーズベルト局外中立を嚴守することを支那に警告す(倫敦)

同二十八日　海戰に就て(東京)

同二十九日　日本の大勝(倫敦)

五月三十日　東鄉大將の報告華府佛國平和に傾く(巴里)露艦の前途に望なし(伯林)

紐育タイムス紙

平和の使者東鄉大將（米紙漫畫より）

以上二大新聞の報告と大差なく、而かも殊に同紙の特色たる日曜附錄には、大將の記事非常に多く、尙ほ同年九月十七日、十月七日、同十七日、十九日、二十三日、十二月三日、同八日、翌一九〇六年一月四日、二月二十二日、五月十日、十二月三十一日、一九〇七年二月七日、七月十八日、九月二十三日等の紙上に各々其の記事を揭けてゐる。

雜誌類に揭げられたるもの左の如し。

△アウトルック(一九〇五年)第八十卷三六三頁、同八一一頁、九一五頁

△ウォールド・ウォーク　第十卷六四

二六頁、六三三二頁、第十二卷七八八〇頁、七七八〇頁

△レビユー・オブ・レビユー　第三十一卷六八四頁、第二十九卷五五一頁

△リビング・エーヂ　第二百五十一卷一九五頁、第二百四十六卷四七五頁

△インデペンデント　第五十八卷一二八一頁、第五十九卷一七九頁、第五十八卷一一二七七頁

△センチユリー・マガヂン　第四十六卷九〇九頁

△サイエンスチツク・アメリカン　第九十二卷四六四頁

△ナシヨナル・マガヂン　第二十三卷六二三頁

△アーミー・エンド・ネビーライフ　第九卷三九五頁、二一四頁

△ハーバー・ウイークリー　第四十九卷七八六頁、一九〇六頁

△モンスリー・レビユー　第二十卷六二頁、第十八卷一五頁

△アメリカン・マガヂン　第六十一卷五四頁

△エレクトリツク・マガヂン　第四十五卷二八九頁、第百四十五卷二八九頁、第四十四卷四五九頁

△ユーナイテツド・ステート・マガヂン　第三十一卷三四七頁

△ナシヨナル　第四十五卷七八二頁

△スクリブナー・マガヂン　第三十八卷二四〇頁

△ブラックウツド・マガヂン（英國發行）　第百七十八卷一六一四頁、第百七十九卷一一四頁、第百七十九卷一一五頁

△エヂンボル・レビユー（同上）　第八十四卷三〇六頁、

△フオーチー・ナイト・レビユー（同上）　第八十四卷一九〇頁、

單行本として著名なるもの左の如し。

マユマツクス氏著ツラヂテイ・オブ・ロシア・イン・パシフイツク及びタイムス軍事通信員著ウオア・イン・ファー・イースト、

其の他日清日露戰爭に關する著書は、東鄉大將の記事のあらざるはなく、又日本に就ての圖書中又之を含まざるものはない。惟ふに過去の二大戰役は、近世の日本を世界に紹介したるものにして、其の花形役者は實に東鄉大將であつたのである。

紐育邦字新聞の代表的歡迎の辭

左記は八月五日紐育の邦字新聞『日米週報』の、東郷大將歡迎文である。在留邦人の大將に對する感慨も亦看過し難い妙味を含むでゐる。されば同紙の記事を代表的の意味を以て、左に掲ける。但し字句を修正せず其の儘としたことを斷つて置く。

帝國死活の大海戰に、空前の大捷を博したる偉大なる、海軍大將伯爵東郷平八郎閣下は、吾等同胞の在留せる米國に來れり而かも國賓として來れる也。

日本海大海戰は、確かに日本帝國の死活戰なりし。

彼の時彼の如く大勝を收めずして、一勝一敗、所謂五分々々の戰況なりせば如何、陸上に於ける百戰百勝の名譽も、或は傷けられしやも知るべからず、而かも此の不祥事なく、常將軍の名譽を一貫したるは、實に

皇國の興廢此の一戰にあり、各員一層奮勵努力せよ

との信號に歸せずんばあらず、而かも此の千歲不磨の信號は、東郷大將の口より出でゝ、至

艦隊の將士をして、死を見ること卽ち歸するが如くならしめたる結果なり。眞に東郷大將は、帝國の死活を解決したる一大恩人也。今や其の恩人は紐育に來れり。

死活の大海戰に於ける、東郷大將の大決心と大信念とは、明らかに出動の初に於て表はれたり。

東郷大將は、五月二十六日活動開始の時、大本營に打電して曰く、

『敵艦見ゆとの警報に接し、聯合艦隊は直ちに出動之を擊滅せんとす。本日天氣晴朗なれども波高し』と。

嗚呼何等の大決心何等の大信念ぞや、戰はざるに眼中旣に敵なし、之を擊滅せんとすの七文字、如何にも壯大なり、然れども徒らに壯大を衒ふが爲めに、此の文字を敢て用ひたるにあらず。飽くまでも恭謙にして溫和なる東郷大將が、斯かる報告をなす大決心と、大信念との結果にあらずして何ぞや、仄かに聞く、大海戰の前夜聖上陛下は、東郷大將に向つて、

能ふ可き丈け力を盡くせよ

との勅電を賜ふ。大將直ちに電報を以て、奉電せり。曰く、

『叡慮を安んぜさせ給へ、戰は一に機會にあり、平八郎決して此の機會を失ふことなかるべし』と。

此處にも亦平八郎は『決して』と答へて、斷乎たる大決心を示せり。此の如き大將の大決心と、大信念の結果は、空前の大勝となり、吾等をして一躍世界の一等國たらしめぬ。之と同時に、東郷大將も亦世界の偉人とはなれり。而して其の偉人は來れり。吾等の喜び之に比すべきものあらんや。

東郷大將は、今や日本一の東郷大將にあらずして、世界の東郷大將なり。米國政府が國賓の禮を捧げて大將を歡待す、之れ當然のみ。吾等も亦國賓たる大將に對し、有らん限りの誠意と熱心とを以て、之を歡待せんと欲するも、大將に斯かる余暇なきを如何せん。誠に遺憾千萬と謂ふべし。

吾等は今偉大なる大將の尊容に接するの機會を得、感極りて何事も云ふ能はず、茲に大將の偉功を數へて、僅かに歡迎の意を表する而已。

終りに臨み、大將の健康を祝す。

ホテル館主大將の奮ひ合ひ

米國週報(邦字新聞)は、大將の到着時の光景を詳述してゐるが、之は米國新聞の記事と重複するを以て、唯其の中の一つだけを左に掲げることゝする。

先月來、東郷大將の訪米を聞き込み、主なる旅館業者は、此の名譽ある偉人の投宿を熱望するの餘り、華府當局と交渉し、激甚なる競爭を行つた。其の結果ニッカー・ボッカー・ホテルに決定せられた譯である。

茲に於て同館の喜びは、一方ならず、何とかして、大將のお氣に入るやうにと心掛け、先づ差し當り二十四室を之に充當準備し、裝飾は全美を極め、食事の獻立に關しても、苦心してゐることは、並大抵ではない。

一見したところ、之が勇將か？

八月五日の紐育ツルース紙は、大將の統率力其の他に就て稱讃してゐるが、其の容貌が餘りに溫和なので、標題の如きことを述べてゐる。今其の全文を左に掲ぐ。

バッハアロー市は、近く東郷大將を迎へることになつてゐるので、市民は鶴首して其の日の至るのを待ち焦れてゐる。

英國では、大將のことを、日本のネルソンであると謂つてゐる如く、彼は實に世界的海軍の

英傑である。

彼は曾てテームスの海軍兵學校の練習艦ウオセスター號艦上に學んだことがある。されば彼の日本海々戰に大勝して、日本の位置を高めたのも、其の源は實に此處に胚胎したと謂はねばならぬ。

日本に於ては、大將のことを、『沈默の提督』と謂つてゐるも、實に尤ものこと〻思ふ。彼は極端なる言葉の節約者であつて、重大な事柄に遭遇せねば、決して口を開かない。而して其の一たび言葉を發するや、必ずやそれは平凡のことではないのである。且つ彼は不屈不撓と冷靜沈着の氣質を有してゐるから、自ら之が彼を常に峻嚴犯すべからざる風貌に見せてゐるのである。

『部下を指揮操縱することは、恰も自分の五指を彈ぢくが如き人は、僅かに一人しかない』とは、日本海軍の流行語であるが、其の言葉の裏面には、一つの壓縮せられたる勢力が存することを意味するのであつて、卽ち一たび皇帝陛下の命があらば、直ちに之に對して彼等は死を惜しまず、危險を物ともせず、只管至難を犯して進むと云ふ冷靜なる性質に變じ、自己の運命を至上に捧ぐる勇猛心を發揮することを物語つてゐるのである。されば東鄕大將だけが、大統率者であるといふのではなく、日本人は凡ての團體に於ても亦此の覺悟と精神とを

有するのである。

彼は一見したところ、毫も世界的の勇將を忍ばせる、莊嚴、勇壯の面影はない。彼の容貌は短軀で且つ日本人によく見るが如き、前屈みの歩き方で、少しも意氣揚々たる風が見えない。彼の頭髮も口髭も、白きを加へつゝあるが如くである。又其の褐色の顏には小皺が澤山に表はれてゐる。

彼と握手するとき、其の態度は恰も往昔の寵臣を思はせる或る氣持がする。が、其の眼光は常に特種の輝きを見せてゐる。此の眼光を見たばかりでも、如何に魔術的の勢力がそれに籠つてゐて、部下の將卒をして彼の命令の爲めには、水火をも辭せずして、各々其の任務を敢行したかを想像することが能きる。

彼れの聲は、不思議にも殆んど婦人のやうに物柔かである。而して其の常に微笑を漏らしてゐるところなどを見ると、之が嘗て評判の高い彼の海戰に、奮鬪した勇將であつたか？と疑はざるを得ない程である。

東鄕大將を船內に止宿させてはならぬ

八月五日のオマハ市のビー紙は、東鄕大將の歡待に就て强硬な意見を述べてゐる。曰く、

日本海軍の最高位にあつて、皇帝の個人的代表である東鄕大將は、眞夜中にコッソリと紐育に入港して來た。併し其の沈靜なるべき眞夜でも、實はそんな靜かなものではなかつた。何故ならば、其の碇泊地點へは、大統領、海軍卿、紐育州知事等の各代理を始とし、其の他の歡迎員がうるさい程も出迎へに往つたからである。

斯かる情景は滅多にあり得ない機會なので、紐育市民には、此の日の眞夜中も實は宵の口といふ有樣であつた。蓋し無理もないことであらう。

吾人は市民が眼を醒ます憂があるからとて、東鄕大將の如き珍客を、音も立てずに、我が國に潜ぐり込ませたり、又は歡迎の準備に困るからとて、翌朝までも、折角港外に入港してゐる船の中に閉ぢ籠めたりするやうなことはしてはならぬ。一時も早く陸上に迎へ上げなければならなかつた。

我が國民の尊敬する日本は、恐らく我が國民中の或るもの、口から、爲めにする一種風變りな、嫌な消息を聽いてゐるかも知れない。併し東鄕大將は、此の度の訪問で以て、そんなことの絶對にあり得ないことを、故國に歸つて、其の國民に告げ知らせて呉れるに相違ない。

日本人は今までは、我が國民が彼の國に對し、態とらしい友交を示してゐたと思つてゐたかも知れないが、之が眞否を探知する爲めには、當然の權利として、夙に國使を差遣すべきであつた。大將は宜しく我が國情を普く視察して、斯くの如きことは微塵もなく、衷心の友情を有することを如實に感ずるであらう。

忌憚なく云へば、彼がルシタニア號を去り、其の一歩を我が國土に印する迄は、多少其の心に懸念を有したことであらう。

彼は米國人が示した友情が、無益のものでもなく、作りごとと思つたのは、幾多の場合に臨むに及んで、それが誤解であつたことを知るであらうし、又同時に日本人側に於ても、兩國の國交を危險ならしめたものゝ、之れ迄にあつたことをも省察し得るであらう。

大將は只の日本の一代表ではない。彼は日露戰爭の英雄として、世界歷史上の大人物である。故に吾人米國々民は、此の點に關する限りに於ても、不變の暖き心を以て、彼を歡迎せねばならぬ。と同時に政府筋に於ては、大將を日本代表と看做し、此の機會を逸することなく、彼我の友交改善に一層の努力を拂ふことを忘れてはならぬ。

近代的海戰の實驗者

八月五日附ソルトレーキ・シチーのトリビユーン紙は、東郷大將に對する讃辭を呈してゐる。曰く、

日本の海の英傑、現時に於ける世界最高の權威東郷大將は、今日の漫遊の途次、我が國に來訪してゐる。

大將は大砲に就て、軍艦に就て、將た又其の乘組員に就て、近代的海戰の實驗と、其の適用とを知ることに於ては、世界的第一人者である。

彼は此等海軍々事要素個々の活用及び其の綜合的の應用に依つて、如何に近代的の海戰を指導すべきかを知つてゐる點に於て、實に稀代の名將と謂はねばならぬ。

他の如何なる國の海將でも、彼れ程に、此の要素の相互關係及び其の善用をよく承知してゐるものはない。

彼は皇帝の下にありて、日露戰爭中、諸種の任務を遂行し、異常の統率振りを發揮した。卽ち或は其の艦隊を旅順の封鎖に使用し、或は之を海戰に參加せしめ、而して最後に露國が遙遙送り來つた遠征艦隊を、對馬海峽に遊擊して偉功を樹てた。

昔から遠征艦隊を送つた史實に乏しくないが、此のときの如き、悲慘な目に遭つたものは、未だ見たことがない。東郷大將は、此の露西亞艦隊をば見事に全滅し又餘燼すら殘さなか

つたのである。

其の大勝利は、云ふ迄もなく、歷史上比類なき光輝あるものであつて、之が爲めに、日本は一躍して、世界大海軍國の一に數へらるるに至つた。而して其の作戰が凡て東郷大將に依つて成されたことを考へると、其の功績は實に甚大と謂はねばならぬ。

此の偉勳者は、各地に於て官邊の歡迎を受くることであらう。と同時に其の足跡の至るところ又必ずや、我が國民に依つても、嘗て日本に於て、戰爭當時行つた凱旋式の如きお祭騷ぎを見ることが能きようと思つた。

彼は之に止まらず、又數多の社交的の歡迎を受けるであらうし、政府でも快く之を承認するであらう。

彼れの滯在期は極めて短かいから、政府は宜しく此の偉大なる英傑を快く認め、而して彼れが要求する凡てのことに對し、特に之に便宜を與ふべきである。決して彼に對しては其の國籍の如何を問ふ必要は更にない。

共和國に生れてゐたら大統領になれたであらう

八月五日附ダアバー市のタイムス紙は、流石共和國の本音を吐いて、東郷大將くらゐの手

柄があつたら、米國なら大統領に選擧するといつて、稱讃してゐる。其の全文は左の通りである。

東郷大將は、英米佛三國の仲裁々判が調印された大事件のあつた其の日に紐育に到着した。從つてカーネギー平和財團などの催しもあつたに拘らず、大將に對する人氣が餘りに沸騰したので、そちらの方は至つて淋しくて、之に反し大將歡迎の方は、丸でお祭り騒ぎで、市中は大邊な賑ひであつた。

大將が若し我が國の如き共和國に生れてゐたら、屹度大統領に推薦されたであらうことは疑ひのないことである。

米國では、アンドリユー・デヤクラン氏や、グテント氏や、其の他砲煙臭い人々も、政治圏内に這入つて活歩するのに何等の面倒もない。單にそんなことだけでなく、之に反し却つて、ダニエル・ウエブスター氏や、ヘンリー・クレーや、其の他平和的偉人は、裏門の隅つこに蟄居せざるを得ざるといふのが、普通の狀態である。

東郷大將は單なる戰士ではない。一種の廷臣の感がする人物である。

普通一般の東洋的教育を受けた人の口から、彼が我が國民に呼びかけたやうな、あんな言葉が、さう容易に、すら〳〵と出るものではない。彼は其の聲明書に曰く、

『人間が幸福だと感ずるのは其の希望、願望、及び豫期したことが實現したときのことで而して一度は米國に來て見たいと云ふのが、長年に亘る余の希望であつた。それが今實現したのであるから、余は甚だ幸福に感じてゐる』と。

大將の東京の住宅は、甚だ簡素なものであると傳へられてゐる。嘗て駐日英國大使クラウド・マクドナルド氏が、故國政府の命を受けて、或る高貴な勳章を大將のお宅へ届けんとしたことがあつた。

其のとき同大使は、大將の邸宅を探し當てるのに頗る苦心をした。其の揚句或る小さな宅で訊いたところが、それが求めんとする大將のお宅であつた。であるから、後から考へれば、大使の馬車は既に幾度も其の前を往つたり來たりしたのであつた。

絃に於て大使は考へた。海の英雄たる大將でも、邸宅の爲めには、其の俸給の全部をば費やしてはゐないものであると。

排日論者よ、注射して往け！

八月五日附エリー市のデスパッチ紙は、次の如く論じて、排日論者をこき卸ろしてゐる。

曰く、

米國人は東郷大將が大好きである。彼は働きの人であつて、言葉の人ではない。併し適當のときには極めて適當のことを僅かの言葉で巧妙に云ひ表し得る人である。

此の點に就ては、晩年に於けるグラント將軍に酷似してゐる。グラント將軍は戰爭中は無口であつたが、併し國民に感化を與へたことは甚大なるものがあつた。

尚ほ他に類似した點がある。卽ち兩者共に、戰爭に當りて、其の果斷決行、不屈不撓なりしことと、其の場合平和の愛好者であつたことゝである。

南北戰爭の終末に於ける彼の遣口ほど歡迎せられたことはない。彼は實際戰爭は衷心から慊らひであつた。とは云へ戰場に臨みては、どんな至難なことでも、尻込みをするやうなことは毫もなかつた。

彼は戰爭が終ると、全く別人の如く、性質が變つた。さればリー將軍などは、彼を評して『無口ではあつたが、度量が大きくて、深切であつた』と謂つてゐる。

東郷大將は始めて我が國に上陸するの時に際し、直ちに聲明書を發して、『平和の手段に就て將た又我が國の有する驚異すべきものに就て興味を感じてゐる』ことを述べてゐる。

惟ふに彼は我が國から、何ものかを學びたい、之に依つて何かを樂しむ爲めに、來訪したに違ひない。されば我が米國々民は、主人側として、此のお客に對し、能きるだけの便宜を與へ、彼の望むところのものをば、總て開放して彼の修得に資すべきである。決して黃褐など云ふつまらぬ考へを、一人でも起させてはならぬ。但しホブソン大佐の如きものは論外にして置け。吾人は同氏に對しても勸告する。卽ち東郷大將に近接するには、必ず前以て注射でもして、身體の毒を押へよと。

我等は東郷大將が、戰爭を通じて露西亞海軍に對してとつた遣口に對しては深甚の敬意を表してゐるものである。と同時に自國の爲めに盡した忠勤を稱讃せずにはゐられない。されば彼が至るところで『萬歲』の聲を以て歡迎せられることは疑ひないことと信ずる。

紐育から華府迄の道中記（其の一）

（註）左記は紐育のウオールド紙の有力なる記者が、東鄕大將の旅行に隨伴して、觀察した記錄で、頗る詳細に亘つてゐるばかりでなく、代表的のものである。依つて之を左に掲ける。

忠實

東郷大將は始めての米國汽車旅行を終へて、本日午後九時三十分華府に到着し、非常な歡迎を受けた。

萬歳の聲が起る度に、彼は帽子を輕く上げて之に答禮し

た。五千に餘る觀衆は、ユニオン停車場に殺到してゐたが、大將は其の間を、大統領の名代アーチボルド・バット氏に護られて、悠悠と出て來た。而して自動車に乘り、其の宿舍たるニュー・ウィラードに向つた。

此のホテルには、大將及び一行の爲めに特に七室が用意せられてあつた。大將は『お休みなさい、左樣なら』と、接待員其の他に挨拶して寢室に入つた。

大將の米國に於ける生活は、握手と歡迎攻に終ると謂つてもよい程で、實は傍の見る目にも氣の毒な思ひがする。

然るに彼は六十七歳の高齢であるにも拘らず、終日引張り廻はされても、少しも疲勞の態度を示さない。こんなことは、米國ではそれに慣れたタフト大統領の外には、見ることは出來ないであらう。

之より先き、大將が紐育のホテルからペンシルバニア鐵道の終點たる三十三丁目の紐育停車場に着いたとき、午後三時三十八分の華府行きの時刻までに、尚ほ二十分の餘裕があつた。そこで驛長のウイリアム、エゲン君につかまつて同驛のことに就て、何くれとお談義を聞かされることになつた。

大將は此の話に釣り込まれて、米國鐵道の終點たる大驛の『驚異すべきもの』を見たいと云ふことに同意した。

先づ驛長は、彼を大待合所に導いたところ、大將は其の莊美なる建築術と、其の偉大さに驚きの目を瞬つた。

次に電話交換室に至つたが、此處では交換孃達が、他所行きを見せる積りか、常よりも忙しさうに、プラグの手を動かせたり、返答應對を繰り返へしてゐた。其の一群の如きは、大將の這入つて來たとき、何か言ひたいやうであつたが、『萬歳』の日本語の發音が思ひ出せないので、むづ〳〵して居たのも笑止であつた。

驛長は尚も大將を階下に導いて、安全昇降機や、荷物運搬器や、郵便物滑走板などを觀覽に供した。

大將は其の間、始終ニコ〳〵して、只エース、サンキューばかりを連發してゐた。そこで驛長は已むなく、後には說明をば通譯の谷口副官に向き直つてせねばならなくなつた。

大將は英語をも話す、而して熱心であるやうだが、どうも其の發音が弱い。其の爲めか、後には谷口副官に命じて、驛長の說明を代つて聽き、又代つて返事をさせることにした。

此の視察が終ると大將は、エレベーターでプラットホームに出た。するとそこに待つてゐた大群衆が『萬歲』を浴びせかけた。

第三國務次官ヘール君にしても、此の他の米國接伴、隨行の人にしても、此の驛長のくどくどしい案內には、ほと〳〵閉口してゐたが、大將及び日本の隨行員は、毫もそんな風は示さなかつた。

大將機關車の運轉手臺に乘つて旅行

時に談又偶々ニューゼルシー州のマンハッタン隧道に於ける機關車取換のことに及び、其の場合機關車を電氣機關車に轉換することになつてゐるが、大將には、一つそれに乘つて見る氣はないかと勸めるものであつた。彼は微笑を含んで之を快諾し、運轉手の片側に座を占めることに話が纏つた。そこで例のヘール君や、ボッツ海軍大佐や其の他今一人の米

國人も、狹くるしい目に遭つて同乘した。

大將は暗い隧道の中で、耳を聾せんばかりの騷音にも、少しも嫌な顏もせず乘つてゐた。それから、牧場の廣い明るいところに出て、再び蒸汽機關車に換へられてから、大將は定めの『平和號』と名づくる特別客車に移乘した。

本紙記者は、大將に向つて、電氣機關車に就ての感想を訊くと、谷口副官を介して、

『速力が餘り迅いので、感想に耽る暇もなかつた』

と答へた。

大將は泰然として何とも思はなかつたといふ風を裝ふてゐたが、塵芥でも這入つたのか眼を拭いてゐた。而して乘心地に就て、側近の日本人平賀中佐や埴原書記官に對し、何かと語り合つてゐた。

汽車が費府に向つて走つてゐたとき、大將は、三人の子供を有つてゐるとの話があつた。既記の大將の年齡も、實は此のときに話しが出たのであつた。

大將は又通譯を介して曰く、

『余が今迄に受けた米國民からの衷心の歡迎は、實に愉快極まるもので、全く感謝の言葉を知らぬ』と。

そこで記者は、

『余は我が大多數の國民が閣下に就て餘りに多くの逸事を知つて居るので、あんなに歡迎するのであらうことを固く信じ且つ之を誇りとするものである』

と述べた。

大將又曰く、

『余は米國に對する感想を、諸君から度々訊かれたが、それは一體無理ではなからうか、余が上陸したのは、今朝のことであつて、未だ其の感想は浮ばない。但し見たところだけでは、此の國は誠によい所である』と。

婦選論には反對

又記者が、米國婦人の高等教育問題を持ち掛けると、大將は次の如き意見を漏らした。

『それはよいことである。少くも米國にとりては、至極結構のことである。日本の婦人は恐らく教育に於ては劣つてゐて、とても米國の婦人には比べものにならぬであらう。併し婦人の選擧權に就ては、それが日本に關する限りに於て、贊意を表し難い。抑々婦人というものは、良妻賢母であれば、それで澤山なものである』と。又彼は曰く、

『自分が海の愛好者である爲めか、青年の意氣をよく維持し、彼等に幸福なる性質を得せしむるの途は、一に海上の事業に從事せしむるにあり』

と語り、尙ほ之に左の如く嗣ぎ足した。曰く、

『併し、諸君が何事を爲すに當りても、其の職業の愛好に專念ならざるべからず、而して企圖する事業が、何であらうとも、それを善くすることに努めねばならぬ』と。

大將は強いて記者との問答を、早く打ち切らうとする樣子は見えなかつたが、副官の注意もあり、之を中止した。而して大將は時間と共に移り變る窓外の風景に、憧憬してゐるもののやうであつた。

記者が辭し去ると間もなく、特別接伴者達の一行が、入れ替りて、大將の周圍を取り卷き、觸目する風光に就て、何かと說明の勞を取つてゐた。

併し大將は將の說明に對し、餘り興味を惹かない風であつた。何となれば、どこへ往つても樹は依然として樹であり、家は矢張家たるに過ぎなかつたからであらう。惟ふに世界を漫遊した、名高い偉人にとりては、それが何等の風情でもなかつたに違ひない。

沈着なる其の態度

ウエスト・ヒヤデルヒヤの市民は、列車を間違へて失望したらしい。此の市の人々は、大將が議會列車（コンヴレッショナル・トレーン）で來るものとばかり思つてゐたが、此の列車は、大將の乘れる急行列車よりも、早く紐育を出發したのであつた。だから此の停車場に汽車が着いたときには、歡迎の人は一人もゐないし、從つて萬歳の聲も揚らなかつた。

併しこんな風に考へた人々が、間違へで、之に議會列車は、特別列車の如き、長いものを牽引する力のないことくらゐは、判つてゐさうなものである。

偖て運の悪いことには、大將の乘車せる列車がウイルミントンの南方二十哩のところで立往生をした。

之は前日の暴風雨で、二箇所に破壞した場所が出來た爲めであつた。而して前記の議會列車も亦其の前方に同樣停止してゐた。

此のとき大將は、何等此の立往生に對して、其の理由すら訊き質さず、落付き拂つてゐた。之は恐らく、彼れの身分立場に顧みさうせざるを得なかつたのかも知れない。

華府に近づく頃、大將は始めて米國の雨に遭つた。

乘車の後方の窓が、一つ開いてゐて、雨雫が大將の顏にかゝつた。彼は之を閉ぢることを人に賴みもせず、命じもせず、靜かに前の方へ歩いて往き、他の座席を占めた。而して雨滴を避けた。

汽車道中記（其の二）

八月五日の紐育アメリカン紙は、前記ウォールド紙とは、稍々異つた記事を載せてゐる。今其の異つた部分だけを左に譯出することとする。

東鄕大將は、紐育から華府までの汽車旅行中、記者達と始めての會見を行つたが、今將の中で、ニューゼルシー州通過中に、我が記者との間に行はれた大將との問答とを掲げる。

先づ大將は、恁う云つて會話の口を切つた。

『余をして云はしむれば、昨日來貴國民が、余に對して爲した熱誠なる厚意は、余が嘗てどこでも經驗したことのないものであり、又豫想もしなかつた程のもので、實に感謝に堪えない』

『而して此のことは、余の一生にとりて、最も重大なる出來事であつて、恐らく終生忘るゝこ

との能きないものであらう』と。

若し此の日露戰爭の大立物たる大將が、其の行爲の名高いのに比例して、其の身長がもつと高かつたならば、世人をして幾哩の高き塔のやうに、彼を想像せしめたことであらう。然るに實際は、其の黑き米國式の靴の上に立つてゐる彼を見ると、五呎にも足りないやうに見える。

服裝は黑い背廣に、紺青の筋のある洋袴を穿ち、ネクタイは、之れ亦黑い繻子の極めて質素のものであつた。

黃金類の飾りとしては、只時計の鎖の太いものだけが目に着いた。其の他は、服裝のどの部分を見ても、それらしいものすら認めることが能きなかつた。

更に其の風丰を見ても、之が日本第一の老將であるとは、如何に最屓目に見てもさうとは思はれない程の平凡さであつた。

銅色を呈してゐる彼の皮膚を見ると、頗る健康らしい。而して多くの日本人が、生やしてゐるやうに、大將が若し頤髭を有してゐなかつたらどうしても六十七歲とは見えない若々しさである。

彼の頭髮は濃厚で、多少の白髮を交へてゐる。又其の眼光は爛々として人を射る如く鋭く、此の輝きだけは、永久的に變らぬであらうと感じた。

大將の若返り法

記者は左の問を發した。

『若返り法に關する御感想を伺ひたい』

此のとき大將は、いと注意して、此の問に耳を傾けてゐた。

彼は英語を話すことも、聽くことも能きるのである。併し充分の素養がないから、早口に言つては、一々捕捉することが能きないし、從つて綜合した意味が解し難いから、ゆつくり話して呉れとの申し出でがあつた。

谷口副官——此の人の英語は極めて流暢である——から、此の問に對して、大將に何か注意したやうであつたが、大將は副官を通じて左の如く答へられた。而して彼れの眼光は、此のとき一際尖く輝いてゐた。

『若返り法か？——それは極めて簡單である。兵隊さんになれ！　之だけである。戰鬪は、人をいつも元氣にするものである』

『それぱかりの效果でなく、亦人をして常に自己の生活に滿足せしむるものである』

『戰時と平時とを問はず、常によき兵士(グットソルヂヤー)であれ』

『人をして成效せしむるものは、兵士たることである。それはよき靴職人たると、よき財政家たると、よき仲裁者たると、將た又如何なる職業たるとを問はない。而して最後に、それが大愛國心をも產み出すものである』

『又之に依つて、其の人の死後の名をも成さしめる。而してよき生活を爲して、祖先に見ゆることにもなる』と。

茲に於て記者は問ふて曰く、

『然らば婦人に就てはどうか？　彼の女達も亦戰士たるべきか？　彼女達は、今我が國では、婦人選擧權に向つて、大に鬪つてゐる。閣下は此の婦人選擧に就て御同感であるか？　換言すれば、閣下は婦選獲得運動者の一人であるか？　どうか？』

銅色短軀の英傑(ヒーロー)は、此の質問に對し、何か心配さうに、手を頭髮の上に載せ、谷口氏に向つて、日本語で囁やいてゐたが、其の質問の意味がすつかり判つたときには、さも迷惑さうな樣子であつた。が、遂に恁う答へた。曰く、

『否(ノー)余は婦選運動者ではない。のみならず、婦人が徒らに家庭や、子供を他所(よそ)にして、ずる仕事は、何によらずよいものではない』

記者曰く、

『然らば、婦人に對し、最高の敎育(きやういく)をすることは、之を如何に考へられるか？』

大將曰く(註、常に通譯を介す、以下同じ)

『誠に結構なことゝ思ふ。併し婦人の最高敎育と一口に云ふても、君達の考へと余の考へとは、恐らく一致してゐないであらう。卽ち余の所謂最高敎育とは、つまり婦人をして、自己の家庭が最も大切なものであると、いふ信念(しんねん)を有するの謂であつて、從つて國家に對する彼女達の大なる義務としては、未來の市民たる子弟に奉仕することである』

『婦人にして男子同樣の敎育を受けるといふことは、抑々如何なる目的であるか、男子は外に出でゝ、政治や實業や其の他の實行問題を取扱ふことが必要であるが、婦人には蓋し其の必要はなからう。從つて、日本では、婦人の敎育(きやういく)は、男子に比して、一般に比較的低級でよいと考へてゐる。併し婦人として必要なる敎育は基より之を認めるに否ではない』

『婦人が家の外にあつて、前記の如き仕事をしなくてはならぬといふ、唯一の理由は、經濟問題から來てゐると思ふ、卽ち米國に於ては、婦人は男子と共に、競爭して種々の事業をなして

るるのが、何よりの證據である。併し日本では、少くとも、今のところそんな問題は起つてるない』

『我が日本では、昔から婦人が男子と等しく、善き勤めをなしてるる。即ち內にあつて、よく家を整へ、武士のよき母となつて、今日に及んでるる。尙ほ之を詳しく云へば、日本の婦人は、一の主人や、子供を敢て激勵して戰場に送り、以て彼等をして、後顧の憂なからしめてるるから、謂はゞ戰場にある此等男子と、同じ功績を表はしてるるものとも謂へる』

『婦人は斯かる場合、よく其の力を發揮し、よき市民たるの實を示し、以て愛國の至誠を捧げて來た。政府や何かの壓迫を受けて、苦しまぎれに、家庭の男子を、餘儀なく戰場に出すやうなことでは、斯んな氣にもなれず、斯んな働きが能きるものではない』

修養問答

記者更に問ふて曰く、

『次の時代によき戰士たるには、如何なる性質が最も必要と考へるか？』

大將之に答へて曰く、

『博愛に富むことである。而かも之が實行者でなくてはならぬ。而して其の義務をば、專心に、而かも欣然として盡くすものでなくてはならぬ』

最後に、多くの日本人の癖として、奇妙な語句で、此の問に對する返答を打ち切つた。大將曰く、

『世界に於ける凡ての、善良にして、偉大なる人物は、多くは哲學者である』と。

記者更に曰く、

『愛國心とは何ぞや』

『日本では、他の生活上の何物をも、犧牲に供して、愛國心を云爲すると云ふが、果して然るか』

『戰場に臨む場合、日本人は妻君や、子供のことなどは、全然念頭に置かないと云ふことだが、之れ亦然るか』

最後の項目は、記者が嘗て、大將の出征に當り、家族からの書簡を拒絶したと云ふことを知つてるたので、之を回想して出した質問であつた。

大將答へて曰く、

『然り、愛國心は地上の、如何なる關係よりも重い。國民中最高の愛國心は、軍人に依つて發揮されるものである。偉大なる軍人は、偉大なる國家を創造する』

『愛國心の爲めには、凡ての人事關係を斷つも可なり、されば國家が必要と認むるに於ては

友人とも、親族とも絶交して敢て辭するものではない』

彼が此の言葉を發したときには、其の聲は、自ら打ち震へてゐた。

大將は更に曰く、

『國を愛することは、余にとりて宗教に於けるよりも、更に重しとするものである』と。

次の質問は、次のものであつた。

『愛國心のことは判つたが、其の外に、一般に善良なる國民としては如何なる道德を必要とするか？』

すると其の答へは、恁うであつた。

『余は余のよく知れる日本に關する限り、古老を尊敬することであると同時に、凡ての人に對しても深切心を、最大に發揮することである。此等のものは、人の心を正しくするものであつて、此の至誠こそは、軈て其の國を偉大ならしめるものである』と。

服裝問答

次で起した質問は、日本人の服裝問題であつた。曰く、

『一體閣下は、西洋服を、日本服よりもよいと思はれるか、どうか。東京では、宮廷に於かせら

雲則不可犯智則亦可乱

乙巳春

明治三十八年春東郷大將眞蹟

れても、男女を論ぜず、既に洋裝を用ひて居られるばかりでなく、漸次一般的に之が要求せられてゐるやうであるが、斯くの如くんば、早晩日本服といふものは、其の姿を消滅すると思ふが、閣下は之を如何に考へて居らるゝか』

之に對し大將は、頭を左右に強く振つて、否定せられた。曰く、

『我が國の服裝は、着心地よく出來てゐる。それは吾々の生活や、我が國の氣候に、最もよく適合してゐる。されば決して洋服に代はるべきものではない。洋服を着るのは、他の國との外交上の關係であつて、外國の多數に倣うて、それを採用してゐるだけのことで、謂はゞ單に時の風習に從つて、儀式上や、便宜上から、さうしてゐるに過ぎない。だから、一旦家庭に歸ると、凡ての人は、きつとゆるやかなので、着心地のよい、祖先傳來の服裝に着替へてゐる。諸君の着てゐるのは、和服に比べると、堅くるしいも

のである。併し貴國に關しては又別であつて、其の建築物其の他から考へて見れば洋服が實用上便利であることは否定能きないものがある』

婦人の日本服のことから、更に次の話があつた。

『我が國の婦人は、貴國の如く、それ程歩行することがない。又家の外にあることも少ない卽ち多くは家庭に居据つてゐる。それが又我が國の婦人をして、其の固有の美徳を發揮することに於て、多大の貢献を作してゐる』

『其の婦人の深切と、同情とが、軍人をして一層勇敢ならしめる原動力となつてゐる。何となれば軍人は、自然其の婦人や子供の爲めに勝利を得なければ、相濟まぬと考へるやうになるからである』と。

汽車の中には、大將と共にボッツ海軍大佐や、クック同大尉や第三國務次官のヘール氏などがゐたので、此等の米國士官の、特別の便宜によつて、大將との會見や、應答が、都合よく運んだことを感謝せざるを得ない。

大將はホドソン河底の隧道を、電氣機關車で、通過して大層愉快であつた樣子である。而して左の如く語つた。曰く、

『甚だよい經驗をした。斯くの如き、珍らしい機關車を始めとし、其の高速度、或は宏大なる

停車場の構へ、及び交通機關の完備、凡て此等は、吾人にとり驚異ならざるはない。

併し諸君は、決してそれを誇つてはならぬ。實は今に米國は贅澤倒れがするかも知れぬ』と。

多忙なプログラム

八月五日の紐育アメリカン紙は、東鄕大將の同地第一日のプログラムを掲げてゐるが、之に依つて見ても、同地市民が熱狂的の歓迎をしたことが判ると同時に、之を受けたる大將の繁忙さも想像が出來る。曰く。

東鄕大將の十七日間の來訪第一日の、多忙さと、其の奮闘振りは、左の日程を見ても、直ちに判る。

八月四日の日程左の如し。

午前二時　ホテル・ニッカー・ボッカーに到着

同八時半　起床、お定まりの體操後入浴

同九時半　朝食(獻立)　ハム、卵及米菓子(コーンケークス)及び名代(なだい)の米國料理(佛國の腕利き料理人調製)
同十時十分より十五分迄　寫眞班引見、次に撮影
同十時十五分より三十分迄　紐育市長訪問(道程四哩、市民の熱狂的歡迎)
同十時四十分より五分間　市長と歡談
同十一時半　ホテルに於て市長の答訪(たふはう)を受く
正午　主なる新聞通信員十五名、婦人記者二名を引見(短時間)
午後零時三十分　米國在留の邦人代表者に面接
同一時三十分　ホテルに於て、側近者竝に接伴米國陸海軍代表者と會食
同二時三十分　軍服を和服(わふく)に着替
同三時　ペンシルバニア停車場に向け、ホテル出發
同三時五分より三十分迄　同上停車場内外を視察
同三時三十五分　四千馬力の電氣機關車に乘車
　此の機關車は、ペンシルバニア鐵道のホドソン河底隧道(かていとんねる)を通過するときに、使用するものであつた。大將には之が珍らしかつたものと見え、今迄沈默を守つてゐた彼は、『之は偉大なものだ』との言葉を放つた。

同三時三十八分　華府に向け紐育(ニューヨーク)發
同九時二十五分　華府着、大統領代理其の他出迎、同市のホテル・ニューウィラードに入る。

斯うも忙しくては考へる暇がなからう

八月五日附紐育アメリカン紙は、『沈默提督振りをよく發揮した』と題し、左の如き記事を載せてゐる。曰く、

東郷大將の來米第一日は、豫て評判(ひやうばん)の如く、實によく其の沈默振りを發揮してゐる。

彼は中々記者の談話に引張り込まれない。最近に起つた外交問題に就いても、又その他の國際問題の事項に關しても、巧みに之を避けて、何事も口を開かなかつた。

併し紐育市長の問を終へてから、極めて簡單に、左の如く述べた。

『余に感想(かんさう)を語れと云ふたところで、今迄に見たものは、市長訪問の往復の短時間に亘るもので、何もお話することはない。

余は紐育を見たいと思つてゐたことは、長い間のことであるから、孰れ再び華府から歸つ

たときには、恐らく充分の視察も能きようから、其のときには、何かを語る機會があらう』と。

其の後ペンシルバニア停車場に着いてから、驛長エゲン君に案内されて、場内を隈なく視察したとき、又次の如く述べた。

『今見たところに依ると、米國は工業方面にも、非常な發達をしてゐることに驚いた。此の様な多忙な仕事を、斯くも毎日々々行つてゐるては、多分戰爭など考へる暇はなからう。されば米國民は、我が日本と同樣、平和愛好の國民であることが分る』

そこで記者問ふ。

『然らば閣下は戰爭などゝ云ふことは、最早世界全土から、形を消すものと考へらるゝか？』

之に對して大將は、

『それにはお答へすべきであるが、實は余は見らるゝ如く、政治家ではないから――』

と、餘程困つた樣子であつたが、氣をきかせて、谷口副官は直ちに言葉を之に添へて、

『大將は政治家でないから、其のやうな問題は――』と云つてゐる内に、例の電氣機關車に乘る時刻が來たので、大將は之れ幸ひと、此の場の會話を打ち切つた。

日本と勝敗を爭ふことはあらう

八月五日の紐育シツズン紙は、頭から排日論者を敲きつけて、左の如く說いてゐる。

東鄕大將に對する公私の歡迎會は、快よく承諾して貰へることゝ思ふ。何となれば、到着前に、何等之に就て彼が疑問を挾まなかつたであらうし、又從來も米國が日本に對し、良き感情を有つてゐることも承知してゐるであらうし、將た又多少の恐日論者があるにしても、實際はそれが荒唐無稽なことであることも、よく諒解してゐるであらうからである。

由來此等恐日論者の人々は、先年來排日論に先鞭をつけてゐたが、今では頭さへ上げ得ない程に縮み込んでゐる。

勿論今でも、日本の侵略に就て、全く話のないことはないが、それはいつものやうに價値のないもので、識者の眼中には、常に輕侮を以て眺められてゐるものである。又跋烏のやうな惡政治家が、同じやうな議論を恣にしてゐるけれども、之も亦何等賞讃の反響がないばかりか、一般國民からは、侮辱を買つてゐるのである。

日本と米國との間には、恐らく永久に戰爭が續くであらうが、併しそれは畢竟貿易線の探し合ひ、奪ひ合ひとは云つてゐないくらゐのもので、眞の戰爭はあり得ない。而して此等のことは、各國が悉くやつてゐることで、何の變哲もない普通のことである。のみならず之は正當な手段で正當なことを行ふのであるから、敵意を挟む餘地はあり得ない。

大將も我が國に到着してから、間もなく、此の度の英米佛三ケ國の平和條約に就て贊意を表し、之を日本にも押し弘めたいと云つてゐる。之が何よりの『平和の愛好者』――大將の言葉を藉りて云へば――たることを立證してゐる。若し將來日本が、此の條約への參加が實現すれば、日米兩國の間には、最早戰爭――國家の破裂するやうなことは、夢にも見られない譯である。

大將の爲めなら何でもない

八月五日紐育のイブニング・ポスト紙は、左の如く述べてゐる。

米國政府は、大統領タフト氏、國務卿ノックス氏、海軍卿代理ウィンスロープ氏を通じて、東

鄉大將に敬意を表することになつてゐる。

殆んど連續不休の歡迎會招待會が、海の偉人の爲めに計劃されてゐる。

大將は今朝起床したときには、昨日一日の紐育の疲勞を回復して、すが〳〵しい氣分になつてゐた。

本日の大將の日程には、國務卿ノックス氏及び海軍卿代理ウィンスロー氏への訪問と、其の答訪が含まれてゐる。

米國海陸軍の將校の引見も、ウィラード・ホテルで午前中に行はれる豫定であり、午後には、大統領の謁見、それに次で市中見物が豫定されてゐる。而して夜の白堊館に於ける饗宴に於て、本日のプログラムは、終焉を告げる次第である。

海陸軍士官が心配してゐることは、今夜の白堊館に於ける夜會である。何となれば若しか、其の時刻にいつもあるやうに、溫度が非常に上るやうなことがあるとすれば、重苦しい大禮服を着けねばなるまいからである。

昨晩停車場で此の話が持ち上つた。東郷大將の來着を待つてゐる間に、日本の大使館附武官井上陸軍中佐と、大統領副官バット氏の間に談會ㇾ日本の陸軍正服のことに及んだ。其のときヘール氏は、特に明日の夜會に於ける、大將の服裝に就て質問してゐた。卽ちそ

れが夏服の軍裝であらうか、それとも冬向きの正裝——大禮服であらうかと云ふ志であつた。ところが井上中佐の話によると、疑ひもなく冬服だとのことであつた。

茲に於てバット氏は、それならば我が陸海軍の士官も、之に倣うて、正式の禮裝によると宣言した。而してこほすこと夥しい。抑々其の正裝なるものは、頗るボタ〳〵した重いもので、加之に其の肩章や、飾緒を附けるのだから、此の盛夏の候には、實以てやり切れたものではない、此等のことをお互に話し合つた後、井上中佐に向つて、

『君察して呉れ給へ、我が海陸軍の士官達は、汗ビッショリになつても、貴國の大偉人に接したいと云つてゐるよ』と。

東西文明融合の偉人

八月五日附紐育アメリカン紙は、社說に於て標題の意味を強調してゐる。曰く、

いつの世にも、或る一人の手で、歷史を輝かすてふ偉人を産出するものである。現世の超人格、世界の勢力を動かした人が、今米國に來た。それは云ふ迄もなく、東郷大將である。

大將は、日露戰爭を自國の大捷に導いて、從來名もなき島帝國をして、一躍強國の門に入らしめた。

ロゼストウエンスキーの遠征艦隊をば、あの樣に敲きつけることは、容易の業ではなかつた。一に彼れの統率力の非凡、艦隊操縱術の巧妙及び奉公の比類なき精神に依るに非らざれば、遂行し得ないことである。

戰爭が始まつてからと云ふものは、日本海軍の實力が、世の中に不明であつた爲に、世界の人は、其の結果はどんなことになるであらうと、目を睜つて見てゐた。

併し其の心配は、日本海の海戰で見事に露西亞艦隊を全滅させたので、雲散霧消して仕舞つた。

此の海戰は、世界の人をして、日本の海軍の存在のみならず、其の優越を認識稱賛せしむるに至り、延て日本の武力を侮るべからざるを確認せしめた。

此の海戰の結果は、日本海、黄海の制海權をば、日本の專有物に歸せしめ、滿韓への交通の安全なることは、恰も大道を驅るが如きものたらしめた。從つて陸軍の輸送が容易になつて、從つて陸戰をも好轉せしめた。

難攻不落と稱せられし旅順にも、大將の封鎖で以て間もなく其の價値を疑はれて來た。

惟ふに斯くの如くであるから、世界の輿論は、又々制海權の擡頭を来たした。卽ち就中獨逸の如きは、それ以来、自國近海の制海權獲得といふことに、一層の力瘤を入れることになつた。而してどうしても優勢なる海軍がなくてはならぬと云ふことに胸算を定め、着々海軍の擴張計劃を樹て、其の完成に向つては、何事をも犧牲に供して、之を遂行せねばならぬといふ趨勢を剛致したのである。

次で各國も亦同樣に、海軍を整備、擴張することゝなり、以て東郷大將の顰に倣らひ、各々制海權を得んと努むるやうになつた。謂はゞ各國海軍の今日ある、其の源を質せば、東郷大將の功績に發したと云ふても強ち溢言ではあるまい。

斯くの如くであるから、東郷大將は、此の國に於ても、右の點から考へても、相當に敬意を拂はねばなるまい。

米國と日本との結合は、最も小さく見積つても、次ぎの如き關係がある。それは日本が露國に勝つた後、其の交戰兩國の爲めに、媾和の仲介をしたのは、我が當時の大統領であつたといふことである。之は恐らくノーベル賞以上の功績といはねばなるまい。

あの場合、尙ほも交戰を續行してゐたとすれば、人道的見地だけから云ふても、一層慘酷なことになつたであらう。

偖て東郷大將は、他の多くの偉人豪傑と等しく、其の風貌に於て、トール軍神のやうな點は少しも見えない。然し彼の日本海に於ける彼れの打擊は、實に其の神算鬼評に依るものであつて、又其の統率力の偉大さは、誠に見上げたものである。

されば彼れの行動に關する限り、其の判斷は常に絕對的であつて、又其の戰鬪に何等の誇りがなかつた。

彼は又開戰に當り、時の元老から特に其の艦隊の長官に選拔せられたのだから、面目上、萬一にも、彼等の期待に背くことの能きない立場に置かれた。

東郷大將に對する我が國民の歡迎熱の盛んなことは、曾てグラント其軍が、日本を含む世界漫遊以來のことであらう。

吾人は各種の計劃を立てゝ、用意周到に優待の途を講ずる筈であるが、恐らく種々の偶發事項が起つて、吾等の思ふ半分も、厚意が表はせないことになるかも知れない。併し大將の來訪は、恐らくこんな御座なりの歡迎會や、御馳走攻に遭ひに來たのではなく、其の目的は、米國民に接したり、其の資源を觀るにあるであらうから、吾人は此の點に最も力を致し、大將の爲めには、全力を傾注して、能きるだけの便宜を與へるやうにしなければならぬ。

斯くて大將は、米國民生活の隱れたる起源や、その後の發展進歩の跡などを見て、歸國の後、

必ずや之を稱賛し、之を資利として、日本の發展に供するであらう。斯くしてこそ、永久に此の訪問が意義あることであらう。

日米の間には、だまには暗雲の低迷したこともなかつたとは云へない。併し之は畢竟我慮な強國の間には、起り易き一時の刺戟からであつて、之が爲めには敵對的行爲に出るとか、貿易上に障碍を與ふるとかいふが如き、影響のあるものではない。

此の兩國の國交の將來が、どうならうとも、極東の偉大なる利益の獲得に就て、兩國が互に助長することに關しては、事實上既に決定してゐることである。

却說東郷大將の此の度の來訪は、兩國の交情を增進させる爲めには、屈竟の機會であらう。亦彼の三國の仲裁々判條約への日本參加も、之に依つて、其の時機を早めることゝならう。

此の條約は、偶然にも大將の訪米第一日に調印せられたもので、之に對し大將の口から、直接に賛意の聲を聞いてゐるから、右の事實卽ち日本の條約參加は、蓋し謬りのない觀察と謂へる。

我が米人が東洋の偉人として知つてゐる彼の清國の李鴻章と、大將とを比較するものがあるが、之は當らないこと甚しい。前者は支那人を支配した偉人には相違ないが、それは半未開國の人が、偉いと思ひ、彼等の間に勢力があつたといふに過ぎない。

之に反し大將は、氣質に於て、又報國の念に於て、夙に西洋式の見解を有して居り、尙ほ東西の美點を併せて之を持し、以て兩者文明の混合融和を企圖してゐる底の大人物である。

大將は現代の日本に於て、何等社交的運動を代表するものではなく、彼の偉大なる海上の勝利が、日本をして列强の班に進ませたものである。之を具體的に云へば、朝鮮は其の爲めに、既に日本に併合せられ、滿洲も亦日本の影に隱れ畢つた。されば大將は過去の偉人であるばかりでなく、現代に於ても尙ほ其の勢力は依然として大である。

斯くの如く彼の事業は、其の性質上永久的であるから、其の名譽も亦永久に殘るものと云はねばならない。

平和の大使東郷

八月五日附ニュー・ゼルシーのハドソン・オフサアバー紙は標題の如き記事を掲げて、大將を讃美してゐる。曰く、

東郷大將の第一の使命は、日英米の平和條約を日本に延長結びつける爲めであらうか。

然らざれば、只外國の海軍工廠を窺き廻つて、自分の爲めに效果ある旅行をするものと見られても仕方があるまい。

日本人は思慮ある國民である。彼の日露戰爭で以て、彼等が常によく準備してゐることと及び凡てが勇敢なる戰士であることなどを、限なく世界に示した。而して少くとも東鄕大將の行動に關する限り、世界的の大英傑たることを立證し得たことは、事實である。

大將の今回の三箇國の條約に對する聲明や、其の條約がよきものであるとの談片や、又その聲明は、單に大將個人の私見であることを强調した其の努力や、さては、條約の如きは、政治家に關する事項であつて、彼は自ら政治家にあらざる故を以て、之に觸れたくないと云ふところ等から考へると、此等は凡て彼の訪問が、此の條約加入の前兆であることの見解を益々濃厚にしてゐるものと見ることが能きる。

大將は英國のキングジョージ陛下と長時間に亘つて、會見を遂げ、今亦我が大統領と會見せんとしてゐる。

此等の事情から考察すると、平和條約問題が、英國との間に議せられたものと見られてゐる。何となれば、日英兩國の深い關係は、當然此の問題に觸れざるを得ない事情を有するからである。

大將は今我が國にあり。而して其の來るや、一友人としてゞある。彼は日本に於ては、顯著にして勢力ある人物であつて、其の國の元首や、閣僚とは密接なる關係を有してゐる。さればにや、彼は決して輕々しく口を開かない。それは彼れの個人的意見でさへも、元首の見解を反影するからであらう　從つて日本が平和條約への參加運動も、恐らく進展することは謬りなからう。

兎に角此の訪問は一つの望ましいことを完成した。されば彼の恐日論者が、日本は米國に對して戰爭を準備しつゝあるなんかと警戒を與へてゐたが、少くとも此の偉人の來訪に依つて、一時だけでも鳴りを靜めるであらう。

此等の諸點から考へると、東鄕大將は、取りも直さず、平和大使だと謂つて決して過言ではない。

媾和談判の場所

八月五日のボストン市のボスト紙は、次の如く記載してゐる。曰く、

東鄕大將は海軍の天才であつて、其の戰爭上の能力は、對馬の一戰に依つて、東洋歷史の改竄の必要を認めしむるに至つた。今其の人は、我が國政府の國賓として來訪してゐるのである。されば吾人は能きる限りの名譽を之に附與し、彼を優遇せねばならぬ。

彼は學識卓見兼ね備ふるの學者であり又謙遜にして人好きのする紳士であつて、充分に英雄の資格を具備してゐる。

大將は不日我がボストンを訪問する豫定である。其の曉には、適當なる歡迎方法が講ぜられることになつてゐる。

併し吾人は、豫定があるかないかを審かにしないが、若し無ければ、一つ附け加へて欲しいものがある。それは外でもない。彼の勝利が原因を爲して、行はれた日露媾和談判の開催地たる、ポーツマスの海軍工廠に案內することの一事である。

米國人が、今東鄕大將に對して有する興味は、素晴らしいもので、其の一言一行を看過せずして、之を記載せる新聞紙面は、我が善良なる國民の仲間を、心から欣ばせ且つ感動させてゐる。而して一方に於ては、尙ほ日米戰爭の可能性を說いてゐる事もあるが、此等に對しては、反問に耳を藉さないやうである。

そんなことは、日本の感情を融和する爲めに、表面態を作つた一時的の感情で湧き出るものではない。

大部分の市民は、衷心から、此の偉大なる小軀の人に對して、賞讚の辭を放つて止まない。而して大將に對する此の感情は、結局日本人全體に對する感情の一部であることを斷言し得るものである。

ペルリ提督に對する御禮の使

八月五日ヒラデルヒヤ市のブレッス紙は又別方面から、大將を說いてゐる。曰く、

東鄕大將の訪米は、單に其の國賓としてよりも、もつと重大な意味がある。詳言すれば、それが非凡の功績のあつた、大提督といふことは、友交ある國家の海軍の最高位にあるものとしてよりも、他に何等かの意義が含まれてゐるといふことである。

大將は同盟國の代表として、既に英國を訪問した。彼は英國海軍の中に、候補生として教育せられた時代もあつた。されば英國の士官達とは、素より個人的關係も深いものがある

筈である。從つて今回の戴冠式に際し、日本の代表として、國家が最も適任と考へて、彼を選拔したのは、當然のことゝ云はねばならぬ。

然るに米國への訪問は、全く其の趣を異にし、それが深き思慮を以て計畫されたもので、卽ち米國に對する日本の友情を如實に示さんとするに外ならない。

彼は個人としては、蘇西を通過して歸途に就けば、ずつと早く歸れたのである。道筋から云へば、米國へ來る必要は更になかつたのである。

彼は又歐洲諸國への公式訪問は、行はなかつた。然るに我が國へのみ、遙々迂路をとつて迄、來訪されたことは、畢竟日本が、之に依つて其の國家政策の一端を表示したものと云はねばならぬ。

嘗て日本は、一八六〇年(註萬延元年)其の第一回の使節を此の國に送つて以來、彼の國の友情及び西洋諸國が、彼の國に對して作した、多くの記念を强調するが如き、種類の使節を送つたことがなかつた。

然るに今度大將の訪問に依つて、從來の兩國間に云爲せられた惡感情が、一掃されることは、誠に結構なことである。

兎もすれば、我が國民の中には、兩國民の感情を疎隔するやうな努力を行ふものがある。

天與
正義
神感
至誠

昭和戊辰春
[illegible]郎畫

併し幸にして、此のことは、いつも不結果に陷つてはゐるが、何にしても、太平洋を挾んだ兩國のことであつて、或るものは、日本の對米戰爭計畫を豫想し、或るものは、東鄕大將の艦隊をそれに結び付けて考察するものがあると云ふ風があつたが、此等の人は今日、始めて大將を目前に見るに及んで、大に其の鋒先を緩和したことであらう。

惟ふに現在の日本の老政治家、士官、及び公的大人物が、他の國に於てよりも、我が國の學校出身のものが多い。大將は云ふ迄もなく、英國海軍の教育を受けてゐるが、彼れの同僚には、アナポリスの我が兵學校を出たのもある。其の他日本海軍の傳統其の海軍大學、一般の學校を始めとし、科學的方面のこと、醫學、銀行業、法律、外交、一般行政の如きに至るまで、我が國の制度に倣ふたものが尠くない。のみならず直接其の傳授を受けてゐるものも亦甚だ多いのである。

右の如くであるから、一般に日本人は、各階級を通じ、我が國を尊

敬してゐるところから、自然好感情を懐いてゐる。

近時日本は、我が國の政策や、我が米英仲裁條約の締結に際し、之に適合する如く、日英同盟條約を改訂した。

兩國の間には、將來尙ほ太平洋問題に關し、幾多解決を要すべきもの、存することは事實である。卽ちそれは文明と進歩の道理に於て、相共に大に成すべき事業が卽ちそれである。

日米兩國は從來の歷史と努力とで固めた、各自の位置に動搖を來たすことなく、各々其の採らんとする事業をば、人道の上に築き上けることが必要である。

今日華府に來る人は、英國のネルソン、我が國のファラガットの如く、祖國の爲めに盡くした偉人であるが、彼れの來訪は、我が國への友情と心盡しの立派な手形である。

日本は曾て半世紀以前に、我が教父ペルリが、其の島帝國をば、世界の文明に導いたことを忘れないで、今其の返禮をなさんとして、此の偉人を我が國に派遣したものと思はる。

何事にも趣味ある人

八月五日のジョールヂヤ、ニュース紙は、標記のことに、更に詳細に記載してゐる。曰く、

東鄕大將は、昨四日午後紐育發、華府に向つた。彼は出發に臨み、俄かに電氣機關車に乘ることを快諾した。

此の電氣機關車は、頗る大型のもので、優にペンシルバニア鐵道の一列車を牽引するに足るものである。

大將の爲めには、政府が特に裝飾を凝らした、彼の特別客車オリベット號を連結したにも拘はらず、彼は自ら好んで、此の機關車内の人となり運轉手の一側に座席を占め、しみ〴〵と四千馬力の機關の運轉振りを視察することゝなつた。

此のとき大將は、通譯を介して云はるゝには、

『余は貴國に於ける電氣事業、及び鐵道が、超世界的であることには、非常に驚異してゐる。余は偶然のことから、今直接之を見るの機會を得たることを欣び、進んで之に乘り、其の電氣事業と、鐵道事業とを親しく視察したい。其の意味を以て、機關車に乘るのである』と。

斯くして大將は、ハリソンの電氣機關車運轉區域まで乘り通ふした。而して後、豫定の客車に歸つた。

此の興味深き機關車旅行中、大將は運轉手に、種々の質問を發した。而して云はるゝには

『まだこんな偶然の機會に、之れ程の珍らしい見物をしたことがない』と斯くて大層の上機嫌であつた。

親しみ深い日本語「東鄕」「萬歳」

八月五日附紐育のトロイ・タイムス紙は、左の如く書いてゐる。曰く、

東鄕大將は、英語は話さないが、併し吾人をして、充分に其の意を諒解せしむる手段をとることを忘れてはゐない。それは、彼が米國及び米國民を愛すること及び合衆國の旅行を愉快に遂行しつゝあるといふことでも、よく分る。

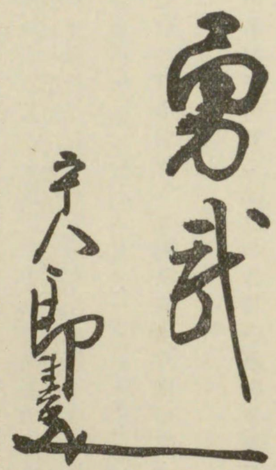
アドミラル・トーゴー』といふ言葉は、我が國民には、『バンザイ』といふ日本語と同樣に實に親しみ易いもので、誰一人として知らぬものはなからう。斯く迄にトーゴーは有名であると同時に、凡ての人が尊敬してゐる。

併し思ふに彼としては、多少不安に思つたであらうことは、果して米國人が、彼に對して好意を有つであらうかといふことであつたに相違ない。勿論日本國民としては、彼が往くところとして、バアローの聲を浴せかけられるであらうことも、蓋し疑はなかつたのであらう。

日本海々戰の捷利は偶然に非ず

八月五日紐育州ウチカのプレッス紙は、次の如く、大將を讃美してゐる。曰く、

東鄕大將は日本の大提督であり、又大英雄である。されば吾人は、彼が日本の國を代表してゐるやうと、個人の資格であらうとは、敢て問ふところではない。此の際米國及び其の國民は、表示し得べき、最大の尊敬と、名譽とを捧ぐべきである。



今迄に米國を訪ふた人の中には外國の著名な人や、大功績を擧げた人も尠くないが、此度び程大騒ぎをしたことはない。

彼れの經歷は實に光輝あるものであつて、只一戰に依つて、其の名を世界歷史上の英雄の班に列せしめた。恰もこのことは、近代的日本の發展と、其の軌を一にしてゐるものである。

斯く云つて仕舞へば、それまでのことであるが、惟ふに彼れの今日の名譽も決して偶然のことではなく、彼の大功績も亦不意に生れて來たものでもない。

彼が露西亞艦隊を全滅せしめたのは、日本の露西亞に對する、該戰役を結んだ大捷と共に、畢竟彼の無限の忍耐、最大の苦心と其の努力、及び最高の犧牲心の發露の報酬に外ならないのである。換言すれば、素朴なる道德の、倦むなき修養の結果と云ふべく、卽ち最後の試練に對して、役立つ如き、身神の準備をば常に爲してゐたことに歸せざるを得ない。

東鄕なる人格は、近代の日本と等しく、過去五十年間の强き意志と、限りなき努力の產出物である。

東鄕大將が、世界の名提督の列に加はつた、其の運命は、我がデューエー提督と、其の趣を同じくしてゐる。

彼れの同僚や、狹い範圍の人々は別問題として、太平洋の兩雄マニラに於けるデューエー、旅順に於ける東鄕は、共に太平洋に於ける敵の海上權獲得までは、餘り世間に知られなかつた。

尙ほ一層彼の名聲を高めたのは、日本海の海戰に於ける彼の大功績であつた。嘗て世界に多くの海戰はあつたが、大將のロゼストウエンスキー艦隊を全滅せしときの如き大捷は

比較すべき何等の史實を見ることが能きない。滿洲に於ける陸戰の捷利も、畢竟東鄕大將の此の偉勳の賜物である。

彼は此の光輝ある行爲を大成したにも拘らず、又日本國民が、之に對して無限の名譽と賞牌を捧げても、そんなことには、全く無頓着で、素振りにも見せず、顏にも出さないで、世の一般の偉人や、英雄がしさうな態度に收り返つてゐる。

彼れは其の態度に於て、沈着果斷であり、又一面に於て、無口で謙遜であるが、又他方に於て溫情味のある人であると傳へられてゐる。

彼は亦沈默を守ること、我がグラント將軍に酷似してゐる。而して英雄崇拜や諂いものが大嫌ひで、宣傳も亦彼れの好まざるところである。

彼の訪米は此の度が始めである。それは英國の載冠式からの歸途、漸く其の西廻りの機會を捕らへたのである。

抑々彼が國賓になつたのは、我が國民が、彼の訪米に依つて、直接其の聲咳に接するの光榮と、日本の我が國に對する友情とを、しみ〴〵味はんが爲めに、無理に彼を招待した當然の返報である。

驚くべき時間勵行者

八月五日華府のイブニング・スター紙は大將の時の勵行に驚いて、左の如く述べてゐる。

大將が如何に驚くべき愼重さを以て、米國人に對してゐるかのよき標本が、今朝國務卿ノックス氏訪問の際如實に示された。それは彼が訪問の時刻に就て、頗る注意を拂つて、豫定の時間を一刻も違へざりしことである。彼の自動車が國務省の玄關に着き、彼が其の一歩を階段に印したとき、恰もそこにかゝつてゐた大時計が、カーンと十時を打つた。云ふまでもなく、其の十時は、豫約せられてゐたタイムであつた。而して國務卿とは、六分間で儀式的會見は終つた。

此のことに鑑みてか、國務卿の答訪も亦極めて愼重であつた。彼が大將を其の旅館ニューウイラードに訪ふたときには、エレベーターが、大將の居室の前に、昇つてゐるとき、附近の時計が鳴つた。それが又丁度十時半であつて、之れ亦豫報した時刻と、一分の差もなかつた。斯くて此のときの會見も、五分間で切り上げた。

八月五日のプログラム

八月五日華府イブニング・スター紙は、同日の大將の日程を掲げてゐる。左の如し。

午前十時　國務卿ノックス氏及び海軍卿代理ウインスロー氏訪問
同　十時半　前記兩氏答訪
同　十一時より午後零時三十分まで米國海軍將校引見
午後　大統領と會見、次に市中觀光
同八時大統領の晩餐會（白亜館）
同十時白亜館の歡迎會

六歳のトーゴー

八月五日附華府のポスト紙は、表題の如き興味ある記事を載せてゐる。左に掲ける。

東郷大將の昨夜華府到着と共に注意を惹くべき一事實が表はれて來た。それは此の地にも米國人で、トーゴーと名乘る、他の一人の存在することが判明したことである。併し此の人は、僅か六歳の男子である。彼は東郷大將の偉大な功績を欣慕して、當時漸く命名されたものであることが知れた。

此の子供は、エッチ・エム・メシュー氏夫妻の間に生れたもので、彼等は日露戰爭當時華府に在住してゐたが、今ではバルチモアに移住してゐる。而して今日當地に來て、東郷大將に、其の子供の面接を願ふてゐるのである。

此の夫妻は、今晩の白堊館に招待されることになつてゐるから、孰れ其の際に、子供を伴れて、彼等の希望を充たすことが能きるであらう。

メシュー氏は、元華府のホテル・セントルイズの支配人で、大の東郷崇拜家であつた。そこで當時生れた、今の子供の爲めに、態々手紙を東京の東郷大將の手許まで送つて、讃辭を呈すると共に、該兒の爲めに命名を乞ふた。すると大將からは、禮狀と寫眞とが到着したので、遂に目出度其の子供が、今日の名を有するに至つたのである。

尙ほ同氏は、今度の大將の當地訪問の機會に於て、命名親として、子供の爲めに祝福して貰ひたいと懇望してゐる。

因に此の子供も亦、彼の名に恥かしからざる、立派な人物になりたいと希望してゐるとのことである。

大禮服の悲喜劇

八月五日の華府タイムスは、盛夏の歡迎會に於ける冬服の禮裝に就て、次の如く興味ある記事を載せてゐる。

本日の白堊館に於ける大統領主催の、東郷大將歡迎會は、未曾有の盛會と豫想されてゐるので、之に列席し得ることは、名人の等しく、非常な名譽と考へてゐる。

ところが茲に特に陸軍士官にとりて、一つ困つたことが出來した。

或る新聞にも記載された通り、此の夏の眞盛りに、冬の大禮服を着けることは、若し其の日が取り分け涼しくない限り、文字通り汗だくで、嘸暑苦しいであらうといふことくらゐは、まだしものことで、服裝の如何によつては、招待の資格はあつても、出席能きない場合が生じて

來たのである。其の譯は恁うである。

陸軍では數ヶ月以前から、服裝規則に變更があるといふ内報があつたので、多くのものは、大禮服の補充を見合せてゐた。氣の早い連中になると、最早改造し終つたものもあり、改正に着手中のものもあつた。

ところがツイ二、三日前になつて、今夜の歡迎會は、特に東鄕大將に敬意を表する爲めに、冬の大禮服着用に定まつたことが判明したので、此等の連中の驚きは、並大抵ではなかつた。

二度とあるかないかの此度の機會を逸することは、如何にも殘念のことではあるし、併し服裝は有たぬといふ、實に進退兩難の間に、挾まれた、苦しい境遇に置かれたものも、尠くなかつた。

そこで萬策盡きたので、日頃お馴染の洋服屋に迫つて、どうしても夫れまでに間に合せろと嚴談に及ぶものやら、泣いて懇願するものもあるといふ大騒ぎを演じた。

中には悠々と涼しい顔をしてゐる連中もあるが、此等は平常何事にも、無頓着な無性ものであるが、此のときばかりは得意である。それは服裝の改正などに全然手をつけてゐない人々である。

斯くて此等のものが、困つてゐるものをからかつてゐるさまは、實に禮裝問題に搦む悲喜劇其の儘の爲體である。

東郷大將の華府觀

茲に華府の諸新聞卽ちポスト・タイムス、及びテンネツシーのコンマーシヤル・アツピール紙等の記事を綜合して、大將のワシントン市に對する觀察を掲げることゝする。

大將が華府に到着して、ニユー・ウイラード・ホテルに入る前、彼は所懷を述べて曰く、

『米國の第一日に當り、非常な優遇を受けたことを深謝する。併し受ける側でも亦非常な精力が要ることをも痛感した』と。

此の一言の外に、當日就寢の前に、次の如く短句を漏らした。曰く

華府の街衢は隨分廣い。丸でテーブルの樣である。之では自動車や、貨物車が幾ら通つても大丈夫だ』と。

又旅館に於ける第一夜を過ごした大將は、其の窓から、市街の莊大なるを眺めて、頗る感に打たれたもの〻如く、左の如く述べた。

『華府は一つの驚異である。成程之では流石は米國及び米國民の首都にふさはしい』と。

彼は窓外の風景を倦かず眺めてゐたが、ワシントンの銅像をば、ものゝ五分間も、じつと見入つてゐた。又白堊館や、其の周圍の公園にも相當注意を拂つたやうである。而して曰く、

『實に立派な眺望である　それは余を鼓舞するに充分である。此の莊麗なる市街に對して、覺えず恍惚としした』と。

之は其の筈で、政府當局者の企てが的中した爲めであつた。然かも大將には氣が付かなかつたらしい。

と云ふのは、之より先きハール氏やボッツ大佐なども、此處からの眺望が一番よくて、定めし大將の御氣に入るであらうと、大將の居室を定めるときに、思を玆に致して、旅館の主人とも打合せをしたのである。而して外國人と云はゞ、誰でもこゝの室から、街衢を見たらば、感嘆しないものはないといふ屈竟の眺めの室を供したのであつた。之れで接伴員の人々の心盡くしも、酬いられた譯である。

タフト氏の歡迎の辭

八月六日の華府イブニング・スター氏の掲載せる歡迎の辭左の如し。

余は今次玆に始めて卿を國賓として迎ふるに當り、次の挨拶を爲すの機會を得たることを衷心欣快とするものである。而して若し此の機會なかりせば、余は余の當然爲すべき義務を懈り、且つ余の確乎たる信念に背くべかりしなり。

從來日本國皇帝陛下竝に貴國政府が、常に宏遠なる人道的見地に立ち、率先世界平和の運動に參加し、而して其の進展は斷じて利己的觀念の爲めに、阻碍せざることを確信しあることとを認め、稱讃措く能はざるものであるが、其の好適例として、恰も卿が、當國に安着せられし日を以て調印せる米英佛三國の、一般的仲裁裁判條約に對しても、極めて莊重なる、又極めて積極的なる方法を以て、毫も躊躇することなく、率直大膽に言明せられしことは、余及び我が國民の感激に堪へざる所なり。

日本帝國は、過般の日英同盟條約改訂に當り、仲裁々判の大精神をば、何等の保留なくして

之を承認し、前途の高尚なる大事業に對して、貢献するところ大なるものありき。

余は斯くの如き事實を回想し、心中愉快に堪へざるなり。惟ふに日本は、今又開始せられたる前記運動に對しても、之に參加せらるゝの遠きにあらざるを固く信じ、且つ其の實現の一日も速かならむことを希望して熄まざる次第なり。

乾盃の辭と大將の答辭

大統領は國賓たる東郷大將を通じて、晩餐會の席上、國仲裁々判條約への日本の參加を慫慂すべく、大將と下院議長クラーク氏との座席の間から、ずつくと起つて、別項の如きスピーチを爲し、次に大將の方に向き直つて、日本皇帝陛下に對する乾盃の提議を爲し、左の如く述べた。

『大統治の實を示した人、其の全生涯を通じて其の國家の發展及び其の人民の利益の爲めに、全精力と全智能とを捧げた人、而してこれが爲めには、其の卓見に依り國家の大事を託するに足る人を、躊躇なく推擧し、以て其の國をして今日の偉大を爲さしめ、強國の一に加はらしめた一人、又人道を正義との上に立脚し、世界の平和に貢献した人即ち日本國皇帝陛下に對し奉り、茲に諸君と共に乾盃して、聖壽の無窮を祈りたい』と。

此のスピーチが終ると、大將は之に對し感謝し、谷口副官の通譯に依り、左の如き意味の答辭を述べた。曰く、

『大統領閣下、只今閣下が、我が陛下に對し、述べられた讃辭を不肖より陛下に致すは、余の名譽とし且つ義務なりと信ずるもので、洵に欣慶に堪へない。而かも余は實に之に答ふるに當り、感慨無量にして、之を云ひ表はす言葉なきに苦しんでゐる。唯閣下の歡待に對し、衷心感激してゐるといふの外はない』と。

華府に於ける記者との問答

同日の華府イブニング・スター紙記載の全文は、左の通りである。

昨三日紐育に於ては、新聞記者達が、遠慮なく押し掛けて往つて、種々なことを質問し、且つ外交問題や、政治問題にまで觸れるので、大將も大方ならぬ迷惑を感じて居られるから、今日は多くの記者の中から代表者を指定し、其人だけが面接することゝし、且つ其の質問の種類は前記の如きものは、成るべくさけるやうにしたい。

先づ谷口副官から、以上の御託宣があつた。此とき丁度大將には、大統領の訪問を終つたばかりで、大禮服を着てゐたので、衣服を着替へるまで待つやうにとのことであつた。

　廳て記者達は、見晴らしのよい室に案内された。大將は多くの記者達に、一々叮寧に、握手をされた。而してシーガーやシガレットを、親ら箱を開いて薦められた。次に谷口副官から、質問を始めてもよいとの指令があつた。

　先づ英國に於けるスピット・ヘッドの觀艦式に關する大將の所感を敲いたが、之は先方にとりても頗る無難であり、從つて何等珍らしい話もなかつた。

　次に將來の戰艦の大きさは、如何なるものを以て適當とするか？の質問に對し、大將曰く、

『其の問題に就ては、世間區々の意見があつて、まだ纏まつてゐないやうである。卽ち或る論者は現代のものよりも、もつと大きいのがよいとするものもある。が、之は未だ專門家の間にも問題として殘されてゐる。又或る人は、二萬噸を最大限として、それで十分だと云ひ、又或るものは、三萬噸が最も適切であると云つてゐるが如き狀態である。

　次に今度三國の間に締結された仲裁々判條約に關する所感を質したところ、大將曰く、

『其の條約で果して紛爭が解決されるとすれば、世界の各國民に對し、非常な利益であると思ふ。故に列强は其の紛爭をば、武器に訴へないで、解決し得るやうにするのが、最大の義務と考へてゐる。斯くして戰爭なるものがなくなれば、各國民は最大幸福を得て、最大悲劇を除くことが能きる譯になる。

　されば大統領タフト氏は、世界平和の爲めに、實に大事業を完成したものと謂はなければならぬ』

　茲に於て記者は、

『然らば、之れで世界の海軍を廢し、國民の武裝を解き得ると考へるか？　どうか？』

と、問ふたところ、大將は此の英語の意味が判つたと見え、通譯を待たずして、直に答辯を谷口副官に與へた。併し例の通り、此のときも吾等には、副官の手を藉りて傳へられたことは、云ふ迄もない。

『否、左樣なことにはなるまい。列國は宜しく海軍を備へ、武備を相當に用意すべきである。のみならず軍艦も其の形を大きくする必要がある』

　或る記者が、飛行機に就ての感想を訊くと、大將は、

『飛行機は或る場合には、非常に有效であらう』
と簡單に答へられたが、尙ほ進んで特別の場合に於ける其の用途に就て、押し詰めて質問すると、
『一例を云へば、軍事上偵察任務などには、恐らく有效であらう』
と答へた。そこで又他の記者が、
『飛行機の出現は、將來軍艦に對して、頗る脅威すべき時機が來るであらうと思ふ』
と述べたところ、大將は之には輕蔑的の微笑を漏らしただけで、何等の意見も云はなかつた。

次に記者が、パナマ運河の開通に關する所感を求めたところ、通譯の谷口氏は直ちに、
『大將は世界各國民の貿易上甚だ利益を與ふるであらうと思つてゐる』
と代辯した。そこで更に、
『日本と○國との戰爭の場合、該運河に就て、如何に考へてゐるか』
と詰め寄せると、谷口副官は、之を遮つて
『今は左樣のことを話してはゐない』

と一本釘を打ち、後は話頭をそらして、
『大將は米國の此の度の歡迎をば、非常に欣んでゐる』
『大將は大統領に面接したことを甚だ光榮に考へてゐる。氏は實に偉人であり、又深切な人である』
と。
そこで或る記者は、大將の米國婦人に關する所懷を徵した。すると谷口氏は、
『大將は未だたつた一人の婦人としか、此の國で逢つてゐない。其の一人と云ふのも、實は昨日紐育で面接した婦人記者のことだ』
と答へたので、此の場の光景は哄笑に破れた。

病氣も艦橋に上れば癒る

八月六日のニユー・ヘブンのユニオン紙は、大將の逸話を揭けてゐる。左記が卽ちそれである。
東鄕大將は最近米國に上陸した。彼は曾て露西亞の艦隊を全滅したときの、日本の艦隊

司令長官であつて、歴史上屈指の名提督である。

大統領の晩餐會の後で、短時間記者團を引見することは、蓋し謬りのないことで、其の際は、大將の口から、直接何等かの談話を聞き得る機會が與へられるであらう。

嘗て彼が艦隊司令長官を拜命し、上命に應じて、露西亞艦隊と戰ふ爲めに、病床から起つたとき、特に慫慂する語つたと傳へられてゐる。

『何ッ大丈夫だ。艦橋に上れば、病氣は直ぐ逃けるよ』と。

又殆んど右と時を同じうせるとき、海軍大臣その劇的會見の場合、大臣は彼れに告げて曰く、

『余は今卿に告ける或る一事のあることを欣ぶものである。それは外のことでもない。陛下に置かせられては、今次卿に託するに、此の際聯合艦隊首腦の重任を以てせられ、頗る宸襟を安んぜさせ給へる御樣子である』と。

大臣は之に對して、彼が愼重の態度をとり、俄かに返事はしないであらうと期待してゐた。すると、彼は卽座にきつぱりと次の如く答へた。曰く、

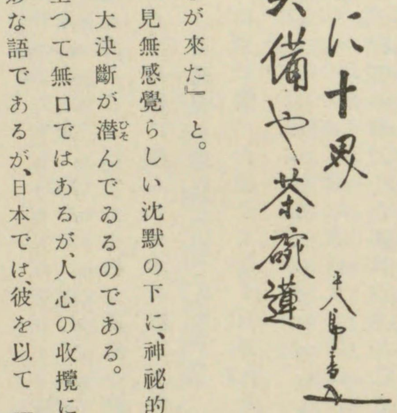
『必ず勅命を完全に遂行して御覽に入れる』と。

斯くて此の兩雄は、恰も生徒が赤面して手持無沙汰を裝ふが如き狀態の下に、相對座して、

數分間を、無言の裡に過ごした。其の揚句の果て、彼は默して叮寧にお辭儀をなし、其の室を出て往つた。

そこで大臣は、彼れの樣子から判斷して見て、何か政府の意に一致しない點でもあるのではなからうかと、窃に憂慮してゐた。

然るに彼の眞意は、聽て事實となつて、表面に顯はれて來た。と云ふのは艦隊の出征前の或る日の出來事に依つて立證し得た。



彼は士官を最後の宴會に招いた。而して彼れの机の上には犧牲の印たる『九寸五分』を置き、偖て曰く、

『今や妻子——及び吾々の生命に永訣を告げるときが來た』と。

此の一見無感覺らしい沈默の下に、神祕的東洋風の氣質から涌き出づる、死を見る歸するが如き一大決斷が潛んでゐるのである。

彼は至つて無口ではあるが、人心の收攬には、一種の祕訣を有してゐたと云はれてゐる。之は奇妙な語であるが、日本では、彼を以て『部下の操縱は、恰も自己の五指を動かすが如し

と稱讃してゐる。

彼は又非常な危機に臨んでも、決して心を動かすことなく、完全なる落つきを見せてゐる。更に敗北を嫌ふことは恰も生物が眞空を壓ふが如しと迄云はれてゐる。

彼幼にして外國に學んだ日本の海軍士官中の一人であつて、英國海軍の教育をば、例のウオセスター號艦上に受けたのである。

そこでは別に變つた樣子もなく、只平凡な、可愛らしい一學生であつて、單に英國海軍生活によくなじんだと云ふに過ぎなかつた。

彼の眞の力の始めて世に表はれたのは、日清戰爭の劈頭、彼の英國々旗を掲げた、支那の陸兵運送船高陞號を擊沈した事件以來のことであつた。

日米戰爭の話は打切りたい

八月六日の華府ポスト紙は、左の記事を掲げてゐる。曰く、

大統領タフト氏は、昨夜當地在住の知名の士を招き、東鄕大將を主賓として、晩餐會を催ふ

したが、其の席上先づ日本皇帝陛下の爲めに乾盃し、次で日本が英米佛三國の間に、今次締結せる、凡ての紛爭を解決すべき仲裁々判條約に參加せんことを慫慂した。此の提議は驚異の眼を以て迎へられ、且つ深刻なる國際的光景を呈した。

此の大統領の聲明は、晩餐會をば、きらびやかなる一つの集りから、一變して國際的に、最も重要なる一場面に轉換した。而して昨日行はれた訪問其の他の儀式の中で、之が莊觀なものゝトップを切つた。

斯くて米國政府が、大將の訪問をして、此の國に關する限り、最後の重大なる意義たらしめる爲め、最大の努力を傾けてゐることは如實に立證した。換言すれば、米國政府は此の機會に於て、日米戰爭の話を打ち止めにする決心を明白に示した譯である。

大將米國の飛行機稱讃

八月六日の紐育ウォールド紙は、左の如く記してゐる。

東鄕大將は、昨日夕方ニュー・ウィラード旅館の八階の樓上から、米國陸軍飛行機の飛翔を

眺めた。飛行機は天の一方から來りて、ワシントンの銅像の上を旋回しつゝあつた。

彼は嘆稱の叫びを放つた。曰く、

偉い！　實に見事だ、驚異に値する！　と。

併し彼は後程語つて曰く、

『實は佛國でも飛行機の飛ぶのを見たし、又勿論日本でも海陸軍のを見たことはある』と。

白堊館に於ける招待者

八月六日の華府ポスト紙は、八月五日の大統領主催白堊館に於ける晩餐會の招待者の主なるもの六十五名を列記してゐる。卽ち左の如し。

副大統領セルマン氏、内田大使、東鄕大將、谷口副官（尙眞）、埴原一等書記官（止直）、平賀海軍中佐（德太郎）、井上陸軍中佐（勝次）、國務卿ノックス氏、閣僚マックビー氏、ウキツカーシャム氏、郵政長官ヒッチコック氏、海軍卿代理ウィンスロープ氏、閣僚ウイルソン氏、同ナゲール氏、同ヒレース氏、下院議長クラーク氏、上院議員カロム氏、同バーキン氏、同ベーコン氏、同マルチン氏、同ベンロープ氏、同バイレー氏、同ストーン氏、同レーナー氏、同ウイリアム・アルデン・スミス氏、同ウエフトマー氏、同バルトン氏、同ルート氏、同スワンソン氏、同ヒツチコツク氏、下院議員ダルゼル氏、同カノン氏、同バルソルド氏、同ヘンリー・エ・クーバー氏、同ズルザア氏、同アンダー・ウツド氏、同ラオス氏、同マン氏、同トーマス・エス・バツトラー氏、同フード氏、同ダビツド・ゼー・フオスター氏、同バヂツト氏、同ロングウオース氏、同ラウド氏、同エストピナル氏、同リビー氏、陸軍少將ウツド氏、同ムーレー氏、海軍少將リチヤード・ウエーンライト氏、同ウイリアム・ピー・ボツター氏、同レジナルド・エフ・ニコルソン氏、第三國務次官チヤンドラー・ヘール氏、海軍大佐エム・ボツト氏、ウイリアム・ヘロン氏、エフ・テイ・ミレツト氏、陸軍大佐スペンサー・コスビー氏、陸軍中佐レイ・シー・バルマー氏、陸軍少佐アーチバルド・タブルユー・バツト氏（以上）

大驅の大統領と小驅の大將

八月六日の紐育ウオールド紙は、標題の如き興味ある對照を示してゐる。曰く、

八月五日の朝、東鄕大將の起床したときには、雨がしと〳〵と降つてゐた。されば折角接伴官チヤンドラー・ヘール氏等が、非常な努力と注意を拂つて作つた、念入りの歡待日程が旨く行はれるか、どうかが心配になつて來た。

輕い朝食を濟ませた大將は、海軍の大禮服に着替へ、ボッツ海軍大佐及び前記ヘール氏を引見した。

それから豫定の如く、國務卿や、海軍卿代理との訪問交換を爲し、次で嘗て日本で知己となつた海軍將校達の來訪を受けた。

午後二時二十分ヘール氏、バット陸軍少佐及びバルマー海軍少佐は、騎兵第十五聯隊の或る部隊と共に大將を護衞し、白堊館差し廻しの自動車に乘つて、大統領訪問に出掛けた。

大統領タフト氏は、內田大使が大將を紹介すると、微笑を湛へてツカ〳〵と進んだ。而して前半身を屈して、大將の少さい掌を、大きな指で包んで握手した。

彼は心からなる深切心を發揮して破顏し、いつものやうに、肩を左右に振つてゐた。

大將は儀式的に叮嚀にお辭儀をしようとしたが、餘りにタフト氏が寄り添うてゐるので之が能きなかつた。そこで直立した儘微笑を含み、流暢なる英語で以て、

『余は卿の客たること欣快とする

と述べた。

數人の陪觀者達は、戰士と大統領との脊丈けの相違が、餘りに大きいので、窃に興味を以て其の對照を凝視してゐた。成程一方は、三百十呎(註、三十七貫五百匁)の體重を有し、高さ六呎、他方は百五十五呎(註、十八貫七百匁)で、五呎だから、實に珍妙なコントラストであつた。

此のとき大統領の服裝はと見れば、蕭洒でいとゆるやかなモーニング、大將は之に反して燦たる金モールの重くるしい制服、而かも其の右胸には約三寸平方の青色實體のスポットを附け、左胸には所狹きまでに、諸種の勳章を佩用してゐる。されば之も亦奇妙なコントラストを失はなかつた。

此の會見は僅か五分間で終つた。騎兵隊の喇叭は、行進用意を吹奏し、大將座乘の自動車は、前記同樣の行列で、警笛一聲勢ひよく進發、旅館ウイラードに向つた。

因に當日豫定せられてゐた、前記訪問後の市中觀光は、降雨の爲め翌日に延期せられた。

旅館に歸ると、大將は直ちに其の禮裝を脫し、軟かいサージの上衣、白チョッキ、及び鹽入りの洋袴といふさつぱりした和服に着替へた。而して安樂椅子で一と眠りといふところを谷口副官に注意せられて、未だ豫定の新聞記者引見の一幕が殘つてゐることを知るや、彼は起立して、快く記者達を迎へ、握手をなし、葉卷煙草などを勸め、自ら一本のシガレットに火を

點じた。

會談は凡て谷口副官の通辯に依つたのであるが、質問には殘らず答へを與へられた。其の中米國婦人に關する問題に言及したとき、彼は一度だけ口を開けて笑つた。而して通譯は左の如く語つた。

『大將が云はれるには、貴國では今迄に只一人の婦人に遭つたばかりだから、此の一人を以て、一般の婦人に關する感想は云へない』

大將は、米國人特に大統領に依つて表はされた其の態度に就ては、非常に欣んで居られる。大統領は實に大將に對して深切である。大將は米國を見ること日尙ほ淺きも、今迄に見たところだけでも、頗る興味を感じてゐる』と。

世界平和の將來に就て質問を發したとき、彼は頭を左右に振つた。而して通譯を經て云はるゝには、

『仲裁々判條約によつて、世界の平和が招來せられるならば、それは甚だ幸福なことゝ思ふ。併しこゝ暫くは、强國の海軍は各々增勢を續けて往くであらうと思はれる。又さうなくてはならぬ。各國民は、各自國を保護する義務を有して居る。從つて或る國は其の隣國に對して、常により多くの海軍々人と、軍艦とを所有したがる傾向があるものである。

飛行機は戰時偵察任務遂行の爲めに、有效であらう。此等は艦隊の長官にとり、從來よりも一層價値ある通報を齎らすことが能きよう。併し或る論者が云ふ樣に、驅逐艦よりも有力であるとは、今のところ思へない。又彼等自體が、戰鬪要具ではないが、戰鬪を爲すところの軍艦の助けには、大に役立つであらう』

此の應答があつてから、會談は終つたので大將は私室に退いた。而して夕方招きに應じてゐる白堊館の晩餐會に臨む前の少憩をとつた。

東鄕大將はニューポートを視察する豫定である。一體提督たるものが米國を訪問したからには、一大水雷工場と海軍教育機關を見ないで素通りすると云ふことはあり得ない。若し之を見殘すならば米國視察は完全なものとは云はれない。

大將は又コースター・ハーヴァ島の海軍大學校や、ナランガンセット灣の周圍に點在するフォート・アダムス、グレベル、及びウエザーレルをも視察するであらう。

彼は又同地に於ては、特にオーガスト・ベルモント氏に依つて歡待せらるゝ筈である。氏は彼の有名なるベルリ提督の令孫に當る人である。マシユ・カルブレース・ペルリ提督は、說明する迄もなく、日米最初の條約を締結し、日本を世界の市場に開いた人である。

歡迎攻めは米國流の缺點

八月六日ブルークリンのスタンダード・ユニオン紙は、左の如く論じてゐる。曰く、

東郷大將は最早米國の歡迎振りに就て、相當味つたであらうから、何かの感想を有してゐるに違ひない。併し吾人は、彼が餘りに凝り過ぎた歡迎方法を心から喜んでゐるや否やを審かにしないし、又之を聞く必要もない。

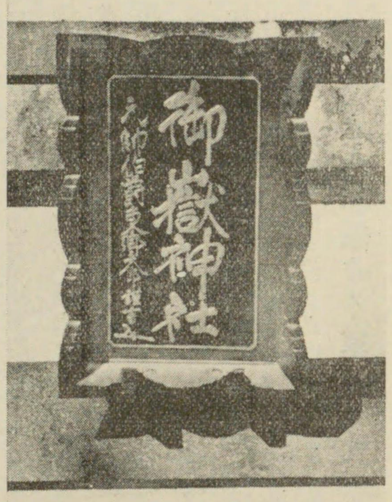
然し想像するに、國賓を遇する我が國民のとれる方法に關し、彼は確かに一の缺點を認めてゐるものと思はれる。

彼は決して此の歡迎を以て、吾人を目して不深切とは萬々考へてゐないであらうとは信ずるが、歸國する前に必ず感ずることは、寧しろ之と反對に歡迎攻めの苦しさを窃に訴へるに違ひない。

我が政府や國民は、此の名高い賓客を遇するに、あそこでも、此處でも、騒々しく、優待の意味で以て、招待若しくは視察を强請し、彼をして休息の暇なからしめ、之が延て彼をして疲勞困

憊に導いてゐることを否定し得ない事實がある。

此の方法は全く歐羅巴諸國のとれる方法と其の趣を異にしてゐるのである。此等の國では、必ずや一の招待會と他の招待會との間に休憩の時日を置き、被招待者をして疲勞せしめない用意をするのが原則となつてゐる。



木曾御嶽山御嶽神社、東郷元帥書の鳥井の扁額

米國に於ては、政府の手に握られたる國賓に對し、休ませるといふ考へが毫もないのは遺憾千萬である。

此の度の歡迎振りも、夜間の數時間を除いては、彼には休息の時間を與へてゐるとは思はれない。何んとなれば、接伴官とか云ふ役目の人々は、次々のプログラムを進めて往く爲めに、其の時々に遲らせぬやうにと、精々注意してゐるので、毎日々々一刻の餘裕も與へない仕組になつてゐるからである。

今度の如く、飛び〳〵の各地巡遊のプログラムの性質上、多忙であるのは無理もないが、そ

れが餘りに極端なので、寧ろ米國人の多忙なる氣質を表はすてふ境域を通り越して、寧ろ之を誇りとするが如くに見える狀況である。

吾人は此の世界に出て來て、間もない國民である。其の青年國の潑溂たる業務を外人に見せたがるの風があつて、短期漫遊者に向つても、能きるだけ、多くのものを見せんとする癖がある。其の一例として、米國人は、此の國に渡つて來たばかりの、初めての旅客に對して、直ちに此の國に就ての感想を訊いたり、而して贊辭を強要するが如きは、卽ちよく其の國民性の缺點を暴露するものであつて、大將に對する場合も亦さうであつた。

由來外國人は、米國をば客好きな、愉快な國民だと見るものが多い。が、併し又其の缺點としては、旅客を御馳走攻めにして、少しも之に餘裕と休息を與へぬといふことである。

人生須らく軍人たれ

八月五日附のシカゴ市レコード・ヘラルド紙は、大將の處世觀を紹介してゐる。

新聞記者に對し、東鄕大將が述べたものとして、傳ふるところに依れば、曰く、

『戰へ！　須らく戰士として、人をして平和時に於ける產業に就て、其の能率を揚げ、之に成功せしむるには、人として須らく戰士たらざるべからず』と。

嘗て米國の有名なる將軍にして、戰士たりし人も、『軍人道德』は、民衆生活に對しても實によく充て嵌まるし、又軍人たる民衆が、よく能率を揚げ得ると敎へてゐる。

遮莫、日本の大提督の云ふところは、恐らく各人は須らく活動的であり、用意周到であり、財產だとか、享樂だとかよりも、もつと高尙なるものに對し、獻身的奉仕を爲し、欣然として艱難なる事業を遂行し、正義と眞善に向つて、犧牲とならねばならぬと敎へたのであらう。成程此の意味に於ては、吾人は悉く戰士でなくてはなるまい。

戰士と云つても、それは進步的な、而して建設的、刷新的な、正義の公民的經濟のものを謂ふのである。

吾人は道德的の勇氣が、體力上の勇氣よりも、一層高尙にして且つ得難きものであること、並に平和の永續及び革新は、一に前者に依るべきことも承知してゐる。

平和の時代にも、道德上には、常に戰爭が存在してゐる。其の道德的戰爭といふのは、自己の性質、不快惡德、劣情及び利己主義の征服を謂ふのである。

凡そ何が道德を壞亂するかと云へば、怠情無頓着、無趣味、利己主義等である。吾人は徹底

したる平和の社會に於て、眞に所謂戰士――軍人であらねばならぬ。然り而して玆に特に謂ふ軍人とは、素より身に寸鐵を帶びず、從つて掠奪、殺人の行爲をしたりするものゝ謂では無論ない

眞夏の休暇季節を一變

八月六日華府のポスト紙は、前日の白堊館の晩餐會其の他の狀況等を詳細に報じてゐる、曰く、

去る八月三日の夜、東鄕大將が米國に到着して以來と云ふものは、毎年ならば休暇である ので、極めて閑散空虚なるべき華府の社交界は、俄然多忙繁劇を加へた。夏の宴會は稀れな出來事であるのみならず、今度は服裝の點から謂つても、頗る珍らしい遣り方で、全く冬が來た感がする。

いつもならば、こんな國賓を遇するには、るなくてはならぬ社交界の淑女達も避暑に往つてゐる爲めに、宴會は男子のみで所謂スタグ歡迎會となり、何となく淋しくて、もの足りない

感じがする

內田大使夫人は、今夜ウイラード・ホテルで行はれる大使主催の大將歡迎會の爲めに態々避暑地たるヴエナ・ヴイスタ溫泉地から、昨日歸府した。

明日は國務卿ノックス氏の主催にかゝる歡迎會が、最も莊麗なる汎米聯合ビルヂングで行はれ、明後日は又海軍卿代理ウインスロープ氏に依つて、メトロポリタン倶樂部で開催せらるゝ豫定である。

昨夜の白堊館に於ける歡迎會は、最も顯著なる多數の紳士を集めたのも目立つたが、又華府で行はれた從來のものと大に其の趣きを異にした方法であつたのも頗る興味あることであつた。

其の中で最も變つてゐたことは、男子ばかりの集園であつたことである。又盛夏の季節に、斯くの如き大仕掛の宴會の行はれることも未だ例のないことである。

斯くの如き宴會にタフト大統領夫人を始め、顯官紳士の夫人が一人もゐなかつたと云ふこと自體が、既に頗る珍現象であつた。

ワシントン展墓の記

八月七日の紐育サン紙は、標題の記事を掲けてゐる。それは左の通りである。

昨六日東鄕大將は、國父華盛頓の展墓を行ふた。彼は大統領用のヨット・メーフラワー號に座乘してポトマック河を下りヴーノン山の前記墳墓に花輪を捧げ、深厚なる敬意を表した。

(註)合衆國建國の偉勳者として、將た又米國魂の權化として、國民崇拜の的となつてゐるワシントンの墳墓は、華府を距る十六哩、ポトマック河に沿へる風光明眉のヴーノン山にあり。此の地は嘗てワシントンが建國の志成りて隱退し、悠々自適餘生を送れる舊蹟にして、今尙ほ墓地の附近に存在する質素な小屋こそは、此の偉人が、天命を樂しみつゝ晏如として逝きたる、合衆國隨一の淨地たり。されば永久に彼を敬慕せる國民は、種々の工夫を凝らして、此の邸宅の保存に努め、其の外部は勿論、室内の一器一物たりとも悉く當時の儘とし、以て此の偉人を偲ぶ遺物として愛敬せるなり。

偖當日の模樣を詳記せんに、メーフラワー號はヴーノン山麓に投錨し、大將及び其の一行は二隻のランチに分乘して上陸した

此の一行に加はつたものは、男爵内田大使、谷口副官、海軍卿代理ウインスロープ氏等三國務次官ヘール氏、海軍少將リチヤード・ウエーンライト氏、同ダブルユー・ピー・ボツター氏、同シー・イー・ブリーランド氏、同アール・エフ・ニコルソン氏、同ジー・ビー・ハーヴアー氏及び海軍大佐チー・ボット氏等であつた。

墓前に行はれた儀式は、吾人に深い印象を與へた。塋域の大鐵扉開かるゝや、大將は帽子を脫し、高さ二呎に餘れる花輪を携へて、肅然圍ひの内に入り、手にせる帽子が地に屆くまで低頭しつゝ進み、ワシントン夫妻の墓前に恭しく最敬禮をなし、兩墳墓の中間に豫め据ゑつけられた鐵架上に、念入りに花輪を供へ、默禱稍々之を久うし、脫帽の儘、鞠躬如として墓前を退いた。此の間他の人々は、入口にあつて、之れ亦脫帽して敬意を捧げてゐた。

大將は偉人ワシントンの傳記に就ては、可なり詳しく承知してゐる。而して一行のものに對して、『彼は歷史上の大立物である』ことを幾度も繰り返へして語つた。又彼は此の偉人の墳墓に直接參拜することをば、長い間希望してゐたことをも附言した。

大將は又ポトマック河を眼下に見下ろす場所に建てられた、ワシントンの舊邸を訪ひ、其

の貴重なる遺物を觀て、頗る感動した樣子であつた。其のとき、さも平和らしい靜寂を極めた此由緒ある地點からの眺望の絶佳なることにも興味を惹いたらしく、一再ならず美景美景と感嘆の聲を放つた。惟ふに之はメーリーランドの小丘を越えて、ポトマック河の廣々とした光景に憧憬した爲めであらう。

副陵監督のヤング氏が、舊邸の案內に當つた。大將は非常に興味を感じて、各室を殘らず見たいと、熱心に希望したので、案內役は其の意に從ふた。ところが大將は、遺物の歷史的說明を聽く度毎に、實際感に打たれて、一々眼を之に逅づけて見入つた。特に書院に於ける、將軍の所持した刀劍に留意した。又圖書室を視たとき、若干の書籍の見返へし頁に將軍の自署のあることに氣を止めて閱覽した。又當時の古い測量機械や、火糧銃をも熱心に凝視してゐた。

斯くの如くにして、大體展墓及び舊邸宅の視察をも終つたので、大廣間で、小さい芳名錄に、內田大使と共に署名せられた。

大將は邸內の一部にあつた一小樹に就て、說明を與られたのは、大層喜んで聞いた。之によると、其の樹木は曾て伏見宮殿下の御手植になつたものだと判つたからである。

茲に於て大將は小丘を下り、往途と同じく、メーフラワー號に乘り、遡航の歸路に就いたが

同船はワシントン邸の境域を通過し終るまで、常の如く半旗の禮を行ひ、吊鐘を鳴らし、船上の將校は悉く直立不動の姿勢をとつた。大將も亦之に倣ふたが、特に其の態度が極めて謹嚴であつたので、皆々驚嘆し感動を與へられたこと頗る大であつた。此の儀禮は素より米國海軍で定められてゐるもので、外國人に迄及ぼす意志は毛頭ないのである。

斯くてメーフラワー號は、午後六時海軍工廠に着、大將は直ちに自動車にて旅館に向つた因に大將は此の夜は日本大使の歡迎會に臨む豫定である。

華府市中見物

八月七日の紐育タイムス紙は、左の如く報じてゐる。

大將は昨六日接伴員の案內で華府市中見物を行つた。前日の夜會で就寢の時刻が、大層遲くなつたので、今朝の朝食を終つたのは、午前十一時であつた。そこで海軍大佐ボップ氏、第三國務次官ヘール氏が訪問し、大型自動車に乘つて市中に出掛けた。

先づワシントンの銅像、次に國立圖書館、國會議事堂を視察し、次でポトマック河畔の大道

をドライブした。

此のとき大將は、夏季服にパナマ帽といふ服裝であつたが、此の見物が濟むと、旅館に歸り、急いで金モールの禮裝に着替へ、海軍工廠に向つて出發した。之はヴーノン山展墓の爲めであつた。

八月六日の夜は内田大使の晩餐會があり、七日にはナショナル・プレッス倶樂部、八日には海陸軍倶樂部の歡迎會がある。尙ほ同日の朝餐は、特に國務卿副官ハンチントン・ウイルソン氏に依つて供せられることになつて居り、其の席上の司會は、同氏夫人が之に當ることに豫定せられてゐる。其の他の夫人達も陪食する筈であるから、華府に於ける婦人の接待は蓋し之が唯一の催ほしであらう。

アナポリス海軍兵學校視察

八月七日アナポリス・イブニング・カピタル紙の記事に依れば、大將の兵學校視察は左の通りであつた。

東鄕大將は、豫てアナポリスの海軍兵學校を視察することが、米國旅行中の最も興味深いことだと云つてゐたが、本日遂に其の機會が來た。

大將が此の國に到着するや、先づ第一に、

『海軍將校たる余としては、未來の米國提督を養成する學叢を視ることが、自分にとり多大の吸引力を有す』

と述べたと傳へられてゐた。

大將一行は、華府から特別仕立の列車で、正午少し前にアナポリスに到着した。而して公式の儀禮や、私的の優遇が、彼の爲めに行はれた。

日本の海軍大將に、兵學校の各部を視せるといふことが、將來此の國の爲めに、不利益になるなんかといふ憂慮は、毫も表面的にはなかつた。されば大將の視察せんとする部分は總て案内せられ、殘る隈なく其の意に應じた。

接待案内に當る教官の外、凡ての教官及び生徒は、常の如く、各教練教務に從事し、ありの儘の狀況を大將に示すことにした。

大將が兵學校に到着したとき、校長エッチ・ジブソン氏及び高級教官は、之を門前に出迎へ、

又海兵の一箇中隊は、同所に整列して、捧銃の敬禮を行ふた。

それより大將は直ちに校長の官邸に案内せられ、そこで晝餐を供せられ、教頭や二、三の高級教官を引見、次で食卓を共にした。

生憎定期の巡航教務の時期に遭遇し、上の三學級の生徒が全部不在であつたので、此の評判の高い、現代の英雄に直接面接し、且つ彼等の教練を見て貰へたのは、僅かに新入生徒だけであつた。從つて全校生徒の觀兵式も閲兵式も將た又其の他の教練をも行ふことが出來ず、又最下級のものだけでは、之を演ずることが不能であつたのは、大將にとりても、もの足らなく感ぜられたことであらう。

それのみならず此の僅かな新入生徒は、各部に散在して、教授を受けてゐたので、觀兵式の如き生徒集團の教練も閲覽に供することが能きなかつた。

されど新入生徒は、可愛らしい少年であつて、之が未來の將校の卵だと云ふことは、大將に對して興味ある感じを與へずには置かなかつたであらう。

華府から同伴した人々は、ヘール氏、ボッツ海軍大佐及び二、三の若い海軍士官であつたが、學校側では、特に校長始め、生徒主事代理海軍中佐イー・エッチ・デューレル氏、副官アドルフ・アンドリユー氏等が、特に留意して接待に努めた。

學校を辭するのは、多分午後四時過ぎであらう。而して其の際には、十九發の禮砲が發射せられることになつてゐる。

大將の此の學校視察中には、其處に碇泊してゐる二隻の軍艦の案内も含まれることになるであらう。此の二隻といふのは、米國にとり、最も光榮に輝く歷史を有するもので、それは目下學校附屬になつてゐるハート・フォード號と、オリンピヤ號である。

ハート・フォード號は、モビル灣に於けるファラガット提督の旗艦であり、オリンピヤ號はデューエー提督がマニラ灣の海戰に指揮せしものである。

校長主催の晝餐に列したものは、大將の外に、埴原大使館一等書記官、谷口副官、平賀大使館附武官、同井上陸軍中佐、岡部大使館書記官、大統領祕書ホール氏、ホッツ海軍大佐、クック海軍大尉であつた。尙ほ學校側からは、校長ジブリン氏を始め、副官アンドリユー氏、生徒主事代理デューレル氏、海軍中佐スケール氏、同コール氏、軍醫ピツケル氏、海軍少佐ウエル氏、同ラビイ氏、海兵隊中佐モーゼス氏、及び文官教授テレイ氏及海軍中佐キンカイド氏が陪席した。

敵艦隊を海底に送るは恰も皿を階下に滑らすが如し

八月七日シカゴ市のアメリカン紙は左の如き讃美の筆を振つてゐる。曰く、

東郷大將は今や米國にあり。彼は海に於ける世界最高の英傑である。——少くも我等の知れる範圍に於て、現存する海の最高偉人である。

彼は日露戰爭に於ける日本の大黒柱であつた。

彼は露西亞の艦隊を海底の藻屑と化せしめた偉大なる紳士である。敵艦隊を一隻宛海底に送つた其の手際の靜かさと、沈着振りは、恰もよく慣れたレストラントの女給が、一枚一枚の食器皿を運搬器に依つて階下に送るにさも似てゐて、實に見事なものであつた。

始め露西亞は、日本に對して只一撃を加へさへすればよいと考へてゐた。詳しく云へば、露西亞の皇帝及び其の政府は、日本に所謂みね打を喰はせれば、それで十分で、深く立ち入つて戰爭などのことをば考へてゐなかつた。

されば露西亞の國民は實はあの戰爭に餘り關心は有たなかつたのである。故に彼等の

戰爭ではなかつた。——彼の心の奥底には、あの戰爭はなかつたのである。

日露戰爭の未だ始まらぬ前に、我が新聞は日本は露西亞に勝つであらうと豫言した。それは一方日本政府では、其の國民を背後に有つて居り、之に反して露國政府の下には、自己に反對する國民を控へてゐたからである。

それのみでなく、露國人中の猶太系のものは、嘗て其政府から殘虐な目に遭つてゐる關係上、彼等の出る戰費は、露國へでなくて、日本へであらうから、必ず露國が敗北するであらうと考へてゐた。此の譯合から、日本の財政狀態を以てしても、確乎たる信用に依り、公債を海外に募り得るから、日本は軍費に困ることはないが、露國は當然國内から得らるべき多額の財帑を失つてゐた。

今や戰勝の榮冠を得たる例の大偉勳者、東郷大將は、公式訪問の爲めに、我が國に來てゐる。

彼を歡迎せよ！　彼は歐羅巴に束ける、横暴にして且つ卑怯なる行爲をする壓迫者に、痛棒を喰はした大人物である。

吾人は彼をして其の前途の旅行を愉快にし、且つ各地に於て優遇せらるゝことを希望する。

ワシントン展墓は對米好感

八月七日紐育州のリーダー紙は、左の記事を掲けてゐる。

愛國心に燃ゆる凡ての我が國民の胸中に、自然と感謝の念を禁ずることの能きないのは、東鄕大將が、今度我が國父ワシントンの墳墓に、親しく花輪を捧げし、其の行爲であらねばならぬ。

其の行爲は、取りも直さず『現存する愛國者の、記念すべき愛國者』への尊敬心の發露でなくて何であらう。而して一面此のことは、偉大なる提督の、偉大なる將軍に對する生きたる敬意の表徴を立證するものであつて、吾人米國民にとり、實に感激に堪へないものがある。

素よりワシントン將軍の、歷史上の地位は、夙に普く世界に知れ亘つてゐるが、特に近代の日本政府が、我が國に對する深甚なる友情の迸りが、此の形になつて表はれたもの、と固く信ぜざるを得ない。

我が國内には、所謂主戰論者なるものがゐて、日露戰爭以來其の聲は未だに潛むに至つて

ゐないのは、事實である。然るによく〳〵考へて見れば、何等日米の間に、さ程微妙な關係が存在するやうな、前兆は見出し得ないのである。假りに或る人が、血眼になつて探して見ても、日米兩國政府の取扱つてゐる範圍に於て、敵として對抗すべき程の事件は見つからない筈である。

目下行はれてゐる各地の歡迎會及び其の他之に類する努力は、此の太平洋を相挾んで相對峙する兩國を、分離せしめんとする主戰論者の目的を、十分に打ち消し、益々相互の友情を厚くし、以て大將の旅行を愉快にすることに力を加へるであらう。

之れと同時に主戰論者は、嘗て我が國の著名なる人が、日本を訪問したとき、彼の國の皇室や、政府、國民に依つて示されたる厚意を念頭に置き、何等戰爭などの兆候のなかつたことを想起して、もつと考へねばならぬ。

ワシントン展墓の儀禮

八月七日紐育ヘラルド紙は、東鄕大將のヴーノン山に於けるワシントン展墓の狀況を、他

の新聞と異なつた方面から記述してゐる。曰く、

ワシントンの展墓に際し、大將は其の墳墓の前に恭々しく額づき、打ち震へる手にて、花輪を供した其の謹嚴其のものゝ態度は、米國人の未だ嘗て見ざる莊嚴極まれるものであつたので、此の一行に連りて、之に陪席した士官達は、此の劇的光景に對し、互に顏を見合せて感激と感動の表情を交はした。

之より先き、其の展墓の方法儀禮に就ては、大將からは、どうすればよいのか、どうすべきかと云ふが如き質問は何等なかつたので、此の場に關する限り、大將の思ふ儘に行はれたものである。

此の展墓の旅行には、凡て白い夏服を着用した。之は盛夏の服裝としては、極めて當を得たものであつた。而してヴーノン山に登る前に、米國士官の一人が、輕便簡易の見地から、一行のものは、凡て同じやうに劍をば、船の中に置いて、無佩刀で、山に登つてはどうかと提議したものがあつた。

そこで東郷大將にも、厚意的にこのことを傳へると、彼は强く首を振つて、

『君達は隨意にするがよい。併し余は死者に對し、完全なる制服を着して敬意を表したい

悉う云つて之に應じなかつた。

メーフラワー號の船中、往途には往々の雜談が米國人の間に交換せられた。此の一行に加はつた海軍將官は、其の多くは米國艦隊が、世界周航の途次、日本に於て少くも大將に一面識ある人々であつた。

海軍少將ハーヴァー氏は、其の艦隊には乘つてゐなかつたが、其の後東洋艦隊に在勤したことがあつて、大將もよく承知して居られた。

一行中の米國士官の一人が云ふには、

『日本海軍にも米國の老將官淘汰制度の如きものが、日露戰爭當時あつたならば、偉大なる今日の東郷大將は產れて來なかつたであらう』と。

他の一人は、默然として、何等此等の談話を氣にしないでゐる大將を眺めて曰く、

『さうだワシントンの場合でも同樣だ』

と横合から口を開いた。

去る五日、大將が新聞記者に語つた、將來の海軍問題に關する意見に就ても座談に上つた。而して米國の將官も、全く大將の此の意見に同感で、譬へ仲裁々判條約が締結せられても、海軍の增勢や艦船の建造を忽がせにしてはならぬことに、此處でも衆議一決した。

東鄕大將原稿を探す

八月七日の紐育ヘラルド紙は、左の如き三面記事を掲けてゐる。

去る土曜日の晩、大統領の晩餐會に臨んだ東鄕大將は、答辭を述べる間際になつて、大禮服の內ポツケツトに手を入れた。而して裏返へしにして迄見てゐたが、何も出なかつた。又他の側のポツケツトに就ても同樣のことを繰り返してゐた。何か探してゐるやうであつた。

之は大統領の日本皇帝陛下に對する乾盃の辭に答ふべく、用意してゐた原稿の紙片を見付ける爲めであつた。

斯くて大將は、如何にも困つた樣子で、更に他の入れ場所を探し始めた。そこにもなかつた。茲に於て彼れの眉間には、容易ならざる險惡さうな緊張さを呈した。併し尙も最後の努力に依つて、探査の結果意外のところから、それが發見された。そこで始めて大將の額の皺も伸び、元の晴々しい氣持になつた。而して勿論答辭も滯りなく、立派に終つた。

東鄕大將の飛行機論

八月七日紐育ヘラルド紙は、過日大將が、新聞記者に語つた海軍問題、就中飛行機效力問題に就て、左の如く批評を加へてゐる。曰く、

東鄕大將は、新聞記者との會見に於て、簡明率直に飛行機の軍事的價値に就て、公平なる見解を下した。

彼は戰鬪作戰に於ける飛行機の重要さ、特に其の偵察任務に關する價値をば、十分とは云はぬが大體認めてゐる。而して米國の海軍學校の多くのものも、今のところ之が戰艦破壞の武器であるとか、戰艦にとり驚異すべき危險物だとかは思つてゐない。此の點は一致してゐるやうである。

之に關する實驗は、目下大西洋艦隊が、初步的のものではあるが、行ふて居る關係上、又之を驚異の眼を以て、世人が之を眺めて居る現狀から考へて大將の之に關する意見は、非常に興味を以て取扱はれてゐる。

大將は前記の如き意見を發表してゐるが、併し其の理由に至つては、何等之に言及してゐない。故に審かに之を知ることは能きないが、察するに、それは次の理由に據るのであらう卽ち當然直面せねばならぬ反擊の危險や、其の喧噪なる音響に依る必然的の探知から、不意の襲擊の不可能なることや、一擊の悲運に遭遇せぬやう飛翔する爲めには、命中の不確實や將た又高勢爆彈の落下も、單に局部的の毀害を與へるのみといふ證左を有するが故であらう。

偵察は恐らく大將の云ふ如く、戰鬪活躍場裡に於ける主なる仕事であらう。而して正に此の着想は謬りのないものであらうが、其の任務遂行の能否は、一に之が携行してゐる無線電信裝置の機能如何によるものである。然るに今のところ其の重量の關係もあるので、大裝置を積む譯に往かず、從つて遠距離偵察は不可能である。

此の他飛行機は、遠く隔離せる兩艦隊間又は海陸相互の通信連絡に使用し得るかも知れない。之が現在の可能性の全幅と云つてよい。

併し將來如何に發達進歩するか、換言すれば、飛行機が現在表面に出してゐない如何なる蘊蓄があるかは、神のみが知ることで、吾人の想像を許るさない。されど飛行機が果して戰艦を破壞し得るか否かの問題が、尙ほ解決してゐないことだけは確かである。何んとなれば、目下行つてゐる實驗は、頗る幼稚のもので、未熟者が百呎ばかりの低空を飛翔し、地上に畫かれたる劃線内に、擬爆彈が落下するか、否かを、蜜柑や、雞卵を用ひて試してゐるに過ぎないからである。

東郷帽子の流行

八月七日の紐育イブニング・ウォールド紙には、次のやうな記事が載せてある。曰く、

東郷大將は新流行品を、米國に紹介した。それは何か？　彼が市中見物に用ひたパナマ帽子である。軟くて、丸くて、内側に折り疊みの能きる代物である。之を世間の人が、欣んで『東郷帽子』と呼んでゐる。

彼がそれを冠つてゐるのを見ると、紳士たる大將のものとは思へない、全く百姓の帽子そつくりである。而して之を着けてゐるところは、どうしても六十幾歳の人とは思はれない。四十歳そこ〳〵の人に見える。

彼は最早いかめしい儀禮は素より、米國流の私交的應對にも餘程慣れて來たやうに見受

けられる。其の一例を擧げて見ると、一臺の自動車に鈴鳴りに乘つてゐた少女達が、大將の自動車にすれ〳〵に寄つて來て、ハンカチーフを打ち振つたことがある。之を見て嫌な顏でもするかと思ふと、左にあらず、寧ろ打ち興ずる迄になつた。此のときの近接の狀況は、傍らで見てゐても危險を感じたくらゐであつたが、彼女達はハッローと叫び、萬歲と呼びかけ、大將の洪笑するのを見たといつてゐる程であつた。

大將と同乘した一行の人も、右の事實の一部のあつたことを肯定してゐる。併し大將は微笑こそすれ、決して口を開けて笑ふなんかと云ふことはなかつたし、又此のときばかりでなく、また嘗てそんなことは見たことがないと打ち消してゐる。

（註、八月七日の紐育州ウチカ、プレッス紙は、上記の如き失禮な行爲は、單に偉人を近くで見んとする一種の尊敬心の度を超えたもので、決して惡意や惡ふざけではないから、寬大なる大將は、宜しく其の行爲を咎むることなく、其の純心なる心を嘉納あらんことを希望すると述べてゐる。）

東郷大將を陷落させた殊勳者

八月七日のヒヤデルフイヤ、レコード紙は、左の挿話を載せてゐる。曰く、

ワシントン展墓の歸途のことであつた。

大將はメイフラワー號の甲板上、安樂椅子に腰を卸ろした。而してハーヴァー海軍少尉と暫時雜談してゐたが、いつの間にやら、首を垂れたかと思ふと、直ちに深い假睡に入つた。

そこてバーヴァー氏は、そつと歩を轉じて少しく前方にゐた仲間の列に加はつた。

同僚の一人が、此のことを聞いて、悉しく同氏に祝辭を呈した。曰く、

『君はロゼストウエンスキーが爲さんとして成し得ざりし功業を完成したものだ。卽ち東郷大將を陷落させたのは、世界中で君一人であらう』と。

實際に東郷大將は、疲勞を感じてゐたのであらう。前夜は大統領の晩餐會に列して夜遲くまで勤め、それから歸つて寢に就いたのに、今朝は又そこ〳〵に朝食を濟ませて、午前十時には出迎の接伴員に擁せられヴーノン山に登つたのであるから、無理もない。寧ろ其の無

休憩の應接には、多大の同情をしてゐる。

全國新聞倶樂部に於ける大將のスピーチ

八月八日紐育トリビューン紙は、全國新聞記者倶樂部主催の歡迎會の狀況などを書いてゐる

東鄕大將は、米國到着後、直ちに我が一般國民に向つて、聲明を發したが、それ以來そんなものは出さなかつた。然るに其の第二回目のものが、極めて簡單ではあるが、昨七日の新聞倶樂部の歡迎宴の席上でなされた。

大將は先づ日本語で之を述べ、例の谷口副官が之が通譯の勞をとつた。大將曰く、

『余は今夕此處に全國新聞倶樂部會員諸子と相會するの光榮を有する。余は諸君のとれる職業の尊敬すべきものたることを、常に念頭に置き、其の事業に對し感嘆してゐるものである。余は貴國到着以來、大共和國たる米國の大統領よりは特種の待遇を享け、國民諸君よりは眞情の籠れる歡迎に接してゐる。斯くは余にとり過分の歡待にして、畢竟斯くの如きは日本皇帝陛下及び其の臣民に對する、貴國政府並に貴國民の友情の發露に外ならざることゝ確く信ずるものである。余は此の度の米國訪問に由つて、斯くの如き幸福なる印象を得之を故國に齎らし得ることを頗る欣快とするものである。

諸君！　余は此の地に上陸して以來、貴國民より受けたる熱誠なる歡迎に對し、深く感謝し居ることを、諸君の筆によつて普く之を米國民に傳へられんことを望むと同時に、又諸君が余の爲めに、特に今日のレセプションを開かれたることを感謝し尙ほ併せて、全國新聞倶樂部の益々隆盛ならんことを祈るものである』と。

アナポリス海軍兵學校を稱讃す

八月八日の紐育トリビューン紙は、兵學校視察に關し、左の如き記事を載せてゐる。曰く、

昨七日、日本の海の名將伯爵東鄕大將は、アナポリスの海軍兵學校を視察し、練兵場及び場内を隈なく案内された。

彼れの同校視察は、實に忙しい旅行であつた。之は漸く其の日程を繰り合せて成立つも

のであつた。併し其の三時間の全部を同校視察に傾注した爲め、十分に之を視ることが能きた。而して彼は同校に就て頗る之を讃美し最も完全な又含蓄多き學校であると折紙をつけた。

大將は午後零時三十分にアナポリスに着、校長の供せる晝餐を終り、運用術講堂や體育館を視察した。そこには二百二十人の第一學年生だけが、柔軟體操の初歩的練習を行つてゐた。—第二學年以上の生徒は、常例の巡航に出てゐて不在であつた—。

大將は若い生徒達が、練習するのを注意してたばかりの—が、其の眼を直前にのみ注ぎ、頭を垂直にし、よく教育方針を嚴守し、敢て參觀の士官などに注意を奪はれなかつたことに就て感心せられ微笑をさへ浮べられた。

體育館を經て同校の中心建築とも謂ふべきバンクロフト講堂に至つた。此處では大將はジョン・ポール・ジョン提督の遺骨堂の前に進み停止し敬禮した。

又ヂューエー、サムブソン及びファラガット諸提督の肖像畫も亦大將の興味を惹いたらしく、各々其の前に立つて長い間凝視し考へてゐた。

併し大將の最も興味を惹いたものは、物理學と機械學の兩教室の內容であつたらしい。此處では生徒達が構成學や、航海術の問題を一生懸命に解いて居た。而して其の中の十二

人ばかりは實業を取扱つてゐた。

大將は又電氣の神祕や、無線電信術の敎授を受けてゐた敎室をも覗いて、尖銳なる興味を感じたらしい。敎會堂を案內したところ、此處へは一寸步を停めただけで切り上げ、急いで華府への歸途に就いた。

此の日校長の官邸に於ける晝餐の席上、校長ジブソン氏は日本皇帝陛下の爲めに乾盃し大將は之に對し親ら英語で答辭を述べた。曰く

『吾々は此の學校に於て學び目下日本の艦隊に勤務してゐる將校の爲めに健康を祝したい。彼等は日米海軍の友交を結ぶ鐵鎖である』と。

英語が能きないのか

八月八日の紐育ヘラルド紙は、左の如く述べてゐる。

或る米國の海軍士官が、大將と直接會話を試みんとして失望したと云ふことが傳へられてゐる。

最早此の頃では、世人は東郷大將の何も話さぬことが、よく判つて來たので、諦めてゐた。然るに本日或る外交家の話から、まんざら英語を話さないことはないと云ふことが事實らしくも思はれて來た。と云ふのは、嘗て日露戰爭の起る少し前に、或る外國通信記者が、彼れの旗艦を訪問して日本の海軍の作戰方針などを訊いたところが、彼は流暢なる英語で答へた。ところが他の記者が往訪したときには、一語すらも解せず、從つて何等の答へもしなかつた。併し其の場合大將の卓上には、多くの英書や、同じく雜誌が置かれてあつたといふことである。

國務卿の祕書ハンチントン・ウイルソン氏は明日朝餐に大將を招待することになつてゐる。同氏は日露戰爭前に、彼れとは可なり親しい知己であつたが、當時は英語でお互に愉快に語り合つたと云つてゐる。

東郷大將車中によく眠る

八月八日紐育イブニング・ポスト紙は左の記事を載せてゐる。

アナポリスの海軍兵學校を辭して、華府に歸る途中、大將は連日の旅行視察などで疲勞したと見え、其の汽車中で眠つた。併しフト眼を覺ましては、夕刊に目を投げる。が、矢張り眼瞼は重かつた。されば又いつの間にやら、新聞は床上に落ち再び華胥に遊んだ。

接伴官たる我三國務次官ヘール氏も、彼に倣うて假睡の夢を結んだ。

時々汽笛の音に、或は傾斜地に來たときに、大將は目を覺ましては、妙な態度で威容を正したり、帽子を手元に引き寄せたり、新聞を拾ひ上げたりした。併しそれは結局無益であつた。何となれば彼は眞に疲勞してゐたのであつたから。彼はねむくない風を敢て裝はんとすれど、自然に眼は閉ぢる爲體であつた。之が幾度も繰り返へされた。

一度はチサピークの信號交換所に來たとき、三人の少女達に依て、目を覺ました。少女達は、窓から覗いて曰く、

『あそこに東郷大將がゐる』

『ほんとにさうだわ』

そこで大將は居ずまひを直し、それからは華府まで眠らなかつた。華府到着後は直ちに自動車でホテルに歸つた。さればそこでは、定めしゆつくりと小憩をとつたことであらう。

併し又其の晩には、午後八時からノックス國務卿の晩餐會があり、同十時からは全國新聞

倶樂部のレセプションに臨むことになつてゐる。又明日は海軍工廠と國會議事堂を參觀するプログラムがあるので、隨分と多忙なことであらう。

最新式巨砲の前に立つ

八月八日紐育のイブニング・ポスト紙は、左の如く報じてゐる。

本日東鄕大將は、華府海軍工廠に於て、最新式十四吋砲の砲口の前に立つた。

此の砲熕は現時世界中第一の有力なる巨砲であつて、我が國に於て今度始めて完成せられた巨艦テキサス號とニユー・ヨーク號に搭載する豫定のものである。

日本の偉人は、此の大砲の砲尾に頭を摺りつけんばかりに近づき、五十二呎半の吼中を覗いて見た。斯かる長口徑の大砲は、少くも米國に關する限り、まだ嘗て見ざる底のものである。

彼はいつも物に動じない風を裝ふてはゐるが、此のときばかりは、明かに其の溫容に變化があつたやうに見受けられた。而して近代的砲熕の最新知識の此の産物に向つて、頗る熱心に見入つてゐた。

それから尙ほも非常な興味を以て、廠内を殘らず視察した。素より急いだ爲め、素通りのところもあつたが、それでも米國海軍の偉大なる資源に對しては、甚大なる感動を受けたらしい。

次に鎔接工場、鑄物工場を視た。而して遮光眼鏡を通してアセチリン瓦斯作業に目を止め、或は職工が諸金屬材料を恰も飴細工の如く取扱つてゐるのには、驚いて見入つてゐた。

因に此等の工場は、外人は勿論關係者の外は、米國人と雖も見せない規則になつてゐるものである。

彼は機械工場及同附屬鑄物工場をも瞥見したし、艦型試驗所をも注意して視察した。此の艦型試驗所といふのは、模型及び算定法に依つて、實際の軍艦に必要とする船殼の强さ、速力等を決定する爲めのものである。

大將は案内役のビーチー海軍大佐に向つて、廠内の掃除整頓の行き屆けることや、其の規模の宏大なることなどに就て物語つた。

大將の工廠を去るに臨み、附近の旗竿には、日の丸の旗が飜り、同時に十九發の禮砲が鳴り響いた。

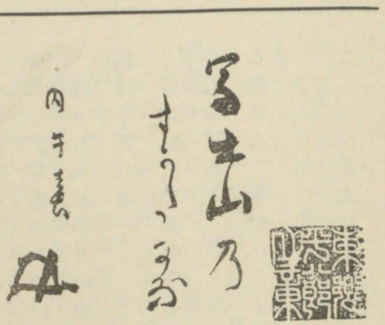
スペリー提督の展墓

工廠からの歸途、大將は合衆國議會附屬の圖書館を參觀し、時間の都合で議會參觀は中止し大統領秘書（アッシスタント・セクレタリー）ハンチントン氏の官邸に於ける晝餐の招待會に列席した。

午後は米國海軍に敬意を表する意味で、アーリントン墓地にスペリー提督の展墓を行ふた。同提督は嘗て世界周航の途次、其の艦隊司令官として、日本を訪問（たづねん）し、其のとき大將と知己となつた人である。

大將は花輪を墓前に供するとき、何事か日本語で簡單ではあつたが、眠れる故提督に對し、慇懃鄭重なる祈禱を捧げ且つ暫時默禱した。

華府に於て豫定せられたる四回の歡迎會の最後のものとして、



今夜海軍卿代理ウインスロープ氏の晩餐會（ばんさんくわい）があり、明九日は此の地を出發して、バルチモア及び費府に至り、續いて國内旅行を進めて行くことになつてゐる。因に費府に於ては、造船所をも視察する豫定である。

ワシントン墓前の歴史的光景

八月八日費府のインカイヤー紙は、他の新聞（しんぶん）と異なる方面から、大將のワシントン展墓を論じてゐる。

奈翁が埃及のスフインクスを凝視してゐろであらう。此の繪畫には二樣の寓意が存する。其の一は、十九世紀が、遠き昔を溫（たづ）ねて、新しきを知らんと欲するもの、他は西洋が不思議の東洋を觀破（くわんぱ）せんとするの意である

ワシントンの墓前に立てる東鄕大將は、右の名畫に劣らざる好對照と謂はねばならぬ。卽ち東洋の文明が西洋のそれの前に立てるもの、又十九世紀が十八世紀に訴ふるものでな

くて何であらう。

チヨージ・ワシントンが日本を知らなかつたことは、猶現代人がテムバクワー（註佛國領亞弗利加スーダンの互市場）を知らざると同じである。十六世紀の頃、和蘭の商人は、日本を開國に導かんとした。併し忽ちにして和蘭は日本の爲めに驅逐せられた。それ以來、日本は泰西の文明に關し、長く暗黑の裡に鎖されてゐた。

有名なるオリバー・ペルリの日本行と其の開國の事跡は今尙ほ兩國人の間に、顯著にして記憶に新なることなるを以て、茲に言及しない。何れにしても、現代日本の勃興は、十九世紀中葉の豫言者が、如何に其の想像を逞しうしても、到底今日を豫想し能はざりしものである。抑々日本が今日の地位を占めたる所以のものは、東鄕大將の功績の與つて力あることは絮說を要しない。

露國は其の全艦隊を日本海に喪ひ、其の結果奉天に大敗するに及んで、遂に和を乞ふに至つたのである。併し今から考へれば、露國が今少しく辛抱して戰つてゐれば、其の結果は或る程度まで違つたことになつたかも知れぬと見てゐるものもある。

併しそれは兎も角もとして、露國はあの戰爭で相當のものを失つたけれども、あれくらゐならば、結局大きな損失ではなかつたとも云へる。何となれば、敗北の露西亞にしても、之を

あれから十年前の現狀と比べれば、現在彼は滿洲に於て、一層固き地盤を得てゐるからである。

ワシントンは戰鬪に敗れて、戰鬪に勝つた。其の頃は米國には一人の提督もなく、一隻の鋼鐵艦もなかつた。海に戰爭に關係するところ甚だ薄く又當時使つた滑唐銃は、人を傷くこと昔の劍にだも及ばず、戰爭に敗れても、今日の如く甚しくなかつた。

ワシントンは幾度か戰鬪に敗れたが、まだ嘗て其の意氣沮喪せず、常に大局に着眼して、遂に結局に於て、勝を制した

ワシントンの墓前に立てる東鄕大將は、意義深い歷史的光景であつて、又實物的敎訓でもあつた。

此の二人は共に愛國心旺盛なる點に於ては共通ではあるが、著しく文明の程度を異にしてゐる。然れども日本の近年十年の進步は實に驚くべきもので、今や世界列強の間に伍して高き位置を占め、尠からず他國から恐怖せられてゐる。

我が國民は此の兩人の歷史を比較研究したならば蓋し得るところ頗る大なるものがあるであらう。

大將の私生活觀

八月八日の華府タイムス紙は、東鄉大將の私生活に就て左の如く述べてゐる。

大將が此の國に來るまでは種々の噂があつた。彼は彼のことが世の中に出ることを、一方ならず心配してゐると傳へられてゐる。

實際彼は世界で最も謙遜な人である　吾人が種々の文獻で見たところでは、少くも其の家庭生活が表はれてゐない。

然るに茲に日本に於て生れ、多年大將の日常生活に就て研究した人があつて、右の見地から、大將を觀察したものが手に入つたから、之を紹介する。

大將は家庭にゐるとき、時々避暑の爲めに逗子の別莊に往くことがある。斯かる場合には、彼は好んで古い衣服を着て、時代のついた菌形の帽子を冠り、水田の間や、海岸を逍遙する。だから之が日本帝國海軍の最高位にある人とは、どう見ても考へられない。寧ろ水田を耕してゐる農夫と間違はれ易い。

其の土地の百姓や、漁夫達は、彼がどんな服裝をしてゐても、大將を辨別することは容易である。其の慧々たる双眼、其の無骨髭の特徴があるからである。されど彼れが好んで微行することをも、よく承知してゐるので、彼等は心中多大の尊敬を拂つてゐながらも、態と知らぬ顏でゐるやうに努めてゐる。

之れと同じく、家庭生活の簡易さも亦彼の特徴である。彼が家にあるときは、其のゆるやかな、而して着心地のよい和服をば、好んで着てゐる。公會の席上には、金色眩ゆき肩章や、飾緒の服裝で出るが、之は已むなく着けてゐるに過ぎない。

彼は太陽の出るのを待つて早起し、よく手入のしてある庭園に水を撒くのが彼れの年中不變の日課で、又花を育てるのも道樂の一つである。

彼れの生活中尙ほ他の娛樂は、毎朝綺麗な花卉と、枝振りのよい數枝を剪り取つて生花とすることである。

此の日本でいふ生花―我が米國の花束とは云へるが、どうか知らぬが―の組立は、葉の附いた二輪若しくは三輪の花を、或る規則の下に、釣合のとれた形狀及び色取りに仕立てるもので、季節に應じて、種々に應用されることになつてゐる。例へば或るときは椿或るときは山吹、又或るときは紫陽花といふが如き之れである。秋の終りには、多く菊花を用ひる。此

の菊は日本に於ては、一年中を費して入念に養育するもので、其の美事な花は、園主の特に誇りとする習慣である。

彼は毎朝家族と共に、簡單なる朝食をなし、それが終ると獨り書齋に閉ぢ籠り、終日軍事に關する書籍を耽讀するを常とする。が、少し手がすくと稀れには、好きな雜書をも讀んで、日を暮らすこともある

書齋は實に全く飾り氣のない小室で、制式のクリーム色をした、黒い緣附きの疊が布かれてある。室の光線は紙張の障子から採るやうになつてゐるが、此の障子は左右に滑走する幾枚かのものが重複してゐて、多くの場合は開放されてゐる。之は時々窓外の庭園を眺めたり、遠くの築山を望むる爲めである。

灰色の土壁の上方には、兩陛下の御肖像が奉揭されてあり又英國のコンノート殿下や、米國のヂューエー提督の寫眞もある。

此等の額面や、前記の生花の外には、何等の裝飾品らしいものはない。彼の座してゐる前には日本式の机があつて、其の上には埋高く積まれた來信が返事を待つてゐる。

毎日數百通の書簡が舞ひ込んで來る。此等の大部分は只一筆でもよいから、彼の手蹟を得んと希望する、其の手紙なのである。日本でもこんな名士の手蹟の蒐集家が多いので、偉

人を困らせてゐる。

友人達は多く夕方になつて詰めかけて來るから、その時刻になると自分の仕事を中止しなければならぬ。故に晩餐の用意が出來るまでは、喧ましい東京の政界のニュースを聞かせられたり、又時としては之に就て特別の指示を與へたり、或は又質問に對して、人事の相談にも與ることもある。

斯くして一日の日課は、朋輩との團欒を以て終りを告げる。而して此等の朋輩と云ふのは、平戰兩時を通し寢食を共にし以て彼の最後を飾つた人々である。

又時としては、若い人も訪問する。之は『人は如何に生くべきか、如何に行ふべきか』の指導者としては、彼を以て國内の第一人者と信ずるが故であつて、之に依つて自己のとるべき道に就て教訓を得んと希望するのである。

海の王

八月八日晩香坡（シンガポー）のプロヴィンス紙には、左の記事が載つてゐる。

日本のネルソン東郷大將は、將に當地に來らんとしてゐる。スポークスマン・レビューは、次の如く云つてゐる。

此の偉人に就て、吾人の想像心を唆ることは、軍神としてよりも海王として深いものがある。其の想像の中には、何か知らぬが海なるものに就て、もつと深く考へて見たい氣持がする。又大洋を制禦する人の力と云ふものは、猛虎を慣らすやうなものかとも思はれる。同時に戰時に於ける敵味方の兩艦隊の龍攘虎搏を想起せしめる。將た又吾人バイキング(註、八世紀の頃歐洲海面を荒らし廻つた海賊)の子孫たる英米人をして、其の血を熱湯の如く湧かしめる何ものかを感ぜしめる。

大將は憂國心に於て且つ又近代の名君と尊敬せられてゐる皇帝に對しての忠實心に於て、最上級の言葉を以て彼に充てる價値がある。

彼は現代科學の蘊奥を極めたものと謂へるし、其の海の戰爭に於ける技術に就ては、論評する程野暮の骨頂である。されば西洋諸國の國民は、一人も殘らず彼を尊敬すべきで、其の價値は十二分に具へてゐるものと謂つても敢て過言ではない。

雲龍會々員の署名

大正十三年六月三日
於華族會館
住山德太郎　大角岑生
櫻井眞清
濱田吉治郎
谷口尚真
寺田平吾
東郷大將
小岡繁茂
植村茂夫
小笠原長生
太田泰治
田中耕太郎
中村俊久
供泰夫
山本信口郎

朝餐招待會

八月八日華府タイムス紙には、左の記事が載つてゐる。朝餐の招待も珍らしいが、避暑季節の夫人司令の招待も、華府では稀れであるので、之を掲げて見る。

今朝國務次官ハンチントン・ウイルソン氏及び同夫人は、東郷大將を朝餐に招待した。之に列席した人々は、合計十六人であつて、其の氏名は左の如くであつた。

東郷大將、內田大使、ウインスロープ海軍卿代理夫妻、下院議員ロングウオース

氏夫妻同ダビッド・ジエー・フオスター氏、第三國務次官ヘール氏、東區司令官ラムスフオード・エス・ミラア氏、マックリントック夫人、ハグネル孃、谷口副官、松方某氏。

アナポリス海軍兵學校に於て

八月八日アナポリスのイブニング・カピタル紙には、左の如き記事がある。

大將は至つて小柄な人であるが、見るからに頑丈さうである。歩き方は早いが、小足でチヨコチヨコだ。併しそれが別に骨が折れるとは見えない。

校長のジブソン氏や、其の他の米國士官達と肩を並べて歩行してゐるのを見ると、特に目につけて呑たけが低く感じた。顏色は濃厚な銅色で、多年海上の陽燒を想起せしめるに充分である。

眼の周圍には特に皺が多くて、眼眸を隱してゐるから、眼の球が灰色なのか、青いのかすらも判じ兼ねるくらゐである。

口髯と顏髭は黑い。が、チラ〳〵と白髮も交つてゐる。此の毛深い樣子は、多くの日本人

に見るが如き特質をよく表はしてゐる。大將を日本人として見別ける特性は、先づ此の位のもので、他に何等吾人と相違はない。

英語をも話すには話すが、甚だ僅かであつて、多くは總ての會話を通じて通譯に依つた。通譯者に話すことは、極めて簡單で、通常一トロか二タ口、時には只眼の色や、素振りで示すに過ぎないこともあつた。

對話者の談話が分つたときには、通譯を待たず直に首肯いたりすることも屢々であつた。

彼は夏服の制服を着用したので、上衣も洋袴も眞白のリンネルであつた。而して階級を示すものは、只肩章だけであつて、之は黑地に太い金筋と、銀色の星が三つ附いてゐた。腰には立派な洋刀を佩いてゐた。

彼は慇懃叮嚀だと云はれてゐるが、此の學校視察に關する限りに於て、特にその樣には見受けなかつた。而して只豫定の日程を義務的に果たしたといふ風で、態度としても單に微笑を含む位のもので、特に取立てゝ語る何ものもなかつた。

併し一方に於て、何事に對しても、熱心に且つ尖い眼光で觀察した。だから如何なる些事でも取入れることに油斷はなかつた。少くともそれが、吾々をして感ぜしめた一般の表現であつた。

視察中彼は始終變らざる謹嚴そのもの、如き態度を示したが、學校を辭するとき、只一度微笑を浮べた。それは校長と握手するとき、通譯を介して、

『甚だ有益なる見學をした。優遇に對し厚く御禮を申上げる』

と挨拶をしたときのことである。

彼れの風變りの點は、記者との會見を好まぬことではなく、全く述べる材料がないからだと云ふことである。

埴原一等書記官は、大將の米國到着以來、大將に隨行してゐる一人であるが、其の人の話によると、大將は未だ嘗て何事も米國に就て所懷を述べたことはないと云つてゐる。而して同氏は尚ほ曰く、

『大將は未だ何が感動を與へたかを述べたことがない。要するに大將は、多くを云はないで凝つと考へてゐるのである。勿論大將は嘗て青年時代英國に學んだのは事實だが、今は英語を話すことを忘れてゐる』と。

ペルリ提督に贈つた半鐘

八月八日紐育デモクラット・クロニクル紙には、左の記事がある。

大將がアナポリスの海軍兵學校を參觀した日は、殊の外暑かつた。一行の或る人々にとりては、此の旅行は步行旅行の苦しみと大差はなかつたであらう。但し大將が如何に感じたかは知る由もない。

案內者の中には、此の學校で大將に見せて、欣ばせるものは、嘗て日本の、ミカド(註實は德川將軍)からペルリ提督に贈つた靑銅製の半鐘であらうと思つてゐた。之は校庭の一部に、小さな鐵架に依つて釣られてあつた。

然るに大將は其の前を通過するとき、右の說明を聞いたばかりで、碌に見もしないで、足早に通り過ぎた。

それよりも大將の興趣を呼んだのは、ジョン・ポール・ジョン提督の納骨堂であつたらしい。之は生徒館の大建築の一部にあつて、莊嚴に安置せられてある。

視察の終る頃が、最も暑い盛りであつた。が、艦て校長官邸に入り、涼風に浴したので蘇生の思ひをした。

艦型試驗所が最も興味を惹いた

八月八日華府イブニング・スター紙は、左の如く報道してゐる。

大將が此の國で最も目を止めて視察し且つ興味を感じたのは、恐らく紐育海軍工廠に於ける艦型試驗所の軍艦の模型であつたであらう。

之は日本の最高の海軍士官が、米國に於て見た初めての機會でもあり、且つ職掌柄最も價値あるものに相違ない。

大將は何事に就ても、中々容易に其の感想を述べないのが常であるが、前記の場合は、餘程深い印象を與へたらしいから、少くも、何がしかの所懷を述べることにならう。

大將は當地に於ける歷史上の偉人に就ても深い感慨があつたらしいが、此の艦型試驗所に於ける艦型實驗の說明に對しては、又他の見地から一入の感動を受けたことと察せられ

る。恐らくこれから國內各地を巡察されても、以上二つのものを除いては、何物も之に匹敵して大將の心を動かすものはなからう。

先づ同試驗所に於ては、當時建造せんとしてゐた偵察艦チエスター號及び戰艦の模型を見た。

抑々此の艦型試驗所なるものは、如何なる仕事をするものかと云へば、造船家が或る船を造らんとするに當り、先づ其の模型を造り、此處で實際に水の上を走らせ、以て速力を試驗し、其の上で數學上から諸種の資料を得、最後に機關の重量、馬力をも決定するもので、造船術上最も大切なる行程である。斯くして建造せられた船が、進水し竣工して海上に活動すると き、計畫のものと寸分の差を生じない立派なものが出來上るのである。

此の日大將に隨行せる人達が驚いたのは、いつもと違ひ大將が軍艦模型の前に立つたときには、彼の眼に一層の輝きがあつたことである。而してどことなく他では見られない熱心な態度を觀取することが能きた。

當日は工廠長のビーチー氏が案內役であつたが、氏も亦大將が模型の前に止り、表面は平氣を裝ふてゐる中にも、東洋の最高專門家たる大將の眼の光つてゐることを認めざるを得なかつた。それは尤のことである。今こそ一模型に過ぎないが、將來確かに米國海軍の一

雄姿と化して、艦隊に加はるべきものであるからである。

次は目下建造中の軍艦に關する各種の製造工場に至つた。

十四吋の大砲でさへ、此の軍艦模型に比ぶれば、大將の注意を惹くことが薄かつた。之は大將が既に世界の各地に於て、多くの兵器製造所を視察してゐるからである。

大將は又大砲の內部を削る各種の刃物工場を見た。中には十五哩もの射距離を有する大砲も製造してゐた。そこでも相當の興味があると見えて、二三の質問があつた。

併し之も大將にとりては、左程珍らしいことでもなかつたらしい。大將は案內者達より もこんなことには、詳しい知識を有つてゐるからであらう。

東鄕大將の米國議院訪問

一九一一年(明治四十四年)八月八日、東鄕大將は華盛頓海軍工廠を訪問し、十四吋巨砲の製造當時世界に於ける最大巨砲にして日本では十二吋以上のものなき時代であつた其他を詳細に視察せられ、更に議院圖書館(コングレス・ライブラリー)を參觀し、國務次官ハンチングトン・ウイルソン氏の午餐

會に臨み、次でアリングトン國立墓地に、前大西洋艦隊司令長官チャーレス・スペリー中將の墓に詣で花輪を捧げられた。同中將は曩に世界巡航の途次、日本に立寄り、東鄕大將とは舊知の間柄であつた。大將は墓前に靜かに默禱せられたが、米國接伴官ボツツ海軍大佐は大將の手を握り、

『余は閣下が米國海軍の愛措止むことなき士官の一人に對してなされた深厚なる弔問に對し、合衆國海軍士官一同に代りて謝意を表したいのであります』

と謝辭を述べた。次で大將一行はロック・クリーク墓地に在る松方金次郎氏の墓に花輪を捧げ長時間墓前に立ちつくされた。金次郎氏は松方幸次郎氏の令弟で、アナポリスの海軍兵學校に在學中、十歲の青春を以て異鄕に病死した前途有爲の青年であつた。

參拜を終りたる東鄕大將は豫定の如く、內田大使、谷口副官、現軍令部長平賀大使館附武官、國務卿祕書チヤンドラー・ヘール氏及特別接伴官ボツツ海軍大佐を隨へて、午後四時半議事堂の上院側に到着せられた。議場に於てはケンタツキー州選出上院議員ブラッドレー氏が、アリゾナ州憲法に關する演說の最中であつた。大將は先づ副議長シャーマン氏の事務室に於て、同氏と挨拶を交換したる後、副議長は大將を議場に案內して議長席を進めた。大將は除ろに副議長の自署帳に署名されると、ニユー・ヨーク州選出議員ルート氏起立して、

『吾々の名譽ある賓客を歡迎するために十五分間會議を休憩すべきである』

と緊急動議を提出し、全院一致この動議が成立すると、副議長は十五分間の休憩を宣した。議員連は列をなして、演壇の前に起立せる大將の前を通過し、副議長は大將を一々紹介したのである。かくして上院の歡迎を終り、大將は再び副議長の事務室に歸り、下院に赴く準備中の處へ、突然ニユー・ジヤシー州選出上院議員マーチン氏が一人の小男をつれて室内に侵入し來り、

『閣下、私は私の選擧人の一人なるバツク博士をお引合せ致したいのであります』と言ひ終るや、博士は大將と握手した。米國政界に於ける大將の人氣も推して知るべしだ。

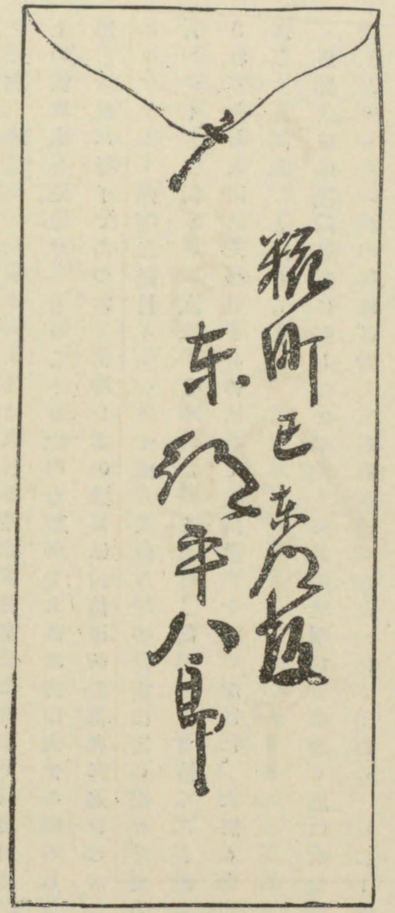
東郷大將の一行が議事堂の長い廊下を渡つて下院の議長室に到り、議長クラーク氏と挨拶を交換してゐる間、議員席では、議場の現況を甚しく妨害せずして、國賓歡迎のために議事中止の方法に關し、交渉中であつたが、議事規則に明るい連中が其方法を決定したのであらう。時計の間に待つて居られた大將が側面の入口より議場に現はれると、議長は東郷大將の來着を宣し、上院と同樣握手の禮を行ひ、議長クラーク氏は約二百名の出席議員を一々紹介した。給仕さへも議員の列内に飛び込んで、大將に握手を求める騒ぎだ。此の歡迎が終つて議員が着席すると、議席の各方面から『演説!』『演説!』と發言するものがあつたが

大將は莊重に頭を振つて、議長を通じて謝意を傳へられんことを乞ふた。次でニユー・ヨーク州選出議員フイツゲラルト氏は大將を豫算委員室に案内して、同委員會が毎年五億弗以上の豫算案を通過せしむることを説明したので、大將は内田大使を顧みられて深く興味を感じられた樣子であつた。(當時日本の豫算は四億圓約二億弗に過ぎなかつた)。此の時ニユー・ジヤシー州選出議員キンヘッド氏が大急ぎで委員室に入り來り、委員の一人を捕へて「バンザイ」とは何ういふ意味かと尋ねた。それは『萬年も生き給へ』といふ意味だと聞かされて、忽ち大將に近づき手を伸ばして『萬歳』を浴せかけた。大將も微笑を浮べながら同じく『萬歳』と應じられた。

東郷大將の議院訪問に際しては、兩院とも議院規則などは全く嵐に吹飛ばされた形で、傍聽人までも此の海の英雄に對して讃辭を浴せかけたほどである。殊に下院ではヤンキー獨特の歡呼と『萬歳』の聲とが和して一層賑かであつた。大將は上院副議長シヤーマン氏及下院議長クラーク氏に對して、兩院議員の表示せる熱心なる歡迎に對して厚く謝意を陳べて辭去し、海軍大臣代理ウィンスロップ氏のメトロポリタン倶樂部に於ける歡迎晩餐會に臨まれた。

ウエスト・ポイントの一日

八月十二日、紐育（ニューヨーク）イブニング・メール紙報、

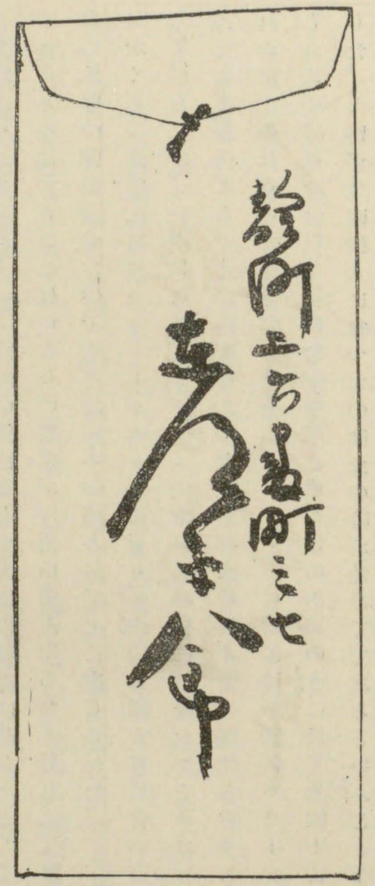


元帥の封筒署名（一）

三十分大統領の快走船メーフラワー號に乘じて今日一日をウエスト・ポイントに過すべく昨夜華盛頓より紐育へ歸へられた東鄕大將は、西第七十九街の町端から、午前八時出發された。ウエスト・ポイントの合衆國陸軍士官學校では、生徒が大將の爲に閲兵式を行ふ筈で大將は又、同校長バリー少將の午餐を受けることになつてゐる

ハドソン河を下る汽船の乘客連は、メーフラワー號を認め、同號に乘れる有名な賓客に對して遙かに歡呼した。

大將の海軍に於けるが如く、陸軍に於て有名な黒木將軍がハドソン河を上つてウエスト・ポイントに行かれたのは、今から四年前のことであつた。今日は大將の航行には最も完全な天候であるが、黒木將軍が遡航されたときは雨と霧に覆はれて、殆んど船の衝突を惹起するほどの悪天候であつた。



元帥の封筒署名（二）

ウエスト・ポイントに一日を過ごした後、メーフラワー號は悠々と河を下り、大將は明日の奮闘的一日のために、靜養の夕を船内に送られる筈である。尙ほ大將は明日オイスター灣に於ける前大統領ルーズヴエルト氏の午餐に臨まれることになつてゐる。

大將がウエスト・ポイント訪問の爲、西第七十九街の町端に赴かんとして、ニッカーボッカー・ホテルを出たときには可なりの群集が歩道に並んでゐた。群集は大將の姿を見ると一齊に歡呼の聲を浴せたので、大將は擧手の禮を以て之に應じられた。

かくして東鄕大將はウエスト・ポイントに至り、未來の米國士官に會ふことを熱心に期待して居られた。一兩日前アンナポリスの海軍兵學校に行かれたときは、三級共練習航海に出てゐて、閲兵することが出來なかつた。東鄕大將は非常に規律を重ずる人で、よく諫練された兵士を見るのが好きだ。ウエスト・ポイントに於ては、午餐前バリー少將其他の士官達と公式の接見を行ひ、午後のお茶の會に於て、米國士官の夫人連に接見した。大將が米國婦人に會つたのは、此の時が始めてであるといふことだ。

紐育新聞倶樂部の歡迎會

八月十六日紐育アメリカン誌報、

東鄕大將は昨夜、當地日本人會の主賓として、プラザ・ホテルに開かれた晩餐會に出席された。來會者四十五名、ホテルは五萬弗に價する黃金の食器一式を使用し、二呎の高さを有する美しい銀製のカップを大將に贈呈した。卓上には大將の旗艦三笠の模型が飾られてあつた。此の模型は砂糖を以て製り、電飾及無線裝置が施されてあつた。大將は之を見て非常に喜ばれた。旗艦は硝子箱に納められ當市の日本人倶樂部に寄贈された。

此の日東鄕大將はブルークリン海軍工廠を參觀せられ、入渠中の艦船を巡視したる後、ロイツ海軍中將の饗應を受けられた。次で大將は紐育新聞倶樂部の歡迎會に臨まれ、會長マッコーレー氏及一委員の出迎を受け、歡迎會は六階の會議室に於て開かれ、立食の饗應を受けた後、倶樂部内を巡視し、サンチアゴーの海戰中撮影されたといふ、火災を起して將に沈沒せんとする西班牙艦隊の寫眞を仔細に批判せられた。大將は同倶樂部の訪問帳に、アンド

リユー・カーネギー氏の名の次に署名された。

吾人は何故に東鄕大將を讃美するや

八月十二日、紐育レビュー報、

米國民が熱意を以て東鄕大將を歡迎することは、此の特殊の時期に際し、各方面に亘りて最も有意義なことである。第一、米國は新聞紙の作りたる日米戰爭の幻影に共鳴せざることを立證した。第二、米國民が最も重要なる世界的平和捉進運動に指導さるゝ時期に際しても、尙ほ且つ軍人を最も親しく愛するといふことを示したことである。東鄕大將は徽章尾軍人にして、併かも戰勝の月桂冠を荷へる軍人として、友誼的訪問のために我國に立寄られたのである。吾人が喜んで大將を迎へる所以のものは、民族的理由にあらずして、大將はより一層大なる人間を粉碎したる能力を發揮し苦もなく其の任務を果たされたことに存するのである。

合衆國と雖して小なれども東鄕大將を出したる偉大なる國家との間には、從來何等の衝

突を來すべき危險の存在を認めなかつた。兩國民の利害は如何なる意味に於ても、一致するものではない。兩國間の地理的距離は廣大なものである。相互に死命を制するが如き如何なるものをも兩國は持つてゐない。英、米、佛間の平和盟約は當事各國の何れにも價値あるものであらう、かゝる條約文書は日本には不必要なもので、全く無駄なものとなるであらう。

或る記者は小褐色人は排斥せざる可からずと、努めて吾人に教へんとする、然れども吾人は之を信ぜんとする考へは毛頭ないのである。吾人は世界各國中、最も暴虐にして腐廢を極めたる、殺人的露西亞を擊破したる彼等を愛するものである。且つ又吾人は彼等の脉管を流るゝ戰鬪的血液を一層愛するものである。吾人は最近の國際協約に於て實證したるが如く、平和の愛好者である。然かも吾人は何人に對しても、其の衣服を踏ましめざる男らしき男に對する吾人の見解を隱匿するわけにはいかぬ。吾人は滿腔の喜びを以て、東鄕海軍大將を迎ふるものである。

東鄕大將の前大統領訪問

八月十四日、紐育トリビューン報

昨日オイスター灣停車場に、一人の小女が護謨毬をもつて遊んでゐたが、東鄕大將の特別列車が到着すると、件の小女は毬をプラットホームに投げつけ、それが跳づんで大將の顎に打突かつた。小女は、

『御免下さい、貴下は東鄕大將でいらつしやいますか』と尋ねた。大將は微笑を浮べて、

『私は東鄕ですが、御望みどほりしてあげませう』と答へた。小女は

『失禮ながら握手をお願ひしたいのです』と答へた。大將は『サア握手をしよう』と右手を展べられたので、小女は熱意をこめて握手の禮を行つた。これがオイスター灣停車場に於ける大將の歡迎であつた。

東鄕大將と其の一行とは、昨日十二時三十分オイスター灣に到着、ルーズヴエルト氏の自動車で、サガモーア・ヒルに到着した。一行中にはウツドフオード將軍が加はつてゐた。ル

ーズヴエルト氏は邸宅の玄關に大將を迎へ、

大將!! 如何ですか御機嫌は?』と尋ねられた。

『相變らず頑健です』と大將は答へた。

『御這入り下さい、昔流儀で語り合ひませう』とルーズヴエルト氏は勿論軍人であつたが、寧ろ平和の愛好者として、日露戰爭の調停者たるルーズヴエルト氏は、大將より甲冑を着けた二呎餘の武士の彫像を贈られたので、大將に對して頗る感興を唆られた。此の訪問記念品は金屬を磨き上げた精巧な細工物で、日本國旗を以て飾られた、重いマホガニー材の箱に納められてあつた。大將は數ヶ月前日本出發の時より、此の贈物を秘密にして、旅行中注意深く保管した品物であつた。大將は書齋に這入つたとき、微笑しながら 私は今日偉人に會ふのである』と一言もらした。午餐には主客共二時間に亘り談話を交へ、其後ヴエランダに一時間を費やした。始終戲談を語るルーズヴエルト氏の聲が聞え、續いて大將の大笑ひする聲が聞えた。

『大將!! 貴下は今日ウエスト・ポイントに行く意志はありませんか』とルーズヴエルト氏が尋ねると、大將は、

否、私は昨日陸軍士官學校を參觀したやうに思ひます。私は寧ろ此處に坐つて、貴下と靜

かに話した方がいゝと思ひます」と答へ、更に、

『士官學校の生徒は殆ど完全に訓練されてゐるやうに思ひます、命令を正確に實施するには驚いた。これは編制がうまくいつてゐるからだらうと思ひます』と陳べられた。

このとき二、三の日本人寫眞師がやつてきて、撮影の許可を乞ふたが、ルーズヴエルト氏は之を許さなかつたので、彼等は悄然として紐育へ立ち去つた。ルーズヴエルト氏は一通信員に對して、本日の午餐は絶對に私人的のことで、私は來客の姓名さへ話さうとは思はぬ。東鄕大將はたゞ私を訪問したいと考へ、私は誰だ午餐を供したまでゝ、私共が語り合つた問題は發表の限りではない。吾々兩人は、たゞ愉快な日を共に過ごしたと云ひ得るのみであると告げられた。大將は歸途直にカネーギー・ホールの歡迎會に出席された。

大將とワナメーカー氏

——費府の最終日——

費府滯在の最終日である。暑さが殊に烈しかつたので大將は軍服を捨て、パナマ帽に紺

サージの平服、白直着といふ輕裝で隨員と共にベルヴエー・ストラットフオード・ホテルから自動車を驅つて、米國の有名な實業家ジョーン・ワナメーカー氏のデパートを訪問された。ワナメーカー氏は鄭重に大將を迎へ、偉人の訪問を受けて身に餘る光榮を感ずる旨を陳べ、更に言葉を續けて、

閣下は名譽ある大艦隊の司令長官で、余は微々たる二商船の持主たるに過ぎないのでありますが、かく兩人が對等の位置に相並んで挨拶し得るのは、眞に光榮に存ずる次第であります。閣下は平和の爲に大砲を以て鬪はれ、余は平和の爲に相互の利益を計り、貿易の手段を以て兩國民を接近せしむる爲に鬪ひつゝあるのであります。それは日本の製造家の爲に米國の市場を開放することを種々の方法を以て、一層力强く我國民に訴へつゝあるのであります——卽ち兩國の政府間に締結された條約の文書以上に有效且つ有力にやるのであります』

大將は米國有數の實業家との、此の會見を以て非常に喜ばれ、且つ氏の歡待を謝して別を告げ、第七街及スプリング・ガーデン街に在る合衆國造幣局に到り、同工場の貨幣鑄造法を見學し、一行は大に興味を唆られた。金貨一萬弗入の袋は後から〳〵と運び出される。現在此の工場にある金貨の總額が、三億一千萬弗であるといふ說明を聞いて、流石の大將も『夥

しい金額である』と驚嘆された。

造幣局の見學を終りたる後、一行は有名なる獨立閣に立寄り、殆ど一時間に亘つて、自由の鐘其他歷史的記念物や偉人の肖像等を仔細に觀覽し、ジョージ・ウシントンの肖像の前に立つたとき、大將は脫帽し靜かに『彼は偉人であつた』と追懷せられかくて一行は歸途に就いた。今夜大將は紐育へ向け出發される筈である。

大東鄕と小トーゴー

米國首都の公式訪問を終れる東鄕大將は、八月九日(明治四十四年)午前十時華盛頓を去つて、バルチモーア市に向はれた。此日バ市市民は偉大なる海の戰將を迎へんとして、マウント・ローヤル停車場に蝟集し、押すな〳〵の騷ぎであつた。十一時東鄕大將を乘せた列車がプラットホームに靜に停車し、大將が隨員を隨へて其の颯爽たる姿をプラットホームに現すと、群集は一齊に歡呼の聲をあげた。市接待委員長ベーカー氏は眞先に進んで大將に紹介され、次で同氏は大將を市職員一同に紹介した。此時活動寫眞班は盛んに撮影を開始し

た。

東鄕大將の一行が盡く市職員に紹介された後、最も愉快な場面が展開された。それは當年六歲になるトーゴー・マッシュースと呼ぶ可愛い男の子が大將に紹介されたことだ。大將は豫め電報を以て此の少年と會合の打合を受けてゐたので、此の少年に對しては特に興味を感じて居られたやうに見受けられた。

小トーゴーは兩親のマッシュース氏夫婦に連れられてプラットホームに待受けてゐた。眞白い水兵服を着た少年と、同じく純白の軍服を着た東鄕大將とが握手した光景は全く一幅の畫面であつた。大將は從來外人と對談するときは通譯を介するのが例であつたが、此の少年に對しては自ら英語を以て、其の頭を撫でながら、『私は君に會つて喜ばしい、私はいつでも君の幸福を祈つてゐます』と陳べられた。此時マッシュース夫人は美しい薔薇の花束を大將に捧げた。

小トーゴーは、大東鄕が六年前に日本海大海戰に於て、前古未曾有の大勝を博した其の日に生れたのである。兩親は日本の海將の鬼神をも欺く壯烈な働き振りに感動し、生れた子供に對して、偉大なる海の勇士に肖かり、トーゴーと命名したのである。兩親とも今日まで崇敬措かざる此の英雄がバルチモーア市を訪問し、而かもトーゴーとさへ命名せる自分の

子供が榮譽ある海の戰將に挨拶するの機會を得やうとは夢想だにしなかつたのである。眞に千載一遇の奇緣と云はねばならぬ。兩親の喜びは如何ばかりであつたらう。マッシュース夫人の大將に捧げた薔薇の花束には、

閣下の幸福、長壽、健康及安全なる旅行を祈り奉る。

東鄕大將閣下へ

と記したカードが添へられてあつた。

小トーゴーとの劇的會見が終ると、大將一行は停車場外に準備された自動車の方へと進んだ。群集は大將を迎へんとして一時に犇めき渡る。停車場の外へ出ると、多數の寫眞班が一齊にレンズを向けてくる。大將は少しも其の煩を厭はず自ら適當の位置に進み、ベーカー氏其他二、三の接伴員と共に最後まで撮影せしめられた。

かくて東鄕大將は接伴官ボッツ大佐及ベーカー氏と同乘し、式部掛の先導にて停車場よりマウント・ローヤル街に出で、市公會堂の盛大なる歡迎會に臨まれたのである。

小トーゴーより

ガヴァノアス島に於ける東鄕大將

八月十七日、紐育ヘラルド報、

『米國の海軍力は甚だ強大で、工業の發達と企業心の旺盛なのには全く驚いた。又米國の婦人は最も愛嬌と趣味に富んでゐる。私は米國民の鄭重なる待遇に感動した』

右は東鄕大將が昨日午後、當市を去るに臨んで記者に語られた言葉である。大將はボストン市に到り、今明日、コッド沖に行はるゝ米國大西洋艦隊の運動を視察さるゝ筈である。

當市滯在の最終日には、ガヴァノアス島に於て催されたグラント少將の午餐を受け、續いて歡迎會に臨まれ、米國陸海軍の將星並に多數の高官と會合された。大將一行は東第二十三街の端にある、紐育ヨット倶樂部の上陸場まで出迎へた、グラント少將の汽艇に乘つて島の營所に到り、多數の米國陸海軍將校は波止場で大將を迎へた。之より先、船飾を施せる船は市外にある數個の兵營より、多數の士官連をガヴァノアス島に運んだ。市長ゲイノア氏は

火災警邏船で到着された。

ガヴァノァス島は端から端まで日米兩國の國旗を以て裝飾を施され大將が上陸されると十九發の禮砲が發せられた。大將は禮砲施行中擧手の禮を行ひ、グラント少將が大將の手をとつて饗宴場に向はんとしたとき、軍樂隊は『君が代』の吹奏を始めた。吹奏の終るまで、大將は不動の姿勢を取つて頭を下けて居られた。

午餐はグラント少將の邸宅で催され、宴後一同は芝生に下りて撮影した。續いて大將との接見がコルビン・ホールで行はれ、少將夫人及師團幕僚はグラント少將の指揮を受けて其の補佐役となり、四百名以上の人々が東鄕大將に紹會された。接見の最中、接見場に至る階段に多人數の進行し來る足音が聞えたかと思ふと、銀髪を戴ける五十五人の南北戰爭に參加せる古武士が步調こそ揃はね青年の燃ゆるが如き眼付で、接見場に進入して來た。これがため、接見は一時中止の形となつた。

グラント少將は一步進み、此の新來の人々を指し招ぎ一人々々東鄕大將に紹介し、大將は深く感動された。グラント少將は彼等を芝生に整列せしめ、左の如き一場の挨拶を試みた。

『本日諸君が此の式場に來會せられ、我々に光榮を添へられたことに對し、余は衷心より感謝せんとするものである。諸君は此の式典に威嚴を加へられ、感動を與へられた。諸君は余の父の古い友人なりしことを東鄕大將に告けたるに、大將はことのほか喜ばれた。

余は諸君が來會されたことを非常に嬉しく思ふのである』

當日ガヴァノァス島に擧動不審の者が居たといふ噂があつたので、警戒の任にあつた人人は不安を感じた。それはァルバート・ブリュスターと呼ぶ密偵が、絕えず東鄕大將の身邊につき纏つてゐたといふので、直に捜索を開始し、密偵が大きな藪蔭に隱れてゐたのを發見して逮捕した。彼は自ら露西亞人と稱し、ガヴァノァス島に來りし目的を尋問したるに、東鄕大將を好く見たいためだと答へ、自ら行商人と稱し、好奇心に驅られて島へ來たのだと告白した。

南北戰爭の勇士コップ中佐の書翰

八月二十六日、ナシュア、テレグラフ報
テレグラフ紙編輯長足下
東鄕大將が最近ボストン市滯在中、小生は大將に會見することを得候ことは、小生の最も

光榮とする所に有之、此の會見談は貴紙讀者にとりても興味深きことゝ存じ、餘白も有之候はゞ御掲載相成度と存じ候

小生は從來より現代に於ける最大偉人の一人なる東郷大將と會談せんことを熱望致し居り候處、最近大將がボストン市に來訪(らいはう)せられたるを機とし、如何にもして會見せんと欲し候も果して大將に近づき得るや否やを懸念致し居り候、然れども努力するに如かずと存じ小生は此の目的を達せんがため去る土曜日ボストン市に出かけ候

ツウレイーン・ホテルの事務所に於て大將の在否を尋ね候處、大將は市街見物のため外室せられたる由に付、然らば大將の代表者又は幕僚の何人かに面會(めんくわい)し能はざるやと、ホテルの事務員に尋ね候處御望みならば名刺を取次ぐべしとのことにつき、小生の名刺を差出し候處給仕は早速小生の名刺を持ち去り、間もなく首席幕僚谷口海軍中佐(現軍令部長)面會すべしとの返事なりしを以て、小生は昇降機に乘り、給仕の案内にて直に谷口中佐の室の入口に立ち、戸をノック致し候處、純白の軍服に勳章(くんしやう)を佩用したる上品なる日本紳士が戸を開き候小生は此の紳士が東郷大將の首席幕僚谷口中佐なることを感付き候、中佐は愉快に小生を招じ入れ候室には二、三の幕僚及一、二名の接伴員たる米國士官居りたることゝ存じ候日本士官の一人はタイプライターの前に座し居り候小生は谷口中佐に對し、來訪の目的及小生

の經歷、卽ち小生が南北戰爭に從軍したる旨を述(のべ)候處中佐は直に之を理解し、甚だ興味を感じられたるが如く、巧なる英語を以て中佐自身のことをも語られ、次で平賀中佐其他に紹介せられ候

小生が東郷大將を訪問せる一目的は、拙著南北戰爭回想錄一部を大將に贈呈するためなりしを以て、此のことを中佐に告げ候處、大將(たいしやう)は必ずや此贈物を喜んで受納せられ、且つ通讀せられて多大の興味を惹かるゝならんと中佐は答へ候又中佐は日露戰爭に從軍し、東鄕大將麾下の軍艦に在りしことなど語られ候

谷口中佐は突然小生に對して、大將に會見を希望するや否を問はれ一驚を喫したるも、實は大に望ましきことなりと答へたるに、中佐は大將の室に小生(せうせい)を案內したるも、不在なりしため、多分大將は更衣中なるべければ、後に再び來るべしと中佐は申候然れども東鄕大將は間もなく隣室より出て來りしを以て、中佐は小生を大將に紹介致され候東鄕大將の容貌は寫眞に見るよりも一層好感を與へ、其顏は斷乎として理智に輝き、體軀小なれども力強き人格を具備せらるゝを以て、何處に於ても人目を惹(ひ)くべく候、大將は最も慇懃に小生を迎へ、且つ椅子を進められ、僅かに數分間なれども、大將との會見は最も小生の心を滿たし候大將の英語は不完全なれども小生の陳べたることは、よく了解せられたるが如く最初普通の挨拶

を交換したる後は徹頭徹尾日本語を以て谷口中佐に語り、中佐は之を小生に通譯致しくれ候大將は小生の來訪を謝し、小生の贈りたる書物は故國に持ち歸り喜んで通讀すべしとのことに候

やがて谷口中佐はベントインキを持ち來り小生の書物に署名すべき旨乞はれ候に付喜んで署名したる後、大將等の好遇を謝し別れを告け候

東郷大將と小生との此の愉快なる會見は、當日官吏以外には何人にも面會を謝絶すと發表せられたる事實に徴して特筆すべきものにして、小生のみが例外たりしことは小生にとりて一種の謎に有之、又何人も爾く感ずるところなるべしと存じ候然れども小生の理論を以てせば、谷口中佐が興味を以て研究せられたる南北戰爭の從軍士官の代表者として小生を理解せられたるものと存ぜられ候

小生は東郷大將及其幕僚との會見により、日本人の眞性格に關する默示を受け候小生は一九〇四年此の小國民が强大なる露國に抗し、砲火を以て相見え、恐るべき鬪爭の後、東洋に覇權を握りたる所以を一層明かに感得致し候

東郷大將は現世紀に於ける最大偉人の一人にして、何人も能くすることなき大責任を負ふ日本艦隊の長官として大將の勇斷は、日露宣戰布告前既に已に著大なる人物たらしめ候、機を掴むに敏にして、早くも旅順港外の露國艦隊をして不具ならしめ、殘餘の敵艦を港内に封鎖し、以て日本陸軍の行動を可能ならしめ、最も重要なる戰略地上を獲得せしめ候而して後には大將の巧妙なる戰術により、ロジエストウエンスキーの率ゐる露國大艦隊を全滅せしめたることは、日露戰史の讀者はよく知る所に有之候日露戰爭に於て、日本が大勝を拍したる名譽は何人も東郷大將に一歩を讓るべきものと存じ候

エルブリツヂ・コップ

（尙以上の記事の外に數百頁の「東郷大將米國訪問記」があるが、多少の重復せる箇所もあり、頁數に限りある事とて抄錄して以下を省くことゝした。）

逸話餘錄

人間東郷を描く

和田英作氏談

畫家が彩管を握つて人の肖像を描く時、畫家はカンバスの上に描かんとする人の魂を躍動させその全人格を畫面に表現しようとする、――私が東郷元帥の肖像畫を畫いたのはもう十年も昔のことだ、だが、年と共にうすれゆくはずの印象と感激とは、今尚はつきり私の腦裡に刻み込まれてゐる、水交社の一室に掲げられてゐた思ひ出の元帥肖像は、大震災に燒かれてしまつたが、私の生くる限り、私の魂に燒きつけられてゐる。

大正九年の冬暮近く、私は毎日一ケ月餘りも麹町の東郷元帥邸に通ひつゞけた、元帥は來客を斷つて毎朝十時から二時間ばかりモデルとなつてキチンと立たれた、肖像は等身大の立像で、虎の皮の上に海軍大將の正裝をつけて直立し右手に軍帽、左手に元帥刀を握り、向つて左側には懸がい作りの白菊が、床しい香りを放つてゐた。

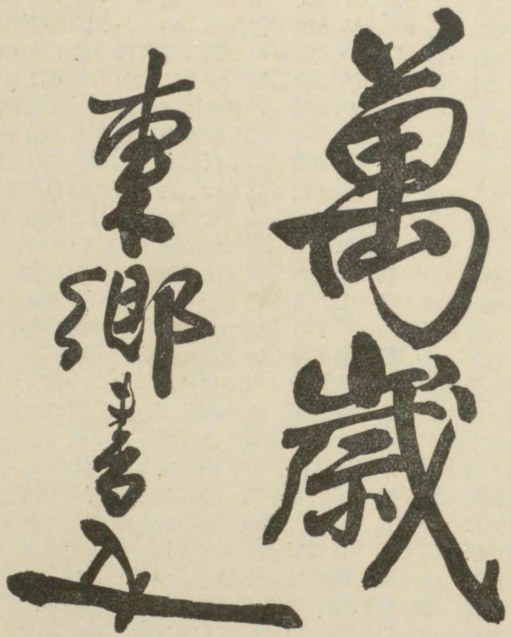
金モールの正裝の上には、肩から大勳位の綬を帶び、その上胸には武勳を語るまんぢう型

の勳章を十幾つもつけるので、その目方だけでも大變なものだが、快く私の注文に應じられたには恐縮した。

元帥に接しての最初の印象は、一言にしていへば『慈父のやうな感じ』のする人、慣れてくると、何となく引きつけられるやうで『ひざの上に抱かれてみたい』といふやうな氣がした、物靜かで巧まずして謙そんで『人生の修行を完成した人』のやうに思はれた、自ら威嚴が備はつてしかも溫容、『單なる一個の武人ではない、この大きいありのまゝの人間東鄕の眞面目をおれは畫かねばならんぞ』と思つた、しかし、元帥が正裝をつけて、元帥刀をしつかり握つて、私が『さあ、これから畫きます』といふと、元帥の表情はがらりと一變する、兩眼は何物をも威壓するやうに鋭く光つて、顏面はほとんど微動だにしない、そこには大和武人東鄕平八郎元帥が嚴然として立つてゐる。

三笠艦上に艦隊を指揮する『海の名將軍』がヂッとにらんでゐる、『私の知つてゐる元帥、私の感じてゐる慈父の如き元帥はこんな人ではない』とは思ふが、私の筆の力は、元帥の澁れるやうな武人としての精神力に、やゝもすれば壓倒されてしまふ、私は全く『まるで違つた人の肖像』を畫いてゐるやうな氣がして困つた。

繪が出來て水交社の一室にかざられると『平常の元帥とは感じが違ふ』といふ評判だつたが、私はその時つく〴〵と思つた、『元帥は恐らく、武人としての東鄕、日本海軍の東鄕、公人としての東鄕の面影を殘すつもりだつたのだらう、だからカンバスの前に立つと、武人東鄕の氣力が滿ち滿ちて、その氣力の中に自然私の筆も吸ひ込まれたのだらう』と、一體元帥は骨の太さうな、力の入つたガツシリした身體だが、柄は餘り大きくない、しかも顏色は赤味が少く、ひげはほとんど白く、頭髮も白髮に近いといつてもいゝ位で、『やさしい、いゝお爺さん』なのだが、あのポーズされた時の態度と氣力とは、今以て私には强い〳〵印象となつて殘つてゐる、私が元帥の肖像



を描いてゐる時、ある日『和田さん、これは參考にならんか』といつて、ラヴロといふ畫家の描いた元帥の肖像の寫眞畫をくれた『濟みませんが、記念に一筆』とおねだりすると元帥は『ハィ〳〵』といつて何のこだはりもなく、無雜作に『贈和田君、海軍大將東鄕平八郎』と書かれた、私はうれしかつた、いつか世間話をして、『英國皇帝の戴冠式にイギリスへお出の時にはあなたの母校兵學校などで大歡迎だつたでせうね』といふと、元帥は『あれは日露戰爭の後だつた、母校の歡迎は涙が出るほどうれしかつた、演說をといふので困つたが、副官の谷口（現軍令部長）に書いてもらつたのをそのまゝ讀んだよ』と答へた、元帥は英國には相當長くゐたのであちらの言葉に困る人ではないのに、演說一つにも大事をとるのはえらいと思つた、元帥は決して自慢話をしない、日露戰爭當時の話などもきゝたいと思つたが、元帥はきいても一切戰爭の話をしなかつた、名將功におごらずだ、これもその當時の話だが、元帥のところへ今の谷口軍令部長が臺灣の馬公港の司令官になつてゆくので暇ごひにこられた、元帥が『今晚お閑なら三人で一緒に飯を食はう』といふので私も送別の御馳走にあづかつた、谷口さんと私とでいろ〳〵艦の話をして

私が『繪かきに艦の知識がないので、大演習の畫をかけなどといはれると大分困るやうですよ』といふと、谷口さんは『艦はいゝな、大洋の眞たゞ中で、金色の雲、まばゆい雲の彼方から太陽がのぼつてくる時の壯大な景色など、陸ではとても見られないからなあ』と美文ばりで海上生活をおう歌した、すると默つてゐた元帥は、ボツ〳〵と鹿兒島辯を交へて『和田さんうそですよ、さういふ綺麗な雲が出るやうな朝燒けの時には、艦乘りやあビク〳〵してキンタマが上つたり下つたりするものですよ』といつて谷口さんの美辭麗句を冷かした。

謹嚴一點張りの樣に思はれてゐる元帥にこの率直自然な、そしてつくらぬユーモア——私はその時元帥の心の奥底までのぞいたやうな氣持ちがした、私はもちろん東鄕元帥の全部を知らない、釣鐘はしゆ木が大きければ大きい音をだす、元帥にぶつかつた私といふしゆ木がもつと大きかつたらもつと大きな響きがきけただらうと思ふ。

（昭和五、七、一四、東朝紙より）

一念元帥を動かす

東郷公園を作つた鴨下老人談

東京を西に去る約二十里、武藏野の眞つたゞ中、滿目の綠の中に、高き臺石とも二丈もある東鄕元帥と乃木大將の銅像が默然として立つてゐる——といつたところがわかるまい。東京池袋驛より飯能を經て西走する武藏野線の終點、吾野驛に降りて平たんなる縣道を約八丁、そこに今の世には珍しい人物鴨下淸翁の一生を通ずる苦心と努力の結晶である東鄕公園がある。

公園といつても四五町歩の小山で、その山の中腹に元帥の正裝をした東鄕さんの銅像が左手に帶劍の柄を握り右手に元帥帽を持つ元帥の特長である例のうつむきかげんの姿勢で大地に生えたやうにがつしりと立つてゐる。（前卷寫眞版口繪參照）

そして同じ山の南端にけやきの大木を背景にして乃木大將の銅像が立つてゐる。これには素晴しいエピソードが無くてはならない。

場面は過ぐる大正十三年、當時の麴町上六番町東鄕邸の玄關先になる。その玄關先に兩手を突き大地に座して同家の玄關子に哀訴歎願する一老人がある。

粗末な木綿の着物を着てゐるが、はかまをキチンとしめてゐる。實直といふ字が人間の形をかりてこの世にあらはれたら定めしこのやうな老人になるだらうと思はせるやうな六十近い老人だ。この老人は埼玉縣入間郡吾野村坂石に分靈ます御嶽神社の先達鴨下淸八と名のつて既に三年前から半年に一度乃至は二度東鄕邸を訪れて元帥に面會をもとめて、そのたびごとに玄關拂ひを食つてゐる人物だ。

この日も老人相變らず門前拂ひを食つた。七八回目の玄關拂ひだ。老人思はず大地に泣き倒れて歎願した——

「何卒今生一度閣下に御意得たい。怪しきものではございませぬ。度々申しあげましたるが如く武州の片ほとりに住居致しまする御嶽教の先達でございます。元帥閣下を御慕ひ申しますあまりにかくは失禮をかへりみず日參致しまする、何卒々々」

何といつてもその場を去らうとはしない。老人は更に語を次いで

「私は先年日露戰爭のみぎりバルチック艦隊が何日の何時何分に朝鮮海峽にさしかゝる

と豫言致し的中仕りました、以來閣下の御高風を慕ひ……」

×

玄關子もほとんど當惑した。

「お爺さん、それやあもう何べんも聞いたよ、然し閣下はそのやうな迷信を嫌はれるのでね」

「迷信と申されますが迷信とは眞に遺憾至極……」

といふやうなわけで、手に負へない。仕方がないので玄關子は老人をそのまゝにしておいたところ、老人は夜露が降りる時刻まで玄關先の地面に座して動かなかつたが、やがてせう然としていづこともなく立ち去つた。

×

この事實を元帥は後になつて玄關子から報告を受けた。元帥も思はず腕を組んだ。

「變つた御人ぢや」

元帥がさういふ不思議な感情に囚はれてゐるところへ、せう然として去つた鴨下老人から手紙が屆いた。それが何と七尺にあまる手紙である。御家流の立派な筆跡で細々と書き綴つた七尺の内容は、

「自分が元帥を國民の師表、國家の至寶として敬慕すること、そしてこの限りなき敬慕の意を表するために、私財の全部を投じて元帥の銅像を自分の持山に建てたき意思である　ことを、仰ぎねがはくば何卒一度の面謁を許したまひ、愚かなる一野人の眞情に耳を傾けられたし……」

この綿々たる手紙と、そして足かけ三年にわたる熱情とが元帥を動かした。不日元帥よりの懇篤なる招狀に接した鴨下老人の喜びをこゝに書く必要はない。

×

元帥は心底から、鴨下老人が好きになり、銅像建設の件も快諾した。鴨下老人はほとんど全財産を投じて持山の手入を行ひ、一方日暮里に住む彫像師平塚春吉氏に依囑して元帥の銅像を調製したのである。そしてその序幕式は大正十四年四月十七日に行はれた。元帥は自分から電話を祕書格の小笠原長生子爵にかけて「どうぢやな、一つ行つてみんか」と誘つたさうだ。

×

序幕式の當日は、平素は閑散を極めてゐるこの武州山奥も空前の賑ひであつた。何しろ東鄕元帥が來る！　埼玉縣全縣の神經がこの吾野村坂石在に集中した。知事も、師團長

も、郡長も、村長も、縣會議員も、たれも彼も集まつた。花火は間斷なく打ち揚げられた。鴨下老人が涙をこぼして喜んだのは當然であらう。

×　×

元帥はその日は「よき友」である鴨下老人の家に休憩して、老人の連れ合ひおさと婆さん、總領の國平君以下七人の子供にも會つた。そしてあの重い口から「わいの銅像がこんな靜かなところに出來たからには、もうこの他には要らん」といつて東京へ歸つた。

その後、老人は元帥の勸告で乃木大將の銅像もつくつた。その序幕式は昨年の十一月もつとも盛大に行はれた。かくして東鄕、乃木兩將軍の銅像が武藏野の綠につゝまれて降るやうなせみ時雨を仲よく聞くことになつたわけだが鴨下老人はその後も少しでも金の餘裕があればこの東鄕公園に出かけてゐる。朝でも晝でも夜でも、暇さへあれば公園に入つて掃除をしたり、手いれをしたり、おそらくもう五萬圓は投じたであらうといはれ、しかも老人の家は昔も今も清く貧しい。

（昭和五、八、二〇、東朝紙より）

風呂番の寶物

前卷四二九頁逸話中の「元帥の越中褌」は誤りに付左に訂正本文を掲ぐ。

『何卒此の箱に、東鄕樣のお使用になつた物だと云ふことをお書き下さいまし』

襟に三島館と染め抜いた尻切半纏を着て、素肌の兩膝を端然と揃へ、敗居の外に畏つた壯年の風呂番は、一尺四方位の桐の箱を恭々しく余の前に差出して、叮嚀に頭を下げた。

時は大正七年の三月某日。場所は駿州沼津牛臥の旅舍三島館の一室である。

そこで余は、何が這入つて居るかと、蓋を明けて見て驚いた！　中には越中殿の工夫と傳へらる布切が、縮緬の袱紗に包まれて安置されてゐるではないか。

『一體これは如何したのか』

可笑しさを耐へて訊いて見ると。風呂番はさも得意氣に小鼻を脹ませて、其の來歷を述べたてた。

此の風呂番は、落合倉吉と云ふ二十六七歲の若者で、極めて無邪氣な實體者であるから客

人達に可愛がられて居た。東郷元帥も、沼津滯在の際は三島館を定宿として居られたので、入浴毎に倉吉が其の世話をする、彼れは之を無上の光榮とし常に實々しく働いて居つた。所が某日元帥は入浴の砌り、其の使用の白布が古くなつたので捨てゝ呉れと倉吉に渡された。すると何がさて、平素より神佛の如く崇敬して居る元帥のお肌附と云ふので、彼は之を蜀江の錦よりも貴び、捨てるなどとは存じもよらない。早速指物師方へ驅けつけて桐の箱を注文し、其の中に安置して簞笥に仕舞つて見たが、何うも奪られはすまいかと心配で耐らない。そこで毎晩置場所を變へ、仍且落々眠むらないといふ始末。併し斯程彼が大切にする品物も、元帥の使用品たることを證明する確乎とした書付でも無いと、他人が信じて呉れまい。これが又彼の大なる煩悶であつた。そこで沈思熟慮の結果。誰かに箱書をして貰はう！　と蟲の善い分別を定めた結果、遂に白羽の箭が余に立つたと云ふ有難い次第である。

だが困つた。物が物であるから、まさかに『東郷元帥使用品。小笠原長生識』でもあるまい。明白に東郷元帥と云はずに、それと悟らせるやうな巧い文句はないかしら、文か、詩か、歌かと色々工夫した擧句、一番相應しいと考へたのが狂歌である。そこで勿論東郷元帥などの文字は一切用ひず、自分の名も雅號も記さず、唯左の狂歌のみを蓋の裏に書いて倉吉に返

した。

日本海（二本買）ぐる〳〵まきに敵を締め
きつい手柄を斯くはたち布

倉吉一時は躍り擧つて喜んだが、『それでは未だ解らない』と誰かに唆かされ、再び悄氣込んだのを氣の毒に思つたか如何か、旅客中の一茶目先生、大いに俠氣を見せ、『可し己が書いてやる』と達筆を揮つた、其の文句の意味は御叮嚀にも、『箱中の白布は東郷元帥の使用したるものにして、狂歌を記したるは金波樓主人小笠原少將なり矣』とやつた。斯くして余が苦策はあはれ北邙一片の烟と消え、爰に一場の喜劇が出來あがつた譯である。倉吉悦ぶまい事か、有頂天になつて益々野心を增長させ、續いて狙を付けたのは天台道士杉浦重剛翁であつた。翁は無殘やさうした惡計があらうとは夢にも知らず、東京から着いて休息する間も無いうちに、忽ち襲撃の憂き目に遇ふたのである。『いや私などは』と月並の防禦戰を敷いて見たが、それ位の事で怯むやうな弱敵ではない。『小笠原様もお書き下さいましたものですから』と酷く余に敬意を表し、不得要領な『ものですから』を連發して首尾いかにと窺つた。すると平素から最負にしてゐる倉吉ではあるし、洒脫の一面をも有する翁のこととてウフ、、、と是又不得要領な笑で受け、案外容易く開城して仕舞ひ、さて出來上つた

のが左の名作である。

非レ學二晉時放逸ノ俗一　猶思賢宰苦心痕
誰知縦縷三尺ノ布　留得英雄一片ノ魂

今や倉吉の鼻呼吸は牛臥山をも吹き飛ばす許り。彌が上にも逆上かへつて五條の橋の牛若梧擬に千人斬の大望を起し、來る程の名士を片端から捕つて押へる手際の鮮明さ！公爵も博士もあつたものでは無い。が斯程の勇士も當惑する事件が持上つたと云ふのは、一詩が増し一歌が加はる毎に、外箱を幾重も造つてゆくので、遂に抱へ切れない程に嵩ばつて來た。加之此の逸事が新聞にも出て、頗る有名になつたので、絶えず客から一見を所望される。すると倉吉得意になつて持ち出す。仕舞ふ。復持ち出す。一日中には何遍下手な手品師のやうに澤山の箱を竝べるか判らないので、先生有繋に參つてしまひ、一生の智恵を搾つて別に卷物を拵へ、之を持つて再び勸化に着手したが、彼が異常熱心と無邪氣な愛嬌とは、これにも亦成功して、大正十年には天晴貴重な品となつて居る。

さて斯くの如く、連判帳に揮毫すべく餘儀なくせられた名士中の四五の方々と、其の記されたる文句とを掲げて見る。

倉吉の珍襲を見て白旗と云ふをよめる　直（理學博士　山崎直方氏）

その昔この夷のいくさふね
うちふりて來しはたはこの旗

倉吉に代りて　廣（理學博士　服部廣太郎氏）

向ふからはすれるものそひとすちに
はたらけよとのいましめにせむ

偶土趨紅入（好記念物の意であるとのこと）（これはゲートスベニール卽ち）　靜岳（德川家達公）

大正庚申六月

當年海戰眞無比　赫々勳功屬二此人一
珍重如今三尺布　猶因二微物一感二精神一

大正庚申初夏　蕉葉軒主人（德川達孝伯）

心身清淨　日道人（松平直亮伯）

聖凡一如　一成（陸軍中將　宇垣一成氏）

好事家中には、垂涎三尺大金にて之を讓り受けんと、交渉を開始せる者も尠くないさうだが、『倉様を見損つたか』と、彼はてんから相手にしないで意氣軒昂としてゐる。今や朋輩は彼に『風呂番成金』の尊號を呈し、中には御老中と呼ぶ者もある。這は越中守を利かし

たのであらう。

以上の話は東郷元帥には内密にしてあつたので、固より承知して居られまいと信じてゐた。然るに女中達より聞く所に據ると、其の後元帥入浴の際には、布切を必ず袂に仕舞はれるとのことであつたから、之は變だと夫れとは無しに訊いて見た。すると元帥は余に一瞥を呉れて、

『何うも物騒ぢやからな』と苦笑された。

自らの用事は自ら

鈴木重威氏談

元帥は總て自らの用事は自らこれを必ず行はれる事を、モットーとされてゐるが、元帥に常に親しく接してゐる私なぞは、特にその實感を深くしてゐる次第である。

本書『東郷平八郎全集』刊行に當り、去日元帥を訪れし際の如きは、人手を煩はさず八十四歳の高齢なる元帥が、自ら立つて書齋へ行き、若者さへ重きに堪へざる程の大部厚の參考用洋書數冊をヨチ〳〵と抱へて、やつて來られたるのには、私も吃驚せざるを得なかつた。

斯くの如きはその一例にすぎない。應接間に通され元帥と面談中にても、先づ女中が茶を運ぶ外は、一度として女中やその他の人を呼んで用を命じられた事を、かつて私は見た事がない。總べて自ら立つて用を足される。

元帥の身に着けられたる衣類の質素さ、のみならず什器家具に到るまでが總て質素である。といふよりあまりにお構ひなしの元帥の生活に感服する外はない。

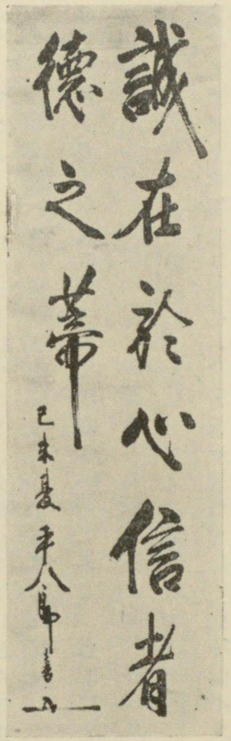
つく〴〵四圍を振り返つて見るに、かつての震災に破損した天井や壁等は、その隙間を修繕した後が見え、別に改造されてはゐないのである。電燈はと見ると、舊式のものをそのまま用ひられ、シャンデリヤなぞの豪華なる裝飾なぞ影だに見出す事は出來ない。

更によく見ると、元帥の召されたシャツは、明治時代に民間に用ひた木綿に白釦つきの質素なる肌着を常用されてゐる。メリヤスでもなく勿論純毛シャツ等の贅澤なるものでもない。

宮中席次第一位たる、實に臣として最高の榮譽を有する元帥の如きは、王族にも竝ぶ贅澤を盡しても不思議でないのに、何たる高潔さであらう。尊しとも亦涙ぐましさを感ずるではないか。

元帥の和歌

元帥の誠意



元帥の眞蹟は、可なり多數民間に散つて秘藏されてゐるが、單なる面識あるものや情實あるもの丶爲めに容易に揮毫を引き受けられるやうな事は滅多にない。揮毫を依賴された理由が、正當であるか、或は同情すべき美しい事實でもある場合には、相手の貴卑を問はず元帥は直ちに筆を執られるのである。

こゝに掲げたる寫眞もその一例であつて、故文學博士物集高見氏が、帝大及學習院教授、宮內省御用係の榮職をなげうち、八十萬圓の資產を傾注して廣文庫刊行事業に專意努力せられたるに對し、東鄕元帥は非常に同情し、精神的援助の意味を以て、物集氏の爲め此の『誠在於心信者德之蒂』の書を贈られたのである。尙現在では物集氏故人となり丸龜市、林法巖氏が藏してゐる。

元帥の和歌

小笠原長生子述

申す迄もなく東郷元帥は歌人ではないが、私の記憶に存する所では、折にふれ述懐された和歌約二十種ばかりあるのを記憶してゐる。勿論和歌といふ方面から論じたならば、或はてにをはが違つてゐるとか、口調が古いとかいふ種々な議論が出るかも知れないが、しかし私の考では、矢張り何處までも元帥の和歌はその誠心の流露であつて、てにをはとか口調とかを超越した所に、云ふにいはれぬ感銘を、誦する者に與へるやうな氣がする、そしてその一つ一つが悉く世道人心の教訓ならざるなしと思ふの故に、ここゝ記憶を辿つてその歌を列擧すると同時に、それに簡單なる解釋を附加へて見たいと思ふ。

○日本海海戰後言志

日の本の海にとゞろくかちどきは
御稜威かしこむ聲とこそしれ

これは日本海海戰の直後に詠まれたものと思ふが、元帥の日本海海戰に於ける詳報にも繰返し強調して居られる通り、何處までも御稜威を戴いて、國民の忠勇の精神から勝利を得たのであるといふも、その精神が能くこの歌に現れて居る。卽ち日の本の海にとゞろくかちどきは、それが御稜威をかしこみ稱へて、巾すまでもなく御稜威によつて斯くの如き勝利を得たのであるといふ聲で、かういふ述懷と思はれる。

○日本海海戰後言志

えびす等がよせくる艦を沈めても
御稜威を畏けよ皇國人

これは五月二十七、八日の日本海海戰が終了し、降伏した敵の艦隊を護衞して同月三十日佐世保に入港された時に詠まれた歌である。

この和歌で、元帥が、一面に於ては何處までも御稜威に及向ふものは擊滅しなければならないが、併し擊滅するその事が決して本意ではない、出來得るならば例へば敵になつても、その敵を殺傷するやうなことはしたくない、しかし如何に敵を憐むといふ慈悲心が起るにしても、御稜威に反抗し奉るものは一步も假借することはならないといふ、元帥の忠義心と、同

時に敵を憐む慈悲心とが實に能くこの歌に現れて居ると思ふのである。

卽ちえびす等がよせくる艦を沈めるといふことは本意でない、併しながら御稜威に反しては容赦できないから、よせくる艦を沈めても御稜威を擧げねばならないよ、皇國人！　かういふ歌であつて、これを以て見ても、決して元帥が所謂好戰の人でないことが判ると同時に、慈悲と忠義を合せ備へられたところ、こゝにこそ實に大和民族の本領もあるものであらうと思ふ。

○旅順口閉塞に從事し人事不省中露軍に收容せられたる下士卒が、開城後歸朝に際し詠みておくる。

勇ましくあたの港を塞ぎぬる
君のいさをは千代もつきせじ

表題にある通り、これは旅順口閉塞に從事して人事不省に陷つた內に、露軍に收容せられた下士卒が可なり在つたが、旅順口の開城後この人達も歸朝した、その時、元帥はこれ等の人達を慰められるべく、三ッ組の木杯を製して贈られたが、この歌は恰度その三つの木杯に散し書にするため詠まれたものである。